

明朝勲戚武定侯郭氏と文学―家譜・年譜―

井口千雪

はじめに

本稿は明朝の勲戚、武定侯郭氏の栄枯転変と文学との関わりを論ずるために、資料編として作成した家譜・年譜である。武定侯郭氏は、朱元璋に従い明王朝の建国を輔けて封爵された郭英を始祖とする一族で、武功を以て名をあげた者や皇室の配偶者を多々輩出し、途中停爵となった時期がありながらも明末に至るまで爵位を保持した勲戚（勲功のある外戚）である。とりわけ五代目武定侯を襲爵した郭勛は、世宗嘉靖帝の寵愛を受けて時めき、国家の機務に参与するほどの高い地位にのぼった（但し嘉靖二十一年に詔獄の内に死す）。郭勛は武臣でありながら文学の才にも秀でていたと謂われ、『水滸傳』、『三國志演義』といった小説を私刻した人物としても知られる。その背景には一族が積み上げてきた文武の業績があったようである。

一 主要史料

家譜・年譜作成の考定に用いたのは主に以下の四種の史料である。

○『明實錄』（中央研究院歷史語言研究所民國五十年刊本縮編、中文出版社、一九六二年）／有限公司凱希メディアサービスが販売する検索システム『明實錄』（繁体字版）も併用。

○『明史』（清・張廷玉ら撰、中華書局排印本、一九七四年）。

○各人の墓碑・祭文・誥券等（主として郭勛刊『毓慶勲懿集』）。

○各人の著作・刊行物。

以下に主要文献を人物ごとに分類して列記する。分類の過度な細分化を避けるとともに、家譜を作成した際の拠り所を後の研究者が辿れるようなような法則を設定した。

(i) 家譜中、二重線で囲む人物の名を以下に項目立てる。

(ii) その配偶者に関する史料も同項目に含まれる。

(iii) その直近の子や孫のうち、二重線で囲まれていない人物の史料も同項目に含まれる。

《三世祖》

郭三公 郭聚 郭山甫

○【郭英神道碑】《第一世代》郭英の項に同じ。

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「始祖追贈陝國公營國公傳」（郭三公（郭參）伝）・二世祖追贈陝國公營國公傳」（郭聚伝）・三世祖追贈陝國公營國公傳」（郭山甫伝）。

※郭三公の諱：『毓慶勲懿集』所収版『郭英神道碑』・『郭興神道碑』は「曹祖三公」・「祖考三公」、郭登撰・郭良補『郭氏家傳』「始祖追贈陝國公營國公傳」も「公諱三公」とするが、四庫全書本『郭英神道碑』は「曹祖參」とする。ちなみに四庫全書本『郭興神道碑』は「曾祖考某」と諱を記載しない。

《第一世代》

郭長君

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「總制公傳」（郭長君伝）。

※本来の名は「郭子興」であったが滁陽王郭子興と同名であったことから「郭興」と改名した（『明實錄』は終始「郭子興」の名を用いる）。

○『明實錄』。

○『明史』卷一百三十一「列傳第十九、郭興」。

○【郭興神道碑】明・劉三吾撰「鞏昌侯神道碑」（大明勅賜開國輔運推誠宣力武臣榮祿大夫同知大都督府事柱國鞏昌侯追封陝國公諡宣武郭公神道碑銘」とも）・明・徐紘撰『明名臣琬琰錄』卷三（四庫全

書本）／『毓慶勲懿集』卷七「碑文」1A～4B。『毓慶勲懿集』所収版には「洪武二十一年歲次戊辰（一三八八）二月吉日立石」と末記。

○【郭興墓誌】「陝國宣武公墓誌」（洪武十七年（一三八四）十二月十三日」と末記）・『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」1AB。

※郭興の子、郭景振らの諱の異同：『毓慶勲懿集』所収版『郭興神道碑』は「子男四人。長景儀、卒于五開。次景振、次景楊、次景拊。女一人」とするが、四庫全書本『郭興神道碑』は「子男四人。長景儀、卒五開。次振。次宗。次官僧」とする。さらに次子については『毓慶勲懿集』卷三「誥券」6B・7A「襲封鞏昌侯郭景振誥」は「景振」、『明實錄』「太祖」卷一百九十七（洪武二十二年（一三八九）八月）辛酉の項の記載は「鞏昌侯郭子興子振」とする。

郭徳成

○『明史』卷一百三十一「列傳第十九、郭興」（附弟徳成伝）。

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「驍騎公傳」（郭徳成伝）。

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「都指揮使敬公傳」（郭敬伝）。

※郭徳成の排行：郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「驍騎公傳」・【郭英神道碑】は郭山甫の第三子とする（四庫全書本『郭英神道碑』は名を「某」として記載しない）。『明史』卷一百三十一「列傳第十九、郭興」に「季弟徳成」（季弟はふつう末弟の意）というのは「郭興より年下の兄弟」という意味か。

郭英

○『明實錄』。

○『明史』卷一百三十「列傳第十八、郭英」・卷一百十七「列傳第五、諸王二、遼簡王植」・卷一百十八「列傳第六、諸王三、郕靖王棟」。

○【郭英神道碑】明・楊榮撰「武定侯神道碑」(「大明開國輔運推誠宣力武臣柱國武定侯贈營國公諡威襄郭公神道碑」とも)・明・徐紘撰『明名臣琬琰錄』卷五(四庫全書本)／『毓慶勲懿集』卷七「碑文」4B～14B(『毓慶勲懿集』所收版には末尾に「正統十年(一四四五)四月上吉日、奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、前征西前將軍節制大同等處諸軍事、諸孫登立石」と署す)。

※【郭英神道碑】の信賴性：…撰者楊榮は「予閱其家傳、考定其大者、次第之而系之」(私はその「家伝」を閲読し、およその事蹟を考定し、順序立てて並べた)と言う。楊榮が参照した「家伝」とは郭登撰『郭氏家傳』(郭登注11参照)と推定され、家門の名声を高めるための脚色が加えられている可能性が高く、記載事蹟の信賴性は考慮する必要がある。

○【郭英墓誌】「營國威襄公墓誌」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」3A～重3B。

○【郭英夫人嚴氏墓誌】明・楊溥撰「武定侯贈營國公郭英夫人嚴氏墓誌」：『新中國出土墓誌』江蘇〔貳〕南京(故宮博物院編、文物出版社、二〇一四年)一一〇／邵磊「新見明代勲貴及其家族成員墓誌考釋」(『文獻』二〇一四年十一月第六期、六一～六八頁、中国国家図書館)／李巍「明代武定侯家族墓誌解析」(『北京文博 文叢』二〇一五年四期、七三～八二頁、北京市文物局)。

○【郭英夫人劉氏墓誌】明・馬諒撰「封太淑人劉氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」41A～43B。

○【郭英夫人何氏墓誌】明・蔚綬撰「故營國威襄公夫人何氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」重36A～37B。

○「追贈定襄伯祖母太夫人戚氏誥」(「景泰三年(一四五二)九月二十日」と末記)：『毓慶勲懿集』卷三「誥券」25B・26A。

郭寧妃

○【郭英神道碑】《第一世代》【郭英】の項に同じ。

○『明史』卷一百十三「列傳第一、后妃一、太祖郭寧妃」。

○『明史』卷一百十六「列傳第四、諸王一、魯荒王檀」。

《第二世代》

郭鎮

○『明實錄』。

○『明史』卷一百二十一「列傳第九、公主、太祖十六女」、「永嘉公主、母郭惠妃。洪武二十二年下嫁郭鎮、武定侯英子也。」

○【郭鎮墓誌】明・方孝孺撰「故駙馬都尉郭公壙誌」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」1B～3A／方孝孺撰『遜志齋集』卷二十二「碑表志」(四庫全書本)。四庫全書本は題に「故」が無い。

○【郭鎮墓表】明・丘潛撰「駙馬都尉郭公墓表」：『毓慶勲懿集』卷七「碑文」40B～44A。

○【永嘉公主墓誌】「永嘉大長公主壙誌」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」39B～41A。

郭銘

○【郭銘夫人徐氏墓誌】明・羅亨信撰「郭母太夫人徐氏墓碑銘」：『東

莞歷代著作叢書 羅亨信集』一七一～一七三頁（上海古籍出版社、二〇一一年）。

○【郭英夫人嚴氏墓誌】《第一世代》**郭英**の項に同じ。

○【郭玪墓誌】《第三世代》**郭玪**の項に同じ。

郭鉦

○【郭鉦夫人高氏墓誌】明・江淵撰「定襄伯夫人高氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」37B～38B。

○明・王直撰「郭氏孝節傳」（大明景泰七年歲次丙子〔一四五六年〕二月吉日、奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、前征西前將軍節制大同等處諸軍事孤哀子登立石）と末記：『毓慶勲懿集』卷七「碑文」14B～20A。

○郭登撰「孝節碑後」（奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、前征西前將軍節制大同等處諸軍事、孤哀子登泣血謹書孝節碑後^{有引}）と題す／「景泰七年歲次丙子〔一四五六〕春二月吉日」と末記：『毓慶勲懿集』卷四「詩」24A～25A。

郭鈞

○【郭鈞墓誌】明・魏驥撰「故昭勇將軍旗手衛指揮使郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」4A～6A。

○【郭英夫人劉氏墓誌】《第一世代》**郭英**の項に同じ。

○「旗手衛指揮使郭鈞誥」／「封旗手衛指揮使郭鈞母劉氏妻魏氏」／「封龔旗手衛指揮使郭瑱母傅氏妻王氏」：『毓慶勲懿集』卷三「誥命」重20A～21B。

《第三世代》

郭玪（「玪」は「珍」の異体字）

○【郭玪墓誌】明・魏驥撰「故明威將軍南京錦衣衛指揮僉事郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」10B～12B。

○【郭玪夫人呂氏墓誌】明・倪謙撰「明故郭太夫人呂氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」44A～45B。

○【永嘉公主墓誌】《第二世代》**郭鎮**の項に同じ。

郭玪

○『明實錄』。

○【郭玪墓誌】明・羅亨信撰「故鎮朔將軍總兵官武定侯郭公墓誌銘」（「正統十二年〔一四四五〕龍集丁卯九月十七日立石」と末記：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」6A～10B／『新中國出土墓誌』北京〔壹〕（中國文物研究所編、文物出版社、二〇〇三年）九〇／『東莞歷代著作叢書 羅亨信集』一四四～一四七頁（上海古籍出版社、二〇一一年）／李巍「明代武定侯家族墓誌解析」（『北京文博 文叢』二〇一五年四期、七三～八二頁、北京市文物局）。

○【郭銘夫人徐氏墓誌】《第二世代》**郭銘**の項に同じ。

○【郭英夫人嚴氏墓誌】《第一世代》**郭英**の項に同じ。

仁宗貴妃郭氏端肅

○『明史』卷一百十九「列傳第七、諸王四」に子の滕王瞻埜・梁王瞻埜・衛王瞻埜の伝がある。

○【郭英夫人嚴氏墓誌】《第一世代》**郭英**の項に同じ。

○貴妃郭氏が家族親類に宛いた手紙：『毓慶勲懿集』卷一13A～20A

「家書、仁廟貴妃十封」（「貴妃書」）。

郭武

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「尚寶司丞斌公傳」（郭武伝）。諱の表記について「公諱斌、一名武」とあり。

宣宗郭嬪？

郭鈺の娘についての確かな情報は『毓慶勲懿集』巻四「詩」24A～25A郭登撰「孝節碑後」にある「先君子追封定襄伯府君（＝郭鈺）不幸早世。卒之日、長兄武五歳、姉三歳、仲兄理二歳、登始生三月」という記載のみか。民国版『臨淮郭氏族譜』巻七「生歿考、鈺」には「子三、斌・理・登。女一、宣宗國嬪、夭、諡貞哀」とあり宣宗の妃郭嬪とされるが、基づく所が不明で確証を得ない（郭登注11参照）。

郭理

○【郭理墓誌】明・彭時撰「故營國公孫郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」15A～19A。

○郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「舍人理公傳」（郭理伝）。

郭登

○『明實錄』。

○『明史』巻一百七十三「列傳第六十一、郭登」。

○【郭登神道碑】明・彭時撰「定襄忠武侯神道碑」（奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯贈定襄侯諡忠武郭公神道碑）とも：『毓慶勲懿集』巻七「碑文」32A～40B。

○【郭登墓誌】明・商輅撰「奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國追封定襄侯諡忠武郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」19A～29B。

※郭登の娘：『明史』巻一百四十六「列傳第三十四、徐祥」に郭登の娘は興安伯徐享の継室だったという記載がある（「徐祥、大治人。…〔中略〕…成祖即位、論功封興安伯、祿千石。…〔中略〕…永樂二年五月卒、年七十三。孫亨嗣、…〔中略〕…天順初卒、諡武襄。子賢嗣伯、以跛免朝謁、給半祿、卒。子盛嗣、卒、無子。再從弟良嗣、良祖母故小妻也、繼祖母定襄伯郭登女。至是其孫爭襲、朝議以郭氏初嘗適人、法不當爲正嫡、良竟得嗣」）。

《第四世代》

郭昌

○『明實錄』。

○【郭昌墓誌】明・王詔撰「武定侯郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」12B～15A。

○【郭昌夫人許氏墓誌】明・梁儲撰「明故武定侯郭公夫人許氏合塋墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」58A～60B。

○【郭珍夫人呂氏墓誌】《第三世代》郭珍の項に同じ。

○【永嘉公主墓誌】《第二世代》郭鎮の項に同じ。

郭嵩

○『明實錄』。

○【郭嵩墓誌】明・倪謙撰「南京前軍都督府掌府事定襄伯郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」29B～32A／倪岳撰『青谿漫稿』巻二「十一」墓表（四庫全書本）。

○【郭嵩夫人孫氏墓誌】明・倪岳撰「明故定襄伯夫人孫氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』巻八「墓誌」46A～48B。

《第五世代》

郭良

○『明實録』。

○【郭良墓誌】明・李東陽撰「明故武定侯郭公墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」32B～重34A／李東陽撰『懷麓堂集』卷八十九「文後稿」二十九、誌銘」（四庫全書本）。

○【郭良夫人栢氏墓誌】明・李東陽撰「明故封武定侯夫人郭母栢氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」55A～58A。

○【郭昌夫人許氏墓誌】《第四世代》郭昌の項に同じ。

郭参

○『明實録』。

○【郭参夫人李氏墓誌】明・馮允中撰「明故誥封淑人李氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」50A～53B。

《第六世代》

郭助

○『明實録』。

○【明史】卷一百三十「列傳第十八、郭英」（附郭助伝）。

○姚昇による姚氏祭文（「維弘治十二年歲次己未（一四九九）八月戊子朔越十一日戊戌」）：『毓慶勲懿集』卷六「祭文」17AB。

○【郭助繼室陳氏墓誌】明・李旻撰「武定侯子郭君繼室陳氏孀人墓誌」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」48B～50A。

○陳瑛による陳氏祭文（「維正德二年歲次丁卯（一五〇七）三月□□」）：「文

字」朔越二十七日」／「維正德二年歲次丁卯四月甲戌朔越六日己卯」）：『毓慶勲懿集』卷六「祭文」17B～18B。

○【郭房墓誌】《第七世代》郭房の項に同じ。

○【郭守乾墓誌】《第七世代》郭守乾の項に同じ。

郭勣

○【郭勣夫人周氏墓誌】明・周惠疇撰「戚畹郭世功妻周氏墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」54A～55A。

《第七世代》

郭房

○【郭房墓誌】明・吳廷舉撰「明故郭居之墓誌銘」：『毓慶勲懿集』卷八「墓誌」重34A～36A。

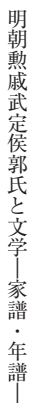
郭守乾

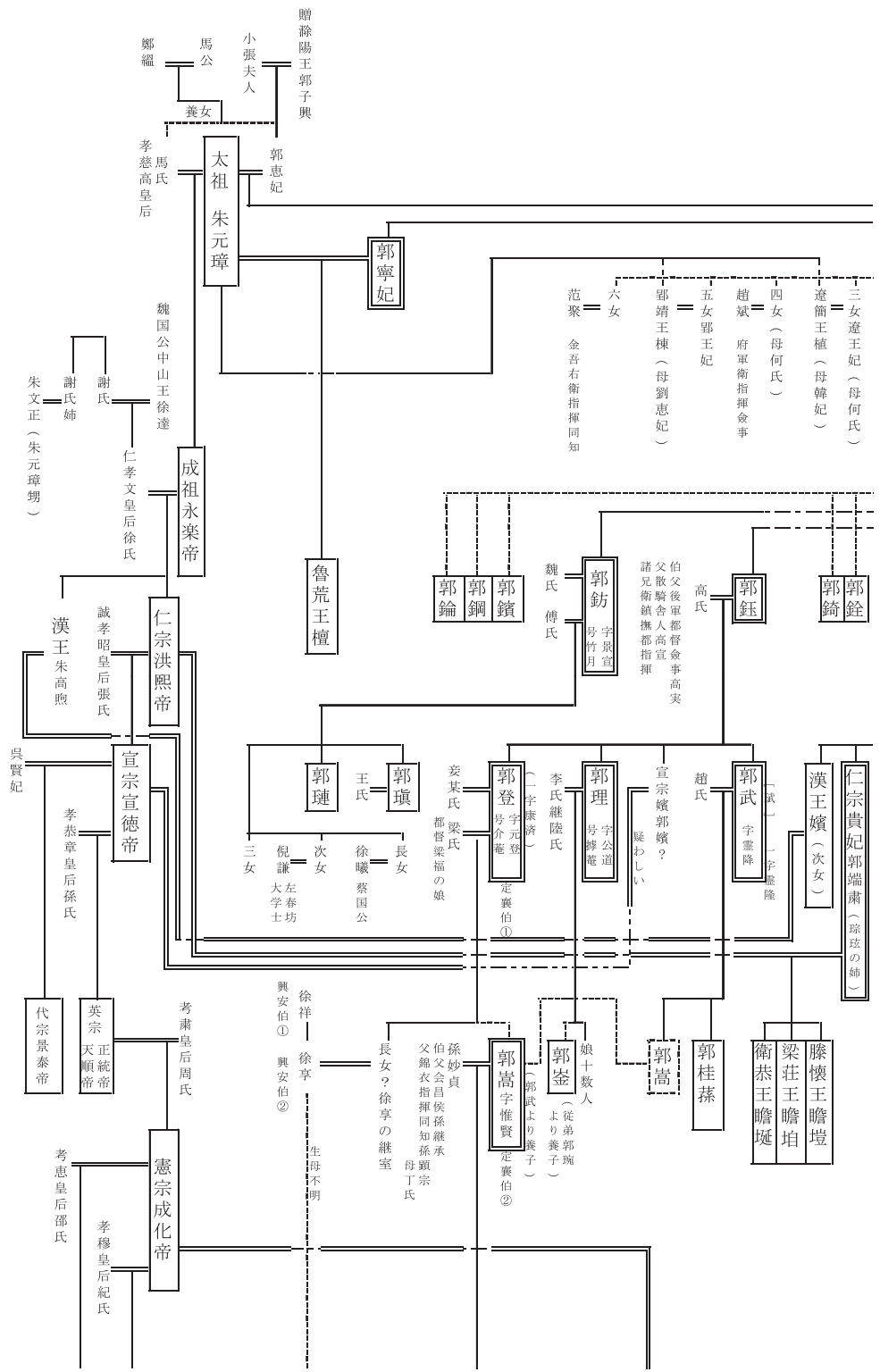
○『明實録』。

○【郭守乾墓誌】明・張文憲撰「明故左軍都督府掌府事武定侯郭公墓誌銘」：『新中國出土墓誌』北京〔壹〕（中國文物研究所編、文物出版社、二〇〇三）二八三／李巍「明代武定侯家族墓誌解析」（『北京文博 文叢』二〇一五年四期、七三～八二頁、北京市文物局）。

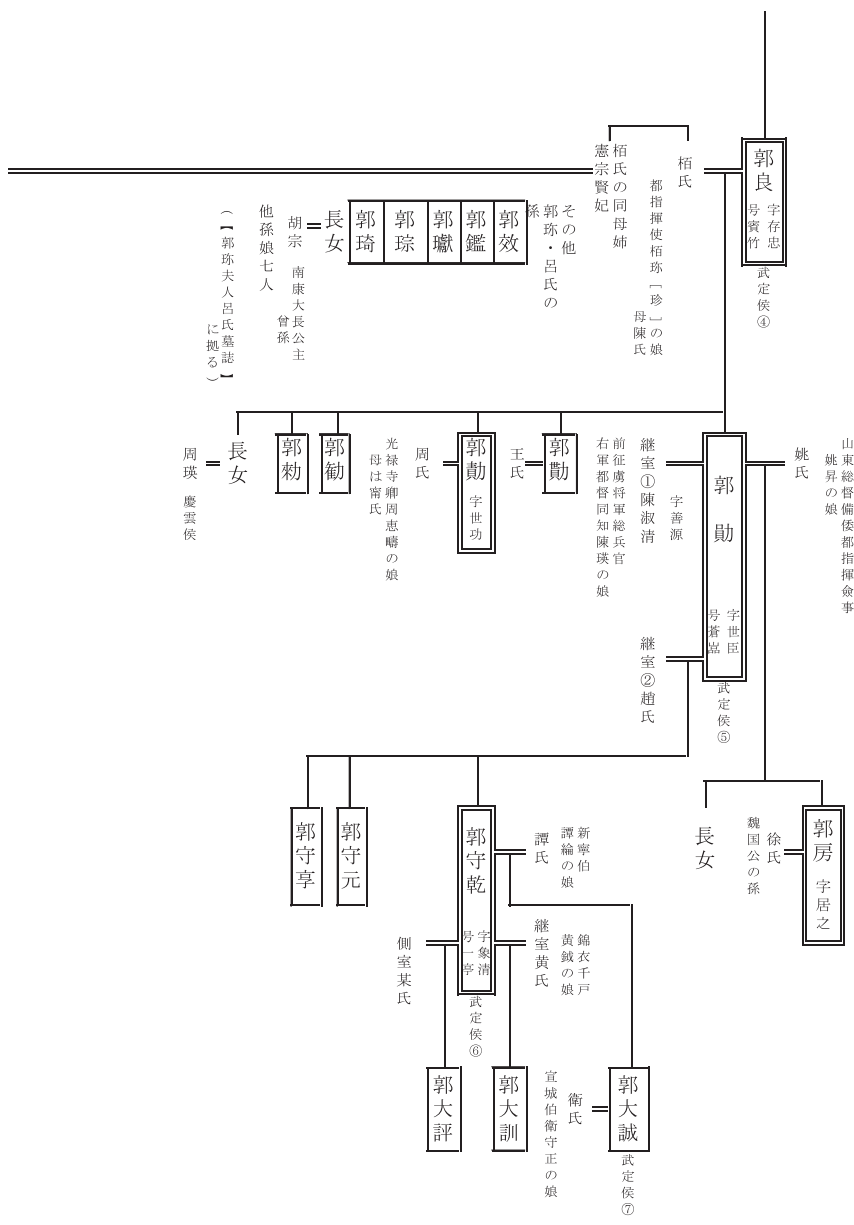
○【郭守乾夫人譚氏墓誌】明・張文憲撰「明封武定侯夫人譚氏墓誌銘」：『新中國出土墓誌』北京〔壹〕（中國文物研究所編、文物出版社、二〇〇三）二七八／李巍「明代武定侯家族墓誌解析」（『北京文博 文叢』二〇一五年四期、七三～八二頁、北京市文物局）。

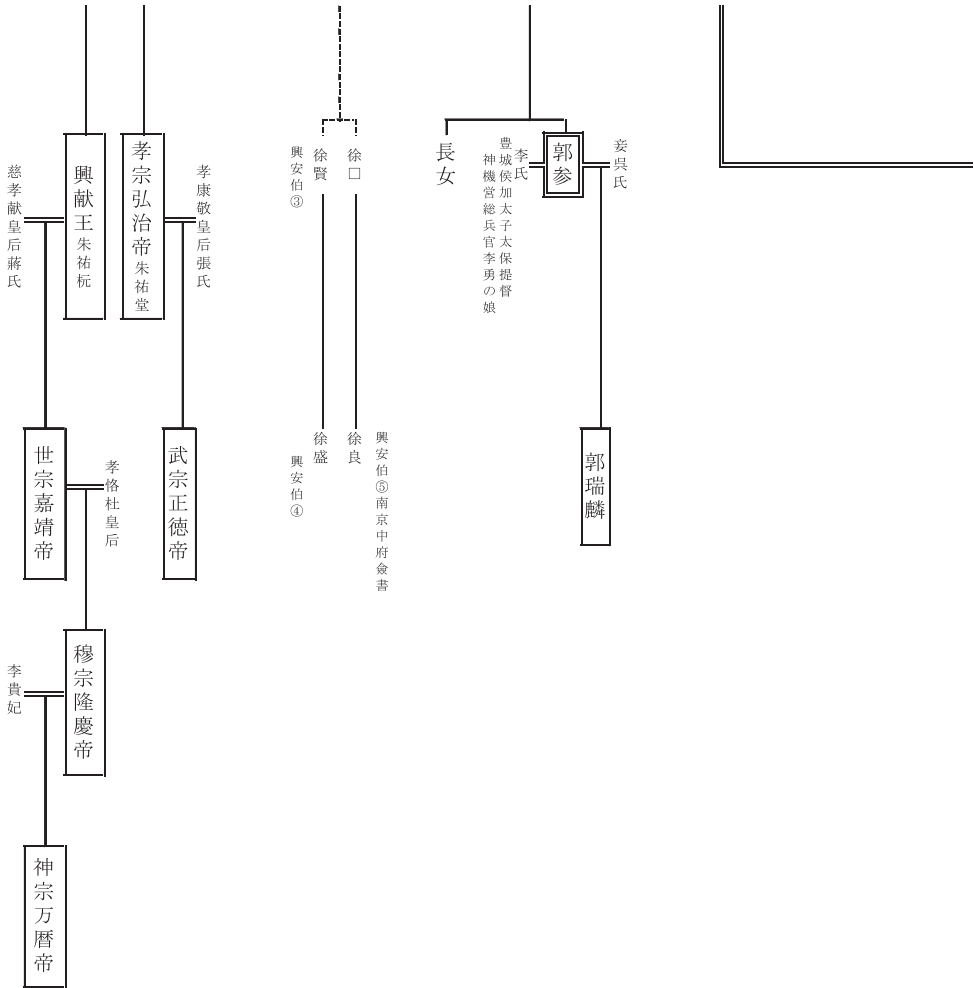
【圖表一】郭氏家譜





《第五世代》
《第六世代》
《第七世代》
《第八世代》





凡例（家譜）

- (i) 傍線で囲む名は郭氏の血を継ぐ人物及び皇帝である。
- (ii) 二重傍線で囲む名は「一 主要史料」に項目を立てた人物である（家譜作成の際に依拠した史料を辿れるよう法則を設定、「一 主要史料」のはじめを参照のこと）。
- (iii) 郭氏の多くが武官を世襲しているが本稿では紙幅の関係上記載を割愛し、特異な官と爵位のみ記載する（詳しくは必要に応じて「一 主要史料」に挙げた文献を調査されたい）。配偶者の官位については姻戚関係の重要性を鑑みて可能な限り全て記載する。

三 年譜

「郭氏年譜」（事蹟の顕著な人物数人を選び並列して示す）、「郭助詳説年譜」（五代目武定侯郭助の事蹟を詳細に示す）を掲載する。

凡例（年譜）

- (i) 記載事蹟の豊富な史料一点を基礎とし（各人の注の冒頭に明記）、その他の史料で補う形とした。その他の史料に拠った箇所には注を附し拠り所を明示する。また各文献で内容に齟齬がある場合や考証が必要な箇所にも注を附す。
- (ii) 「郭氏年譜」は各事蹟の起きた年月を記載するにとどめるが、「郭助詳説年譜」では事蹟の前後関係を明らかにするため可能な限り日にちまで記載する。

- (iii) 史料に日付が十干十二支で記されている場合、数字に換算して記載する（『新訂補正 三正綜覧』（内務省地理局編纂、藝林舎、一九七三年）を使用）。

- (iv) 『明實錄』に「○甲子（記事A）。○（記事B）。○丙寅（記事C）」という形で記載される場合、「（記事B）」は甲子の日の事蹟とみなす。
- (v) 囲み文字の見出しは国事に関わる事件である。
- (vi) 文学に関わる事蹟は二重線もしくは二重囲み文字で示す。
- (vii) 「郭氏年譜」の郭助事蹟においては注番号が飛んだり前後する場合がある（「郭助詳説年譜」の注番号と対応するため）。
- (viii) 「郭助詳説年譜」では郭助の人間関係を把握しやすくするため、関連する人物の名も当時の官名を補った上で可能な限り記載する（同年中「一セル中」に同一人物の名が再出した場合には省略、年内に官が遷った場合は新しい官も記載する）。
- (ix) 墓誌銘は略称を用いる（「一 主要史料」の【一】に対応）。

【図表二】郭氏年譜

西暦	歳次	事蹟 a	事蹟 b	事蹟 c			
1330	至順元	郭興					
1331	至順二						
1332	至順三						
1333	元統元						
1334	元統二	郭英	郭英生まれる。*1				
1335	至元元						
1336	至元一						
1337	至元二						
1338	至元三						
1339	至元四						
1340	至元五						
1341	至正元						
1342	至正二						
1343	至正三				郭興		
1344	至正四						
1345	至正五						
1346	至正六						
1347	至正七						
1348	至正八						
1349	至正九						
1350	至正十						
1351	至正十一						
1352	至正十二						
1353	至正十三						
1354	至正十四						
1355	至正十五						
1356	至正十六						
1357	至正十七						
1358	至正十八						
1359	至正十九						
1360	至正二十						
1361	至正二十一						
1362	至正二十二						
1363	至正二十三						
1364	至正二十四						
1365	至正二十五						
1366	至正二十六						
1367	至正二十七						
1368	洪武元						
1369	洪武二						
起兵。元帥郭子興の麾下に、滁州を破る。*1							
滁州を破る。*2							
十八歳、朱元璋に従って起兵。側近として宿直し「郭四」と呼ばれる。*3							
滁州を破る。*4							
和州・采石・太平を破る。*5							
建康（現南京）を破る。*6							
滁州を破る。*7							
安慶、衢州を攻める。							
南昌を攻め落とす。							
朱元璋に従い鄱陽湖の戦いで活躍。陳友諒を破る。							
朱元璋に従い鄱陽湖の戦いで活躍。陳友諒を破る。							
朱元璋に従い武昌を攻め活躍。鷹陽衛指揮を拝す。							
郭英が放つたものであったという。*8							
朱元璋に従い武昌を攻める。敵將陳金同が朱元璋の帳下に侵入した際、郭英が陳金同を殺して朱元璋の命を救い、唐の尉遲敬徳に喩えられ驍騎衛管馬軍千戸を拝す。*9							
中山王徐達に従い襄陽・淮安・濠州・安豊を破り、宣武將軍驍騎左衛指揮食事を拝す。*10							
徐達の中原平定に従う。齊魯・汴梁・河南・元都・潼関・漳徳・汴平・通州を破り、さらに太原を攻める。							
鹿台・西安・鳳翔・鞏昌を攻める。							
徐達に従い奉元路を破り、西安府に改める。四月徐達に従い、陝西征戦に従う。潼関を守る。							
天策衛指揮を拝す。							
軍大都督府食都督を拝す。							
徐達らと共に姑蘇（現蘇州）を包囲し攻め落とす。鎮国將軍大都督府食都督を拝す。							
鄭・淮安・湖州を破る。							
中山王徐達に従い、廣州・安豊・襄陽・衡州・澧州・辰州、高郵・淮安・湖州を破る。							

1370	洪武三	従い、鞏昌(甘肅)へ出征。 六月、秦王、府、武、傳、兼、陝、西、行、都、督、府、僉、事、を、拜、す。十一月、開、国、輔、運、推、誠、宣、力、武、臣、榮、祿、大、夫、柱、國、鞏、昌、侯、に、封、ぜ、ら、れ、る。	本、都、指、揮、副、使、。定、西、。西、夏、を、破、り、。沙、淨、州、の、乱、を、鎮、め、。登、寧、州、を、下、し、。昭、勇、將、軍、本、都、指、揮、使、を、拜、し、金、龍、衣、を、賜、る。 十一月、宮、殿、造、営、の、兵、を、私、邸、に、て、從、事、さ、せ、た、こ、と、を、朱、元、璋、よ、り、非、難、さ、れ、る。*9。驍、騎、將、軍、河、南、指、揮、使、に、昇、進、。郭、英、が、都、を、離、れ、る、際、朱、元、璋、は、郭、寧、妃、を、遣、へ、。藏、別、を、与、へ、た、。	郭寧妃、魯王檀を生む。
1371	洪武四	征蜀。	郭鎮、永嘉公主(1) 郭英の庶長子郭鎮生まれる (妾河氏の子)。*1	
1372	洪武五	徐達に従って北方辺境へ赴き元の残党を征伐。		
1373	洪武六			
1374	洪武七			
1375	洪武八			
1376	洪武九			
1377	洪武十			
1378	洪武十一	正、明、臨、清、(山、東、省、東、部、)へ、赴、き、練、兵、を、行、う、。*2	都へ召され大都督府僉事に昇進、。*10	
1379	洪武十二		潁川侯傅友德に従い雲南征伐、。	
1380	洪武十三			
1381	洪武十四			
1382	洪武十五	徐達らと共に北方辺境を巡撫し練兵を行う。十月都へ召還される。	四月、開、国、以、來、の、数、々、の、功、。雲、南、平、定、の、功、に、よ、り、開、国、輔、運、推、誠、宣、力、武、臣、柱、國、武、定、侯、に、封、ぜ、ら、れ、諸、券、(鉄、券)を、賜、る、。*11	魯王檀兗州(現山東省東部・南部)へ就藩。
1383	洪武十六	十二月、聚宝山之源(南京)に據られる。	靖海將軍鎮守遼東を拜す。	
1384	洪武十七		正、明、宋、国、公、護、勝、に従い北伐、。八月、朱、元、璋、に、行、い、を、諭、さ、れ、る、。*12。	
1385	洪武十八		捕魚兒海で北兵を討つ。	
1386	洪武十九	詔、(劉、三、吾)に、郭、興、神、道、碑、の、撰、を、命、ず、。	四月、魯、王、(魯)の、嫡、嫡、過、宮、の、工、役、が、性、急、過、ぎ、る、と、し、て、朱、元、璋、よ、り、「英、武、人、不、学」と、非、難、さ、れ、る、。*13。同、月、墓、神、道、碑、造、営、の、費、用、と、し、て、鈔、二、千、錠、を、賜、る、。*14。	十一月、六、日、朱、元、璋、の、第、十、二、公、女、永、嘉、公、主、を、娶、り、駙、馬、都、尉、と、な、る、。*2
1387	洪武二十	次子郭景振(郭振)が鞏昌侯を襲爵。	正、明、征、虜、將、軍、右、副、將、軍、を、拜、し、練、兵、を、行、い、。虜、酋、長、阿、扎、失、里、を、討、つ、。*15。	
1388	洪武二十一		十二月、改、製、し、た、鉄、券、を、賜、る、。*16。	
1389	洪武二十二		十月、嫡、女、遼、簡、王、檀、の、妃、に、冊、封、さ、れ、る、。*17	
1390	洪武二十三		四月、遼、王、宮、室、を、建、造、中、に、一時、停、止、の、命、が、降、り、。遼、寧、。谷、慶、。肅、五、王、の、護、衛、指、揮、使、司、の、設、置、を、命、じ、ら、れ、る、。*18。	
1391	洪武二十四		正、月、長、興、侯、耿、炳、文、と、共、に、征、西、將、軍、の、印、を、拜、し、川、陝、の、賊、高、福、興、を、征、伐、。*19	
1392	洪武二十五		四月、総、兵、都、督、を、拜、し、。燕、王、(後、の、永、樂、帝、)の、節、制、の、も、と、北、辺、の、胡、虜、掃、伐、(赴、く、遼、東、都、司、遼、府、護、衛、を、統、統、べ、る、。*20	
1393	洪武二十六		諸、難、の、変、(、建、文、四、年、)。(燕、王、(後、の、永、樂、帝、)が、建、文、帝、に、対、し、て、拳、兵、。南、京、を、攻、略、し、て、帝、位、を、奪、つ、た、事、件、)	遼東の兵事より都へ帰還する途中、で病を発症、正月都にて
1394	洪武二十七	十月五日郭玪生まれる。*1		
1395	洪武二十八			
1396	洪武二十九			
1397	洪武三十			
1398	洪武三十一			
1399	建文元			

1400	恵	建文二		四月、燕王(後の永楽帝)軍征伐のため曹国公李景隆・安陸侯吳傑らと北進し敗北、西へ潰走。*21	卒す。四月聚宝山(南京)に葬られる。
1401	帝	建文三			郭武・附弟郭理・永嘉公主(2)
1402		建文四	父郭銘(遼府典史)が国事に没す。*2	二月十七日邸にて卒す。享年六十九*22。太宗(永楽帝)・輟朝四日、致祭賜卹。五月、贈營国公、諡威襄、三代祖まで追封。詔命を賜る*23。聚宝山之原(南京)に埋葬	郭武・附弟郭理・永嘉公主(2)
1403		永楽元		十月郭登生まれる。三ヵ月後に父郭鈺卒す。*1	九月弟郭理生まれる。*2
1404	太	永楽二			十二月六日父郭鈺卒す*3。この時母高氏は二十六歳、以後「守節、粉信教誨」としたという。
1405		永楽三			十二月、永嘉公主が長公主に進封される。*4。
1406		永楽四			
1407		永楽五			
1408		永楽六	姉(後の仁宗貴妃)が長子・滕王瞻埈(を)生む。*3		
1409		永楽七			
1410	宗	永楽八			
1411		永楽九	三月、錦衣衛指揮僉事を拝す(兄郭琮は旗手衛指揮僉事を拝す)。		
1412		永楽十	のち(時期不明)漢府護衛指揮に移る*4。漢王高煦は成祖永楽帝の第二子／庶妃の一人が郭琮の女兄弟*5。		この頃皇太子(後の仁宗)が南京国子監で学んでおり、威里のよしみではば郭武を召して詩文を作らせたという(正確な時期は不明)。
1413	/	永楽十一			
1414		永楽十二			
1415		永楽十三			
1416	成	永楽十四			浙人張玄をつてに賦詩を上疏。太宗(成祖)は伯父郭鑑を召してその才を讃え、月給米二石を下賜し、郭鑑の家で詩書を字はせるよう命じた(豊城の鄭廉を師とする)。
1417		永楽十五			
1418		永楽十六			
1419		永楽十七			
1420	祖	永楽十八	従弟郭武と共に皇太子(後の仁宗)を護送して北京へ赴き南京へ帰還。*6		従兄郭琮と共に皇太子(後の仁宗)を護送して北京へ赴き南京へ帰還。途中度々作詩を命じられたという。
1421		永楽十九	北京へ遷都。		
1422		永楽二十			
1423		永楽二十一	十一月、仁宗即位、召還され左軍都督府都督同知に抜擢、十二月武定侯を襲爵し詔命を賜る。	十一月、仁宗即位、勲衛を拝す。*2	十一月、仁宗即位、内殿に召されて冠帯・金幣・錦衣一襲を賜り、滕王府典宝を拝す。滕王瞻埈は従姉仁宗貴妃郭氏の長子。永嘉公主が大長公主に加封される*5。
1424		永楽二十二			五月、仁宗崩御、南京へ帰る。こを許される。
1425	宗	洪熙元	五月、仁宗崩御、姉郭貴妃殉葬。*7		六月都へ到り、七月尚宝司丞を拝す。母高氏と弟郭理も北京へ*6。
1426		宣徳元			
1427	宣	宣徳二	四月、署宗人府事を拝し玉璽を繕修。*8		
1428		宣徳三	九月、湖廣鎮征に従う。		
1429	宗	宣徳四	五月、祖母嚴氏(郭英の側室)卒す(享年八十)。六月、従弟郭武と共に祖母の棺を護送して南京へ帰郷、八月南京大山之原に葬る*9。十月冬至節、長陵・献陵を祀る。		岳陽王冊封の持節。六月祖父郭英の夫人嚴氏逝去、従兄郭琮と共に棺を護送して南京へ帰郷することを許される*7。

1430	宣徳五	二月巡按直隸監察御史白圭より弾劾される(滄州南皮県「現河北省」の民の家を家人に強奪させて住屋を建てた罪等)天津右衛指揮呂昇も郭玪に阿附し有怨。			
1431	宣徳六	十月寧王権の第五子冊封の儀にて正使を務める。			
1432	宣徳七				
1433	宣徳八				
1434	宣徳九	八月宣宗の辺境巡察に際し五軍都督府事を任される。			
1435	宣徳十				
1436	正統元	三月永嘉公主が武定侯の継承権をめぐる郭玪と爵位を争う。	征西戦に際して兵部侍郎徐晞に文武の才を推挙されるも母が年老いていることを理由に辞退*3。十月八日母高氏卒す*4。兄郭理と共に北京で盧墓(一ヶ月で職に戻る)*5。		郭嵩・附夫人孫氏 六月孫氏生まれる*1 七月一日郭嵩生まれる。
1437	正統二	十月遼簡王権の第十九子二十子ら冊封の儀にて正使を務める。			
1438	正統三	閏二月太監雷春らと共に皇陵の造営を任せ鳳陽赴く。			
1439	正統四	四月六科給事中・十三道御史より「樂工に太子冠帽・嬰珞・鳳凰などを造らせ・樂婦をして婢に歌舞を教えさせた」と弾劾される。有怨。八月皇親として秦王志潔(使い)。	兄郭武卒す。*6		
1440	正統五				
1441	正統六	十一月皇親として靖江王佐敬(使い)。	兵部尚書王驥に従い雲南麓川へ遠征(正統八年)*7。		
1442	正統七				
1443	正統八	三月一日皇親として代王桂(使い)。三月八日母徐氏卒し。			
1444	正統九	六月懷柔県紅螺山之原(北京)に葬る*10。	黔国公沐斌に従い雲南騰衝へ遠征(正統十二年)*8。		
1445	正統十	八月鎮朔將軍總兵官鎮守宣府を拝す。			
1446	正統十一		雲南騰衝衛遠征より帰還し禁中での宿衛を拝す。*9		
1447	正統十二	七月十六日宣府にて病に卒す。享年五十三。十月懷柔県紅螺山(北岳)に葬られる*11。十一月長子郭聰が指揮僉事錦衣衛帶棒を拜す(永嘉公主が再び爵位を争ったため武定侯襲爵は許されなかった*12)。	十二月世襲誥命の下賜を請うて許される。 五月署指揮僉事ついで都督僉事を拝す。 七月より瓦剌(オイラト)首領也先(セセ)討伐の親征に扈從八月二日參將鎮守大同を拝し總兵官広寧伯劉安を輔佐して大同の守備にあたる。 王木の変(英宗が也先に惨敗して捕虜となる)八月二十二日也先が英宗を擁して大同に到り城中の銀を求める(英宗は郭登に「城と民を固く守り、事態の真偽をよく見極めて怪しく信じぬよう」と指示した)。八月三十日都督同知副總兵を拝す。九月征西前將軍總兵官鎮守大同を拝す。十月一日虜が再び英宗を	十二月永嘉公主が再び子の郭玪のために武定侯の継承権をめぐる郭玪の長子郭聰と争う。*12	
1448	正統十三				
1449	正統十四				

1450	景泰元					擁して大同に到る(英宗は再び郭登に城を固く守り城門を開かぬよう指示)。十月三日也先が北京へ迫った際に大同からの援兵を奏上したことにより、十一月右都督進む*10。閏正月達賊を破った功を奏上し定襄伯に封ぜられる。六月達賊およそ二千騎が大同を犯し、十四日英宗を擁して城門に到る。英宗奪還の計を謀るも惜られて失敗。	景泰間、時期不明確、散騎舎人を拝し禁中に侍衛する。
1451	景泰二	郭良				三月詔命を賜る。	
1452	代景泰三					三月詔命を賜る。この年四月頃までに『郭氏家傳』『郭氏族譜』編纂が*11。	
1453	景泰四					正月大同副総兵右都督孫鑑と不和になる。八月病のため都へ帰還。	
1454	景泰五		五月二十七日郭良生まれる。*1			『郭氏家傳』『郭氏族譜』を刊刻が*12。	
1455	景泰六					母高氏と兄郭武を南京の聚宝山に改葬する*13。二月父母の薨を報える牌記「郭氏孝節傳」(吏部尚書王直撰)を建く(大理寺卿薛瑄らより「孝節詩」を寄せられ(都察院左僉都御史徐有貞行)「孝節碑後」(後序)を撰す*14。	
1456	景泰七	宗				正月八事を奏上。その中で石亨・柳溥・張凱・楊善・会昌伯孫繼宗*15・靖遠伯王驥らを推挙。二月寧南京中軍都督府事を拝す。十月「郭氏重脩先塋記」を撰す*16。	
1457	天順元					正月、六科・十三道より弾劾される(大同から都への帰還を願い尚書陳汝言に贈賄した罪)。また錦衣衛指揮僉事遼果より弾劾され(従弟の勲衛郭環の罪に連座)定襄伯の爵位を奪われる。	
1458	天順二	英					
1459	天順三		五月父郭昌が弟郭昭と争った果てに武定侯驥爵。*2				
1460	天順四						
1461	天順五		二月二日父郭昌卒す。*3				
1462	天順六						
1463	天順七	宗					
1464	天順八					三月、定襄伯復爵。平羌將軍総兵官鎮守甘肅を拝して甘肅へ赴く。七月撫寧伯朱永の推挙により都へ帰還。十月神機營総兵官兼理中軍都督府事を拝す。	
1465	成化元					二月・十一月・十二月会昌伯孫繼宗、撫寧伯朱永らと共に度々儀礼に参預(奉天門落成に際し宗廟に告す等)正月・三月軍務について奏上。五月南京への隠居を請うが却下される。七月忻王・徽王冊封の儀にて会昌公孫繼宗と共に正使を務める。	
1466	成化二	蓋				十月兼総神機營兵を拝す。	
1467	成化三						
1468	成化四		十二月十一日武定侯驥爵を請うも親族の郭聰(郭玟の子)が爵位を争ったため錦衣衛指揮僉事を拝すにと止まる。				
1469	成化五					十月「郭氏先塋碑」を撰す。*19。	
1470	成化六					三月兄郭理卒す。享年七十。五月順天府宛平県京西郷西安祖之原(北京)に葬る。*18。	
1471	成化七	宗				四月二十六日卒す。享年七十。追封定襄侯、諡忠武、南京の祖先墓地(聚宝山)に葬られる。	
1472	成化八						定襄伯驥爵を請い認められる。この年「郭氏聯珠集」を刊刻が*2。

郭参附夫人李氏
二月七日李氏生まれる。郭参もこの頃生まれるか*1。

九月二日永嘉公主薨る。享年八十。翌年九月応天府江寧縣循寧郷章山之原に葬られる。

1473	成化九				分督五軍營を拜す。浙陽王冊封の正使として荊州へ派遣される。
1474	成化十				北直・山東・河南の軍馬の振撫作成を命ぜられる。
1475	成化十一		十月六日郭勛生まれる。＊1		趙王妃冊封の正使として彰徳（河内南部）へ派遣される。
1476	成化十二			母孫氏逝去のほどなく前に李氏と婚約＊2。	三月九日夫人孫氏卒す＊3。南京前軍都督府事を拜し水軍の操練を監督。
1477	成化十三			（父の死後？都で錦衣衛指揮使を拜し、李氏を迎え入れる＊3。	熱病を発症し官舎にて卒す。享年四十三。聚宝山之原（南京）に葬られる。従弟の倪謙が碑銘を撰す。
1478	成化十四	この頃『郭氏家書』なる書を周囲に供覧したが、＊4			
1479	成化十五	四月上疏して武定侯襲爵を請う。錦衣衛が郭良と郭聰を鞠問したところ疏の内容と供述に齟齬があったため、「再び上疏すれば免職する」と警告される。			
1480	成化十六				
1481	成化十七				
1482	成化十八				
1483	成化十九				
1484	成化二十				
1485	成化二十一				
1486	成化二十二	生母許氏還暦の祝い。＊5			
1487	成化二十三	十二月上疏して再び武定侯襲爵を請い錦衣衛指揮僉事を免職される。			
1488	弘治元				
1489	弘治二	武寧に登第。十二月錦衣衛指揮僉事に復職。＊6			
1490	弘治三				
1491	弘治四				
1492	弘治五				
1493	弘治六	十二月錦衣衛管鎮撫司事署指揮僉事葉廣と共に管衛事（錦衣衛）を命じられる。＊7			
1494	弘治七				
1495	弘治八				
1496	弘治九	十二月長沙衛獄の調査へ道中。葉瑄・沈翼・沈翼江・瀾・楊守陟・喬宇・陳金ら一流士大夫と交誼を結ぶ。＊8			定襄伯の襲爵を請うも却下される。＊4
1497	弘治十				
1498	弘治十一				
1499	弘治十二		九月十七日夫人姚氏が長子郭房を生む。＊9、七月二十九日夫人姚氏卒す＊3。この後継室陳氏を娶る（時期不明確）。		
1500	弘治十三				
1501	弘治十四				
1502	弘治十五	四月母が郭良のために武定侯の襲爵を請い、礼部侍郎焦芳の後押しを得て認められる。十一月効勇堂坐營管操を拜す＊9			
1503	弘治十六	三月右軍都督府僉書管事を拜す＊10。十月巡視科道官より放牧の官馬を大量に失したと弾劾され一ヶ月停俸となる。			

	孝	弘治十七 閏四月監察御饒崎より「立心欠端、處事偏執」と彈劾される。五月保国公朱曜・豊城侯李璽らと共に災異の責任をとって兵権の辭職を願ひ出るも許されず。五月礼科都給事中李祿より早急に罷免にすべき人物と批判される。七月郭氏家傳序」を撰す（郭登撰「郭氏家傳」に「續編」一卷を増補）。八月二日大同連征に備え左參將を拜し京營の練兵を命じられる。 ^{*12} 十二月郭氏家傳刊刻。 ^{*13} 五月十八日武宗即位。同二十八日懷寧侯孫応爵と共に団營の督操を命じられる。	弘治十八
1504	正徳元	六月十六日卒す。子の郭勛が李東陽に碑銘を依頼。 ^{*14}	1506
1507	正徳二	三月二十日繼室陳氏卒す。 ^{*4}	1508
1509	正徳三	三月武定侯を襲爵。十二月世子手指揮、上直侍衛を拜す。	1510
1511	正徳五	三月二十四日母相氏卒す。 ^{*6} 十一月終兵官鎮守両広を拜す。	1512
1513	正徳七	三月二十四日母相氏卒す。 ^{*6} 十一月終兵官鎮守両広を拜す。	1514
1515	正徳八	六月二十五日翰林院編修湛若水被總稱名記後。 ^{*9} この頃維至趙氏を娶るか ^{*10} 。十一月兵部より江西の賊を鎮圧した件で自ら勝利を奏上した無礼を弾劾される。この頃陳獻章の弟子張翊と交流か。 ^{*11}	1516
1517	正徳十	三家世典（編纂か）徐文に家伝の編纂を命じ。正月元旦総督両広軍務都察院右都御史周南三家世典序。正月十三日都察院右都御史王均美三家世典序。正月十五日吏部尚書楊一清三家世典序。閏四月十五日広東布政司右布政使吳廷挙三家世典敗。 ^{*13} 将鑑博議刊刻（達賓序）。 ^{*14} 六月巡按広東御史高公韶・周期舉刑部郎中顧正ら、御史張仲賢より両広での不法行為を弾劾される。有怒。広西府江の賊を鎮圧（正徳十二年か）。 ^{*12}	1518
1519	正徳十一	統慶縣志集刊刻。正月一日三都尚書兼太学士費宏統慶縣志集序。正月十六日國子監祭酒王瓚統慶縣志集序。正月十六日翰林院編修湛若水統慶縣志集序。 ^{*16} 千金寶要刊刻。四月十五日郭勛重刊千金寶要序（于蒼梧道秀著）。 ^{*17} この年長子郭房に魏國公の孫娘徐氏を娶るが、六月二十八日郭房卒す。 ^{*15} 八月巡按広西御史宋昂より彈劾、九月刑科都給事中王蘭より彈劾し有怒。	1520
1521	正徳十二	三家世典（編纂か）二月一月之古總督兩広都御史陳金三家世典序。 ^{*18} 八月山西より帰還して總管三千營操練を拜す。帰京後三家世典に自身の業績を付して刊刻か。 ^{*19} 白樂天詩集刊刻。八月之古總督兩広都御史陳金白樂天詩集序。 ^{*20} 唐元次山文集刊刻。十月三日翰林院編修湛若水元次山集序。 ^{*21} 九月平賊の功を以て太保を賜る。	1522
1523	正徳十三	白樂天文集刊刻。正月一日礼部左侍郎王瓚白樂天文集序。 ^{*22}	1524
1525	正徳十四	正月孟春大廟の享宴を代行。	1526
1527	正徳十五	詩韻釋義刊刻。正月四日太常寺卿提督四夷館楊一漢詩韻釋義序（題署に關西脩葺子釋義）。 ^{*23} 四月二十二日世宗即位。四月世宗即位を以て天地に告す（建昌侯張延齡宗廟社稷に告す）。同月武宗の陵墓造営を任される。五月提督團營總兵官兼督五軍營を拜す。同月武宗の三月六日刃瘡官の警鐘を受け京營軍馬を操練し辺境へ赴くよう命じられる。四月十五日三國志通俗演義引（關中修葺子書于居易草亭）。 ^{*25} 天堯（皇后陳氏冊立）九月皇后陳氏（陳万言の娘陳蓮）冊立の儀にて正使を務める。	1528
1530	正徳十六	八月十六日辺境防禦の功を以て太子太保を賜る。	1531
1532	嘉靖元	天札の議定まる。 ^{*27} 七月世宗母蔣氏に聖母と尊号、七月世宗父朱祐杭に皇考恭穆獻皇帝と尊号、天地・宗廟・社稷を祭告。九月大札の尊号決定を天下に詔諭するに際し天地・宗廟・社稷を祭告。十一月を以て兵權の辭職を請うと許されず。	1533
1534	嘉靖二	三月三代祖と繼室趙氏の誥命賜予を請ひ許される。	1535
1536	嘉靖三	三月進士登第三百名に賜宴、主席大臣の席の配置をめぐる礼部と争う。四月武寧登第者五十名に賜宴、班列の順序をめぐる兵部と争う。五月御史張景華より彈劾され、自効して辭職を願ひ出るも	1537
1538	嘉靖四	郭守乾・附夫人譚氏・黃氏／子郭大誠	1539
1540	嘉靖五	六月二十七日郭守乾生まれる。 ^{*1}	1541

1527	嘉靖六	李福達の獄①*28 七月逆賊李福達を匿つたとして都察院左都御史喬賢・給事中程輅・劉琦・王科・給事中陳皐諤・南京御史姚鳴鳳・王猷らより弾劾される。十月御史張問行・給事中劉琦・御史魏有本より軍資を横領していると弾劾される。
1528	嘉靖七	李福達の獄②*29 十一月山西巡撫御史江潮・巡按御史馮錄・兵科給事中鄭自璧・張達らより弾劾される。李福達の獄③*31 九月逆賊李福達を匿つたとして弾劾されていた件で、兵部左侍郎張璠・吏部左侍郎桂萼らの援けを得て不問となる。
1529	嘉靖八	正月御史吳仲より不法行為を弾劾される。十月二日陳皇后世宗の第一任皇后崩御 第二任皇后張氏冊立十一月二十八日第二任皇后張氏(順妃)冊立の儀にて持節十二月把總湯清(世宗の南郊大祀に欠陥したことを提督尚書李承勛に弾劾されて罷免となつた)の復職を求めて李承勛を貶め陰害に。この頃太監張永・提督尚書李承勛と論争*32。
1530	嘉靖九	正月湯清の件で巡視京營科道言「官」王璽より「刑罰を擅にしている」と非難される。一月巡按御史趙鏜より弾劾される(罪人金輅(錦衣衛人・隆慶衛に充軍)から賄賂を受け取り、護送の道中で金輅を救い都へ帰した)→兵職の罷免。太保太傅の奪還。中軍都督府將捧として閑住を命じられる*35。八月弟張府詹事霍輅が「楊一清は故太監張永から収賄していた」と上疏、また張永の使用人朱繼宗が「張永の弟張容は楊一清への賄賂により錦衣衛指揮僉事の官を得た」という流言を流す(一説に郭勛が楊一清を貶める機会を狙い、霍輅の上疏に乗じて朱繼宗に流言を流させたとも)翌年九月楊一清収賄の罪で罷免・閑住*37。
1531	嘉靖十	五月金書中軍都督府事を拝す。五月四郊起工 五月四郊(圓丘/天を祀る壇)起工、總督工程官に任命される。六月提督五軍營操練を命じられる。十月郊制の改制に伴い『祀儀成典』編纂の監修官に任命される。十一月四郊竣工十一月圓丘施工の功勞者として夜明壇(祭月壇)の分獻官を拝す。
1532	嘉靖十一	三月提督臣營兼五軍營總兵官を拝す。雍熙樂府刊刻 七月十五日春泉居士王言「雍熙樂府序」*42。七月四郊竣工(前年)の功績を以て太傅仍兼太子太傅を拝す。
1533	嘉靖十二	正月驚蟄節(啓蟄) 圓丘にて祈穀礼を代行し、刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される。一月提督臣營兼後軍都督府事を拝す。十月翰林院編修楊名より「姦惡」と批判される。
1534	嘉靖十三	八月十九日世宗第一皇子朱載堦誕生(母は閔貴妃)。十月十日逝去。十月世宗長子に哀冲太子と冊立する儀にて正使を務める。
1535	嘉靖十四	第三任皇后方氏冊立 正月皇后方氏冊立の儀にて正使を務める。重録列聖實訓實錄(編纂開始七月)重録列聖實訓實錄の監録官を拝す*44。十一月世宗が賦した「慎終」の句に唱和。
1536	嘉靖十五	正月元旦世宗の御製元旦詩に唱和。二月太廟改建*45起工 二月太廟改建の總督工程に任じられる。十月啓祥宮(世宗父誕生の故宮)等修建の功勞を以て太子太師を拝す。
1537	嘉靖十六	三月世宗に扈從して先處視察(免つ)四月末「七陵修工」武学の改建・改制四月武学の振興を求めて奏上*47。四月世宗の陵墓起工 四月十月世宗に召されて山陵(世宗陵皇水陵)造営について激励される。
1538	嘉靖十七	七月皇史宬(一昨年七月起工。皇家の檔案館)竣工 七月皇史宬竣工の功勞を以て太師を賜る。
1539	嘉靖十八	八月(重録列聖實訓實錄)成る 九月(重録列聖實訓實錄)の功勞を以て光左柱国を拝す。
1540	嘉靖十九	十一月太廟改建竣工 十一月宗廟(太廟)竣工の功勞を以て祿米三百石を賜る。
世		正月高祖(祖父の祖父)郭鎮の妻永壽公主に諡号を請うて許される。二月郭鎮を太廟に配享するよう請うて許される(この頃までに『國朝英烈記』或いは『英烈傳』を著したとされる*50)。九月東宮冊立を薦める上疏。
宗		四月人選について、進士を偏重せず、舉人・監生でも實明で才氣があり品行や政治実績の卓異なる者を登用して人材を激励すべきと奏上。天宗の廟号を成祖に改号*51(獻皇帝(世宗父)へ廟号睿宗を追尊九月太宗の廟号改号と獻皇帝への廟号追尊及び神主の改造が決定され、十月高皇帝(朱元璋)・高皇后(馬皇后)の神位改造の儀において顧鼎臣と共に題主*52を命じられる。
世		十二月十四日太后蔣氏世宗母崩御 十二月世宗母蔣氏の陵墓建造の筆頭總管に任じられる。
世		正月十日奉太后蔣氏世宗の祖先を祀る竣工 正月昨冬の皇天上帝の冊表祇薦等の功勞を以て郭国公に進む。正月礼部尚書嚴嵩が郭勛の位は既に定国公徐延徳の上であると奏し、首班官(朝儀班列の首位)となる。二月一日皇太子冊立(第二子朱載堦。母は王貴妃) 二月皇太子冊立を以て睿宗獻皇帝廟・太社太稷に分告し、且つ正使を務める。二月四月南巡へ*53。八月皇駕幸*56起工泰神殿を改建 十二月礼部尚書霍輅が夏言を批判(霍輅は郭勛と徒党を組んで夏言と対抗した*57)。
世		四月辺境政務についで五事を奏上(鎮守内臣の不動産だった田畑を辺将に分け与える等)*59。四月武

世		1541	1542	1543	1544
		嘉靖二十	嘉靖二十一	嘉靖二十二	嘉靖二十三
		臣が文臣に虐げられている」と奏上*60。六月戸部尚書梁材が班軍の備兵へ月糧支給を拒否したため梁材を弾劾。 七月皇宮宇竣工 七月皇宮宇竣工の功勞を以て子姪一人を錦衣衛百戸に蔭することを許される。七月世宗が兩親祭祀のために仙銀の器を欲していた所、道士款朝用(段朝用)*61の生成した器を進呈し、禄米歳百石を賜る。 十二月沙河行宮城*62竣工 十二月沙河行宮城竣工の功勞を以て銀五十兩等を賜る。			
		彈劾① 正月三十日戸科給事中朱憲章、山西道監察御史金燦より批判される(陵工にあたる官員の不正)世宗、郭勛に遂安伯陳璘、都察院都御史王廷相と共に軍役を檢問するよう命じる。郭勛のみ長らく突き返して受領しなかった*65。			
		彈劾② 二月三日河南道御史楊爵より「大惡大蠹」政權を握つて好き勝手に振る舞つていると弾劾される。			
		四月五日太廟火災*66			
		彈劾③ 翌六日巡視皇城科道官胡汝霖・聶賢*67・李秉震らより太廟火災の際に迅速に救助に赴かなかつたとして弾劾される。			
		彈劾④ 同月十九日刑科給事中戚賢ら及び給事中劉大直・陳邦修・張堯年・王嘉元らより「寵愛をかさに擅にふるまつている」と弾劾される*68。兵部が疏に添注「兵部尚書葉繼祖・戸部尚書李廷相・都察院右都御史王廷相・右副都御史胡守中・太常寺卿李開先・翰林院侍讀胡繼・寺卿尚書李廷相・都察院右王同祖らも罷免すべき」郭勛辭職を願ひ出る。五月三日太廟再建の声を上げる。同月十二日・二十九日病氣療養していた所へ世宗から見舞い*69。			
		彈劾⑤ 六月・七月*70六科給事中李鳳来より弾劾される(諸所に店房(「宿屋」を開いて多くの無賴漢を匿つている等。また正月の弾劾に臣姦何事、臣黨何人と疏辯したり、軍役の檢問を命じた勅を突き返して何必更勞賜勅と疏辯したりと不遜な言葉があつたため、七月世宗は「君主の意向を蔑ろにした」と怒る。李鳳来の訴状について実情の捜査が命じられる。 八月八日太后張氏(武宗母)崩御 八月・九月*72五城御史車邦祐が京城内の実情を報告(郭勛の店房が特に多く、英国公張溶・惠安伯張鑑・皇親指揮錢惟垣・夏勲・款朝用(段朝用)も連座、その仲間・親族である孫瀆*73らも錦衣衛に逮捕せらるる)。*74			
		彈劾⑥ 副都御史胡守中が「郭勛の族叔郭憲(東廠衛理刑)が後軍都督府の監獄に無辜の者を監禁している」と弾劾*74。郭勛が店房について上疏して弁明「店房は人に貸していただけで場所代はとつておらず、管理は孫瀆に任せていたため何も知らない」。			
		彈劾⑦ さらに刑科給事中高時らが郭勛の惡事十数条を弾劾(不軌を謀つた逆囚張延齡*75と交流があつてその莊田や家事を管理している、家人を采顔(東北部の国境周辺)に住まわせて塩や茶の商ひ・馬の交易を行つている等*76)世宗、錦衣衛に郭勛を逮捕させて鎮撫司に鞫問を命じる(但し大札の議での助力や 太和傳 刻書の功勞*77を以て刑具は赦免するよう命じる)。			
		彈劾⑧ 十三道御史董漢新らも郭勛の惡事を弾劾。法司が郭勛は死罪にあたるとの罪案を提出↓世宗、言官の疏状と郭勛の自供がきちんと照合されていないとして再審を命じる。			
		彈劾⑨ 十三道御史周亮らが、鞫問官が収賄により鞫問を怠つているとして鎮撫司指揮孫瀆・刑部尚書吳山・該司郎中錢得洪・本部主事馮煥・鎮撫司掌印指揮倪曼を弾劾*78、また郭勛の罪を強調(張延齡との交誼、太監の田地占領等)。			
		彈劾⑩ 給事中劉大直が郭勛の罪十二事を弾劾(將校に胥吏を用いた、武臣を籠に束せた等*79)。法司が再び罪案を提出(郭勛の罪状は全て事実で死罪に当たる)世宗、郭勛の共犯者孫瀆・郭勛・郭勛・郭守仁らは辺境で從軍とし、郭勛についてはさらなる詳議を命じる↓法司が再び審議して郭勛の罪案を提出↓郭勛の罪は斬首にあたり、妻は功臣の家奴とし、財産を沒收し、収賄した金銭を追徴し、爵・鉄券・誥命を奪ひ、占領した家屋や莊宅を持ち主に返させる↓世宗、疏の中に留める。			
		彈劾⑪ 十一月二十一日南京戸科給事中王樺が郭勛とその徒黨張璠・嚴嵩・胡守中を弾劾*80。			
		六月二日世宗が礼部に手勅(郭勛の獄の裏には大学士夏言の謀りがあつたとみなす)*81。七月一日夏言に閑住を命じる。十月九日郭勛獄にて死す。十月十一日世宗、郭勛の獄について罪案の決定を遅らせたとして刑部尚書吳山*82らを処罰↓刑部左侍郎葉相らが罪案を再提出「官錢の使い込みを返納させ、法外な値段での売買により得た物品・金を民に返させ、不正に入手した房屋・土地を持ち主に返させ、爵・鉄券・誥命を奪う」。 十月二十一日夜王貞の宮變(宮婢が世宗の統逆を謀る)*84 同月二十三日世宗聖旨を下し郭勛の罪案を告示(葉相らが提出した罪案に従つ)。			
		譚氏(新寧伯譚綸の娘)と結婚、長子郭大誠・長女が生まれる時期不明確)*2			

1545	嘉靖二十四年				
1546	嘉靖二十五年				
1547	嘉靖二十六年				
1548	嘉靖二十七年				
1549	嘉靖二十八年				
1550	嘉靖二十九年				
1551	世 嘉靖三十一年				
1552	嘉靖三十二年				
1553	嘉靖三十三年				
1554	嘉靖三十四年				
1555	嘉靖三十五年				
1556	嘉靖三十六年				
1557	嘉靖三十七年				
1558	嘉靖三十八年				
1559	世 嘉靖三十九年				
1560	嘉靖四十年				
1561	嘉靖四十一年				
1562	嘉靖四十二年				
1563	嘉靖四十三年				
1564	嘉靖四十四年				
1565	嘉靖四十五年				
1566	隆慶元年				
1567	隆慶元年				
1568	隆慶元年				
1569	隆慶元年				
1570	隆慶元年				
1571	隆慶元年				
1572	隆慶元年				
1573	隆慶元年				
1574	隆慶元年				
1575	隆慶元年				
1576	隆慶元年				
1577	隆慶元年				
1578	隆慶元年				
1579	隆慶元年				
1580	隆慶元年				
1581	隆慶元年				
1582	隆慶元年				
1583	隆慶元年				
1584	隆慶元年				
1585	隆慶元年				
1586	隆慶元年				
1587	隆慶元年				
1588	隆慶元年				
1589	隆慶元年				
1590	隆慶元年				
1591	隆慶元年				
1592	隆慶元年				
1593	隆慶元年				
1594	隆慶元年				
1595	隆慶元年				
1596	隆慶元年				
1597	隆慶元年				
1598	隆慶元年				
1599	隆慶元年				
1600	隆慶元年				
1601	隆慶元年				
1602	隆慶元年				
1603	隆慶元年				
1604	隆慶元年				
1605	隆慶元年				
1606	隆慶元年				
1607	隆慶元年				
1608	隆慶元年				
1609	隆慶元年				
1610	隆慶元年				
1611	隆慶元年				
1612	隆慶元年				
1613	隆慶元年				
1614	隆慶元年				
1615	隆慶元年				
1616	隆慶元年				
1617	隆慶元年				
1618	隆慶元年				
1619	隆慶元年				
1620	隆慶元年				
1621	隆慶元年				
1622	隆慶元年				
1623	隆慶元年				
1624	隆慶元年				
1625	隆慶元年				
1626	隆慶元年				
1627	隆慶元年				
1628	隆慶元年				
1629	隆慶元年				
1630	隆慶元年				
1631	隆慶元年				
1632	隆慶元年				
1633	隆慶元年				
1634	隆慶元年				
1635	隆慶元年				
1636	隆慶元年				
1637	隆慶元年				
1638	隆慶元年				
1639	隆慶元年				
1640	隆慶元年				
1641	隆慶元年				
1642	隆慶元年				
1643	隆慶元年				
1644	隆慶元年				
1645	隆慶元年				
1646	隆慶元年				
1647	隆慶元年				
1648	隆慶元年				
1649	隆慶元年				
1650	隆慶元年				
1651	隆慶元年				
1652	隆慶元年				
1653	隆慶元年				
1654	隆慶元年				
1655	隆慶元年				
1656	隆慶元年				
1657	隆慶元年				
1658	隆慶元年				
1659	隆慶元年				
1660	隆慶元年				
1661	隆慶元年				
1662	隆慶元年				
1663	隆慶元年				
1664	隆慶元年				
1665	隆慶元年				
1666	隆慶元年				
1667	隆慶元年				
1668	隆慶元年				
1669	隆慶元年				
1670	隆慶元年				
1671	隆慶元年				
1672	隆慶元年				
1673	隆慶元年				
1674	隆慶元年				
1675	隆慶元年				
1676	隆慶元年				
1677	隆慶元年				
1678	隆慶元年				
1679	隆慶元年				
1680	隆慶元年				
1681	隆慶元年				
1682	隆慶元年				
1683	隆慶元年				
1684	隆慶元年				
1685	隆慶元年				
1686	隆慶元年				
1687	隆慶元年				
1688	隆慶元年				
1689	隆慶元年				
1690	隆慶元年				
1691	隆慶元年				
1692	隆慶元年				
1693	隆慶元年				
1694	隆慶元年				
1695	隆慶元年				
1696	隆慶元年				
1697	隆慶元年				
1698	隆慶元年				
1699	隆慶元年				
1700	隆慶元年				

図表三 郭勛詳説年譜

西暦	年次	政治等	軍事	儀礼	文学・刻書
1475	成化十一年	十月六日郭勛生まれる。 ^{*1}			
1476	成化十二年				
1477	成化十三年				
1478	成化十四年				
1479	成化十五年				
1480	成化十六年				
1481	成化十七年				
1482	成化十八年				
1483	成化十九年				
1484	成化二十年				
1485	成化二十一年				
1486	成化二十二年				
1487	成化二十三年				
1488	成化二十四年				
1489	成化二十五年				
1490	成化二十六年				
1491	成化二十七年				
1492	成化二十八年				
1493	成化二十九年				
1494	成化三十年				
1495	成化三十一年				
1496	成化三十二年				
1497	成化三十三年				
1498	弘治元年				
1499	弘治二年	九月十七日夫人姚氏（山東総督備倭都指揮食事姚昇の娘）が長子郭房（字居之）を生む。 ^{*2} 七月二十九日夫人姚氏卒す。 ^{*3} この後継室陳氏（右軍都督同知陳瑛（英）の娘）を娶る（時期不明確）。			
1500	弘治三年				
1501	弘治四年				
1502	弘治五年				
1503	弘治六年				
1504	弘治七年				
1505	弘治八年	この頃一級舎人。八月二十三日侍衛の勞により冠帯を賜る。			
1506	正徳元年				
1507	正徳二年	三月二十日継室陳氏卒し、六月十六日父郭良卒す（父の墓誌を李東陽に依頼）。 ^{*4} 三月二十九日武定侯を襲爵。	十二月三十日冊子手指揮、上直侍衛を拝す。		二月行人張翰らより「贈武定侯郭公世臣奉使旋京詩」を贈られる（張翰はのち御史に出世、「西野張翰」として『千金寶要』に跋）。 ^{*5}
1508	正徳三年				
1509	正徳四年				
1510	正徳五年		七月二十八日後軍都督府僉書管事を拝し、九月三十日神機營五千下坐營管操、十一月十一日総管三千營操練を命じられる。		
1511	正徳六年	三月二十四日母相氏卒す。 ^{*6}	十二月十五日総兵官鎮守両広を拝す。		郭氏文獻集（刊刻）翰林院編修湛若水「郭氏文獻集序」（時期不明確）。 ^{*8}
1512	正徳七年		廣西梧州の賊李通宝らを鎮圧一時都へ戻り自ら勝利を奏上。 ^{*7}		六月二十五日翰林院編修湛若水跋總府題名記後。 ^{*9}
1513	正徳八年				
1514	正徳九年				

正徳九	この頃継室趙氏を娶るか。*10	十一月四日兵部より江西の賊を鎮圧した件で自ら勝利を奏上した無礼を弾劾される。			この頃陳猷章の弟子張詡と交流か。*11
正徳十	六月五日巡按広東御史高公韶・周期雍・刑部郎中顧正・御史張仲賢より両広での不法行為（刑罰過重による殺人、官塩売買、官錢横領を弾劾される→有怒。	広西府江の賊を鎮圧（）正徳十二年か。*12			三家世典（編纂か）徐志文に家伝の編纂を命じ正月元日総督両広軍務都察院右都御史周南三家世典序・正月十三日都察院右都御史王均実三家世典序・正月十五日吏部尚書楊一清三家世典序「閏四月十五日広東布政司右布政使吳廷華三家世典跋」*13。將鑑博議「刊刻か（達實序）」*14。
正徳十一	この年長子郭房に魏国公の孫娘徐氏を娶るが、六月二十八日郭房卒す*15。八月二十七日巡按広西御史朱鼎より不法行為を弾劾される→有怒。九月二日刑科都給事中王蘭より「民を害し臣下の礼を失している上、その悪事を都察院が隠蔽している」と弾劾される→有怒。				純慶勲懿集「刊刻か」正月十日戸部尚書兼大学士費宏「純慶勲懿集序」正月十六日国子監祭酒王瓊「純慶勲懿集序」正月十六日翰林院編修湛若水「純慶勲懿集序」*16。千金寶要「刊刻か」四月十五日郭勲「重刊千金寶要序（予嘗語滄秀亭）」*17。
正徳十二		八月二十五日広西より帰還し総管三千營操練を拝す。十一月一日総督両広都御史陳金が広西府江の賊鎮圧での郭勲の功を奏上。			三家世典「編纂か」十一月之吉総督両広都御史陳金三家世典序*18。八月綿京後三家世典に自身の業績を付して刊刻か*19。
正徳十三	正月一日府江平乱の功を以て、廢を許される。九月二日平賊の功を以て太保を賜り、子一人を錦衣衛百戸に廢すことを許される（子が無かつため弟に廢）。				白樂天詩集「刊刻か」八月之吉総督両広都御史陳金「白樂天詩集序」*20。唐元次山文集「刊刻か」十月十三日翰林院編修湛若水「元次山集序」*21。
正徳十四	六月興王（世宗父）封地は安陸州（現湖北省鍾祥市）暮る。				白樂天文集「刊刻か」十月一日礼部左侍郎王瓊「白樂天文集序」*22。
正徳十五				八月二十三日憲宗純皇帝忌辰、茂陵を祀る。八月二十五日太歳・風雲・雷雨・山川の神を祀る。正月四日孟春、太廟の享祭を代行。五月十二日仁宗昭皇帝忌辰、獻陵を祀る。	詩韻釋義「刊刻か」正月四日、太常寺卿提督四庫館楊一漢「詩韻釋義序」（題署に「關西翰林子釋義」）。*23。
正徳十六	三月十四日武宗の遺旨により太監張永・定辺伯朱泰・尚書王憲と共に精銳兵を率いて皇城四門・京城九門・草橋・蘆溝橋を守備。四月二十二日世宗即位。四月二十五日武宗の陵墓造営を任される。七月二十三日世宗初の経筵に「如例侍班」（主事は定国公徐光祚・大学士楊廷和、経筵官顧鼎臣・	五月一日提督团營總兵官兼督五軍營を拝す（团營は惠安伯張偉と共同。九月八日提督团營官軍を拝す（兵部尚書彭澤、太監張忠・		正月八日孝貞純皇后（憲宗第二皇后）禪祭、茂陵を祀る。二月五日大社大稷の大祀礼を代行。二月二十日清明節、定国公徐光祚らと長陵などを分祀。世宗嘉靖帝即位。四月二十二日世宗即位を以て天地に告す（建昌侯張延齡宗廟社稷に告す）。四月二十四日武宗玄宮施工を以て天寿山の神を祀る。	

世		世	
1522	嘉靖元年	1523	嘉靖二年
温仁和・董妃・李時・翟璽・楊慎・嚴嵩＊24。		八月十六日、辺境防衛の功を以て太子太保を賜る。	
惠安伯張偉らと共同。		三月六日、辺境官の警鐘を受け京営軍馬を操練し、辺境へ赴くよう命じられる。三月十三日連年の工役のため京営の兵の逃亡が多いことについて自首を促し軍に戻すよう請う。兵部却下。三月二十六日軍務について六事を奏上（将権を重くし流言者を斬首させよ）。兵部反対。郭勛は威権を欲している。世宗も却下。四月二十四日詔「府事に關わらず、辺境戦に備えよ。」三月二十二日兵部尚書彭澤が老衰を理由に団營提督の辞職を願ひ、代わりに郭勛を推挙し認められず。閏四月二日出征に待機する兵に馬匹草料を毎月支給するよう請う。戸部反対。世宗も却下。	
三月六日、辺境官の警鐘を受け京営軍馬を操練し、辺境へ赴くよう命じられる。三月十三日連年の工役のため京営の兵の逃亡が多いことについて自首を促し軍に戻すよう請う。兵部却下。三月二十六日軍務について六事を奏上（将権を重くし流言者を斬首させよ）。兵部反対。郭勛は威権を欲している。世宗も却下。四月二十四日詔「府事に關わらず、辺境戦に備えよ。」三月二十二日兵部尚書彭澤が老衰を理由に団營提督の辞職を願ひ、代わりに郭勛を推挙し認められず。閏四月二日出征に待機する兵に馬匹草料を毎月支給するよう請う。戸部反対。世宗も却下。		八月十五日、武宗母張氏に昭聖、康惠慈壽皇太后、翌日世宗母蔣氏に章聖皇太后と尊号を贈るを以て天地・宗廟・社稷を祭告（駙馬都尉蔡震・鎮遠侯顧仕隆と。七月二十一日世宗父朱祐杭の神主を都の觀德殿へ移し、皇考恭穆獻皇帝と尊号を贈るを以て天地・宗廟・社稷を祭告（鎮遠侯顧仕隆・遂安伯張總と）。九月十五日大禮の尊号決定を天下に詔諭するに際し天地・宗廟・社稷を祭告（崔元・張偉と）。十二月九日禋祭を前に懿祖・熙祖・仁祖皇帝を祭告（崔元と）。三月九日社稷の大祀を代行。三月二十八日、仁壽宮での火災を以て天地・宗廟・社稷・山川・城隍を祭告（駙馬都尉崔元・惠安伯張偉・遂安伯陳總・礼部尚書席書と。九月十日世宗父朱祐杭の第二任王妃王氏を淑妃に冊封する儀にて持節（ <u>今上</u> ）費宏と。七月二十日、裕泰、前、社稷を祭告（張偉と。二月五日社稷の祀を代行。十二月二十九日歲暮、裕泰を前に太廟・社稷に告す（惠安伯張偉と）。	
1524	嘉靖三年	1525	嘉靖四年
三月三日三代祖と繼室趙氏への誥命賜予を請ひ許される。（吏部が三代祖への誥命は不用と主張するも世宗は郭勛に従う。）		三月三日三代祖と繼室趙氏への誥命賜予を請ひ許される。（吏部が三代祖への誥命は不用と主張するも世宗は郭勛に従う。）	
1526	嘉靖五年	1527	嘉靖六年
三月十八日進士登第者三百名に賜宴。礼部が主席大臣の席を左右に分けようとしたのに対し、通例では中央に主席大臣が位順に並ぶことと奏上。世宗が郭勛の言に従って詔を下すも、礼部は左右に分裂させたまま宴を行い、郭勛は		三月十八日進士登第者三百名に賜宴。礼部が主席大臣の席を左右に分けようとしたのに対し、通例では中央に主席大臣が位順に並ぶことと奏上。世宗が郭勛の言に従って詔を下すも、礼部は左右に分裂させたまま宴を行い、郭勛は	

四月十五日、三國志通俗演義
目録（關中修髯子書于居易草
亭）。＊25

	世	1527	1528	1529	宗		
		嘉靖六	嘉靖七	嘉靖八			
	やむを得ず左席に座した。のちさらに上疏して論駁した。四月二十九日武舉登第者五十名に賜宴、兵部が班列の首に大学士費宏を置き、郭勛を兵部尚書の下に置こうとしたのに対し、「爵位がある者は尚書より上のはず」と上疏、兵部尚書李鋌らが「武宴は兵部が催す宴であるから兵部尚書の下が妥当」と覆議し、世宗、郭勛に従う。五月十四日御史張景華らより弾劾され、自効して辞職を願い出るも許されず。七月三日給事中張嵩・鄭一鵬より「家人郭順に虚言を弄させ、その狭い家の代わりて虎賁左衛の土地と建物を買取った」と弾劾される。李福達の獄① * 28 逆賊李福達を匿つたとして七月四日都察院左都御史蕭賢・給事中程祐・劉琦・王科より弾劾、七月十四日給事中陳鳳謨・南京御史姚鳴鳳・王猷らより弾劾される。李福達の獄② * 29 十二月二十六日山西巡撫御史江潮・巡按御史馬録・兵科給事中鄭自璧・張達より弾劾される。李福達の獄③ * 31 九月十八日逆賊李福達を匿つたとして弾劾されていた件で、兵部左侍郎張璠・吏部左侍郎桂萼らの援けを得て不問となる。	正月八日御史吳仲より「不法行為を弾劾される。世宗は逆に吳仲を責める。十二月十三日『明倫大典』を昌化伯邵傑に与えず不仲に。十二月二十一日把總湯清(世宗の南郊大祀に欠隊した)を提督尚書李承勛に弾劾されて罷免となつた」の復職を求めて李承勛を貶め陰害に。この頃太監張永・提督尚書李承勛と論争。礼部侍郎霍韜が郭勛に加勢して李承勛を批判し、吏部尚書桂萼が霍韜を論ず(嘉靖七年の事だが時期不正確) * 32。またこの頃陳皇后之父陳万言と縁組みするか * 33。正月十日大学士楊一清が「郭勛のために宮政が妨害されている(昨年から続く湯清をめぐる李承勛との争い)として世宗に郭勛を戒めよう請う * 34 ↓世宗は郭勛を擁護。正月二十七日湯清の件で巡視京宮科道言「官」王漣より「刑罰を擅にしていること非難される。世宗、湯清を錦衣衛に鞫問させ郭勛は有恕。二月十二日巡按御史趙鑑より弾劾される(罪人金輅(錦衣衛人、隆慶衛に充重)から賄賂を受け取り、護送の道中で金輅を救い都へ帰した) ↓郭勛強弁 ↓世宗怒り法司に罪案の審議を命じる(郭勛の徒党である張璠・桂萼等の閣臣を連座させるのは避けた) ↓刑部侍郎許讚が郭勛を擁護 ↓世宗は郭勛の職務怠慢、勝手に金輅を助けたこと、強弁の無礼を責めるも、勲戚であることを鑑みて罪を軽くし、兵職の罷免。太保太傅の奪還。中軍都督府帯俸として閑住を命じる * 35。 ↓四月二十二日刑部尚書高友璣が郭勛の処罰は不十分であると訴える。六科給事中趙廷端 * 36。十三道御史劉謙が逆に高友璣を弾劾して罷免に追い込む。八月二十三日詹事府詹事霍韜が「楊一清は故太監張永から収賄していた」と上疏、また張永の使用人朱繼宗が「張永の弟張容は楊一清への賄賂により錦衣衛指揮僉事の官を得た」という流言を流す(一説に郭勛が楊一清を貶める機会を狙い、霍韜の上疏に乗じて朱繼宗に流言を流させた)とも、翌年九月楊一清収賄の罪で罷免・閑住 * 37。	上、世廟施工により人員が足りていないためとして寛恕を請う ↓世宗も憐れんで赦す。十月七日御史張問行・給事中劉琦より馬地の利益を貪つていると弾劾される。十月十九日御史魏有本より兵糧を横領していると弾劾される。	九月二十四日文武の宴での争いから官吏に憎まれていると訴えて、營務の罷免を請う。儀詔。	三月四日黄河清まるを以て郊壇にて天地を祭告。四月十三日甘露降るを以て郊壇にて天地に告謝。十月二十二日陳皇后世宗の第一任皇后崩御。第二任皇后張氏冊立。十一月二十七日第二任皇后張氏の冊立を前に天地を祭告。翌二十八日第二任皇后張氏(順妃)冊立の儀にて持節(大学士楊一清捧冊、大学士張璠捧宝)。	二月十二日金輅の件等(上記)により兵職(提督团營總兵官)罷免	

1530	嘉靖九	五月四郊起工。五月二十二日四郊(園丘／天を祀る壇)起工。總督工程官に任命される(宣城伯衛鏗・大学士張璫も總督／礼部尚書李時・工部左侍郎蔣瑤・都察院右都御史汪鉉・吏科給事中夏言とも協力)。七月十八日錦衣衛舍人張瀾より二度弾劾される(兵士を擅に使役、逆賊を隠匿)↓病と称して辞職を願ひ出るも世宗より優詔。八月八日給事中薛甲の疏中で「貪縱之跡、彰彰明著」と批判される。十月十五日郊制の改制に伴い「祀儀成典」編纂の監修官に任命される李時・汪鉉も。	五月三日講等官川蔚・巡視京宮給事中魏良弼より弾劾される(郭勛の家人郭喜が道士擅用と通じている)↓郭勛は有怨、郭喜は処罰。七月七日大学士張孚敬・張璫※38・太常寺卿彭澤が行人司正薛侃を利用して少詹事夏言・給事中孫應奎を陥れたとされる件で霍璽と共に調査官に任じられる。張孚敬は致仕、彭澤は山西行都司で充軍※39。七月二十四日四郊竣工(前年)の功績を以て太傅仍兼太子太傅を拜す。八月十九日戸科左給事中孫應奎より「奸悪」と弾劾される↓世宗はこれを私怨の復讐とみなし孫應奎を罰す。無逸殿※40竣工。九月二十二日西苑の無逸殿竣工、園風亭にて賜宴。	十月十日翰林院編修楊名より「妄悪」と批判される(寵愛をかさにきて、軍權を掌握する上、政務にも口を出す)↓世宗、「捏造により忠善なる者を陥れようとしている」と怒り、楊名とそれをかばった翰林院編修程文徳・兵部侍郎黃宗明を罰する。
1532	嘉靖十一	三月十五日提督団營兼五軍管總兵官を拜す。五月四日辺境の小康状態を受けて戸部が征馬八千の放牧を促す↓郭勛は三千を残して東宮序左參將都勲に預けるよう請う↓世宗認める。	二月五日提督団營兼後軍都督府事を拜す。五月三日軍務について二事を奏上(官軍月糧・馬匹料管についで)。六月十九日京營の定員を満たすよう兵を招募するよう請う。	
1533	嘉靖十一	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1534	嘉靖十二	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1535	嘉靖十三	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1536	嘉靖十四	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1537	嘉靖十五	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1538	嘉靖十六	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1539	嘉靖十七	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1540	嘉靖十八	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1541	嘉靖十九	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1542	嘉靖二十	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1543	嘉靖二十一	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1544	嘉靖二十二	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1545	嘉靖二十三	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1546	嘉靖二十四	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1547	嘉靖二十五	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1548	嘉靖二十六	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1549	嘉靖二十七	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1550	嘉靖二十八	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1551	嘉靖二十九	正月十二日太廟に特享する礼にて捧主官を務め賞与を受ける(駙馬都尉謝詔・大学士張璫・霍璽、兵部尚書李承勛・戸部尚書梁材・吏部尚書李時も)。三月二日淑安方氏らを九嬪に冊封するを以て祖廟に告すに際し捧主官を務める謝詔・張孚敬(張璫)・霍璽、梁材、李時、太常寺卿陳道瀛と。	正月欽安殿※43竣工。正月十三日欽安殿竣工し、三日間齋醮。上香官に任じられる。正月十九日南郊での祈穀を前に太廟にて配神を請う礼を代行。正月二十二日驚蟄節(啓蟄)、園丘にて祈穀礼を代行↓刑部主事趙文華より「武臣に代祀させるべきでない」と非難される↓趙文華五ヶ月停俸。正月三十日世宗の健康恢復祈願のため建醮(道士による法事)を行うよう願ひ出る↓世宗その忠愛を喜ぶ。二月六日朝日壇にて大明を祀る。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳・惠安伯張偉、大学士李時・霍璽、兵部尚書王憲・都察院都御史汪鉉・礼部左侍郎兼翰林学士夏言・礼部侍郎顧鼎臣・翰林院侍講学士廖道南)。二月世宗の世継ぎ誕生祈願のため各壇を分祀するよう命じられる。三月十二日皇地祇の神牌を北郊に奉安する。五月十七日夏至、前太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。五月十一日夏至、嗣子生誕を願ひ方澤にて地の大祀礼を代行。八月十三日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。同日歴代帝王の祀礼の代行を命じられる(李時と)。十二月二十一日太廟の給祭にて捧主官を務める(定国公徐延徳・駙馬都尉崔元、顧鼎臣、礼部右侍郎席春ら)と。	二月八日虜が侵入を謀ぐ、いるとして馬一万二千五百匹を營の騎兵に与えるよう請う。十二月八日郭勛の奏上に従ひ詔、各營の馬を増やし飼料のうち一石を銀五分で支給する。
1552	嘉			

【重録列聖實訓實錄】編纂開始 七月十二日 重録列聖實訓實録の監録官を拜す*44(総視経理官は大学士張孚敬、李時/経理官は吏部尚書汪鋐、礼部尚書夏言/吏部左侍郎兼翰林院学士顧鼎臣/管録官は太常寺卿兼翰林院侍読謝丕、侍読学士吳憲、張璠、侍講学士廖道南。神御閣、延議宮(工とも)實訓實録の安置所)七月十五日神御閣起工、二十日延議宮起工、督工を命じられ工所にて行れ。八月十日世宗生辰、長春酒を賜り共飲、張孚敬・李時、汪鋐、夏言と。八月十二日南京太廟火災を受け(南京礼部尚書湛若水が再建を請う。世宗反対)張孚敬・李時らと陳言し再建を促す。十一月九日世宗が賦した遺詔の句に唱和(泰和伯陳万言、張孚敬・李時、汪鋐、夏言、顧鼎臣、礼部侍郎黃綰・黃宗明、工部侍郎甘為林、侍講学士廖道南も)世宗それを書き留めさせる。

正月元旦世宗の「御製元旦詩」に唱和(大学士張孚敬、李時、吏部尚書汪鋐、礼部尚書夏言らと)。二月太廟改建*45 起工 二月八日太廟改建の総督工程に任じられる。張孚敬、李時も総督工程/提督領軍は汪鋐/総擬規制は夏言/提督工程は工部侍郎甘為林。三月十七日太廟施工の件で吏部尚書汪鋐と意見不一致、李時が仲裁役として三者会議を行ひとまず解決。世宗は救を出して郭勛の「恭敬謹慎」を賞賛。五月九日汪鋐と争つて奏上し誘ひ合う。管工給事中田濡らより「郭勛は寵愛をかきにきて私怨から人を貶めている」と非難される。五月二十八日「主事潘瑞が指揮李成を杖死させた」と奏上し獄へ追い込む。工部郎中陸時雍より「長らく兵権を掌握し、寵愛を待みに真相を隠蔽して擅にふるまっている」と弾劾される。世宗は陸時雍を一級降格し速方に追いやる。十月十八日啓祥宮(世宗父誕生のご宮)等修建の功勞を以て太子太師を拜す。

三月二十二日世宗に「先陵視察」発つ。(四月末、大学士李時・礼部尚書夏言も扈從。翌二十一日天寿山に駕御。夜李時・夏言と共に行殿に召され七陵の守備増強について意見を求められ世宗は夏言の案を採用。七陵修工 四月九日世宗より七陵修工を伝旨するよう命じられる(李時らと)。武学の改建・改制 四月十日武学の振興を求めて奏上(御史郭折も武英殿での講武と西苑での閲射を請う。兵部が廢寺大興隆寺を改築して武学にするよう奏上。礼部・工部が議案を奏上*47。世宗従う。四月世宗陵墓起工 四月十五日世宗に召されて御製詩を賜り、山陵世宗陵墓永陵造営について激励される(李時・夏言と)。四月十三日世宗に騎從し九龍池に遊び銀幣を賜る。四月二十七日世宗より景陵の宮殿重建について語られ銀幣・宝鈔を賜る(夏言と)。四月二十九日都・帰還。五月五日端午節、謁陵扈從の慰勞として艾虎・花條・百索・牙扇等を賜り無逸殿にて賜宴(李時・夏言と)。五月十七日世宗陵墓について皇妃從葬の図式を礼部・工部と共に進覽。七月七日三事を奏上(塩稅を工費に充てる等*48)。戸部却下。七月史成竣工、太師を賜る。八月重録列聖實訓實録「成」八月十九日「重録列聖實訓實録」を恭進(李時らと)。八月二

五月十二日戸部に牧場の減稅と団營の馬の飼料増量を請う。八月二日辺境に鎮守を復活させ土地を再び与えるよう申請。巡部大同都御史樊繼祖が反対、兵部、世宗も却下。

【第三任皇后方氏冊立】正月十四日立春、第三任皇后方氏冊封の前に南郊を祭告(成国公朱鳳が北郊)、翌十五日皇后方氏冊立の儀にて正使を務める(副使は大学士張孚敬。二月一日太社太稷の祀礼を代行。同十四日啓蟄、園丘にて祈穀礼を代行。四月一日太廟・世廟の享祭を代行。五月二日夏至、方澤にて地の大祀礼を代行。七月、日太廟・世廟の享祭を代行。世宗より敕を賜り奉命謹誠を賞賛される。八月四日太社太稷の祀礼を代行。十月一日太廟・世廟に享く礼を代行。

正月二十五日啓蟄、園丘にて祈穀礼を代行。二月八日太廟、改建を前に預告。五月方澤の大祀を前に視牲を代行。八月九日万寿聖節(世宗生辰)を前に内殿にて祭告するに際し捧主官を務める(駙馬都尉鄒景和、大学士費宏・李時、礼部尚書夏言、戸部尚書梁材、礼部兼学士仍掌府事顧鼎臣も。八月十一日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は成国公朱鳳、宣城伯衛鏞、費宏・李時、吏部尚書汪鋐、夏言、顧鼎臣、兵部尚書張璠*46。戸部左侍郎張璠、翰林学士謝丕・張璠、侍講学士廖道南・蔡昂。十一月八日曹氏を端嬪に冊封する儀にて正使を務める。十二月二十日大社礼にて捧主官を務める(定国公徐延德、駙馬都尉鄒景和・遂安伯陳鏞、李時、夏言、張璠、吏部侍郎霍輅らと)。

四月十二日郭勛の請求により詔、皇莊の廐と牧場の滯稅を調へ太廟改建費用に充てよ。五月十四日京營の馬が不足しているとして操練の免除を奏上し認められる。六月一日陵墓造営の工員不足に団營・三大宮の官軍を充てるよう請ひ。六月十七日その官軍に月給として米・冬衣・花布を下されるよう請う。戸部に却下されるも反論、世宗は郭勛に従う。

正月八日、時享礼を代行(陪祀は定国公徐延德、戸部尚書梁材ら)。二月一日祈穀礼を前に視牲を代行。二月三日の太社太稷の祭祀を前に皇祖に配神を請う礼を代行。二月四日帝社帝稷の祀礼を代行。二月六日啓蟄、園丘にて祈穀礼を代行。二月二十二日春分、朝日壇にて大明を祀る。二月二十六日昭嬪・敬嬪・静嬪冊封の儀にて正使を務める(遂安伯陳鏞・宣城伯衛鏞と)。四月二十二日世宗自ら長陵を祭告するに際し六陵を分祀(英国公張溶、陳鏞、大学士李時・礼部尚書夏言、駙馬都尉謝詔と)。五月二十四日夏至節、方澤にて地の大祀礼を代行。七月一日時享礼を代行(捧主官は陳鏞、衛鏞、李時、夏言、礼部尚書汪鋐、兵部尚書張璠、都察院都御史王廷相。八月六日帝社帝稷の祀礼を代行(陪祀は陳鏞、衛鏞、李時、尚書夏言、顧鼎臣、張璠、戸部左侍郎張璠、翰林学士謝丕・張璠、侍講学士廖道南・蔡昂。九月九日沈氏、閔氏を貴妃に冊封(他六名する儀にて正使を務める(駙馬都尉謝詔らと)。九月二十一日世宗自ら長陵を祀るに際し六陵を分祀。十月一日給享・時享にて捧主官を務める。十月第二皇子誕生 十月九日皇子(第二子)誕生を以て世宗自ら南郊を祀るに際し方澤を祀る。十二月二十五日世宗第二子命名(載銓)を以て七廟に分告(衛鏞、陳鏞、李時、夏言、顧鼎臣・張璠と)。十二月二十七日二宮(へ)の尊号を以て

十一月世宗の詩に唱和①。(上記)

元旦世宗の詩に唱和②。(上記)

世		157
嘉靖十六		十四日「列聖御容」を景神殿に安置、玉牒を皇史成に安置（李時らと）。八月二十七日「重録列聖實訓實録」の功勞により謹身殿で賜宴、銀八十兩など賜る。九月一日「重録列聖實訓實録」の功勞を以て光左柱国を拜す。十一月太廟改建竣工。十一月二十七日宗廟（太廟）竣工の功勞を以て禄米三百石を賜る。十二月四日塩稅の件で再び上疏し、戸部封下。正月二十日高祖（祖父の祖父）郭鎮の妻永嘉公主に監号を請うて許される。三月十四日郭英を太廟に配享するよう請うて許される。三月十三日重罪人を会鞠して辺境へ流刑するよう奉勅（李時・夏言と）。九月十五日東宮冊立を薦める上疏（李時・夏言と）。十一月十二日上疏して世宗の健康恢復を賀す（李時・夏言らと）。十一月一日陳工の遲延を理由に工部省書甘為林・内官監太監溫璽を彈劾し罷免、閑住に追い込む（工部郎中李仁・太監王朝も錦衣衛の獄へ）。
世		四月十三日安南の政情不安を危惧し、雲南・広東に右參政副使、広西貴州に副使を置くよう奏上して認められる。車純・魏亨・仲選・鄒守愚・王世瑤・張烈が登用される。十月八日諸城壁の施工にあたる官軍が不足しているとして補充を請う。十月二十四日玄真殿（詳細不明）等の施工にあたる官軍の給料の塩の不足分を銀で支給するよう奏上し許される。
世		正月八日祈穀礼を代行。正月二十六日皇子誕生を以て廟に告す（英国公張溶・遂安伯陳鏞、大学士李時・夏言らと）。二月十日帝社帝稷の祀礼を代行。四月二十三日靖妃を貴妃に冊封（他四人する儀にて正使を務める）。五月一日世宗第三、四子に命名、載奎・載訓、するを以て獻皇帝廟、世宗父の祀廟）を祭告。五月五日夏至、方澤にて地を大祀するに際し分獻。五月十六日雷誓を以て景神殿にて皇祖を祭告するよう命じられる。八月二日太社、陳鏞の祀礼を代行。八月三日帝社帝稷の祀礼にて陪祀（張溶、駙馬都尉鄒景和と）。九月九日霜降節、七陵を分祀（張溶、駙馬都尉鄒景和と）。九月十五日世宗母蔣氏の病恢復を願うて世宗自ら太廟と太社太稷に祈禱するに際し獻皇帝廟と帝社帝稷に告すよう命じられる。十一月八日太廟にて皇祖に配神を請う礼を代行。十一月十一日冬至、園丘にて天の大祀礼を代行。十二月二日世宗第六子に命名（剪髮）するを以て廟に告す（張溶、衛鐸、駙馬都尉謝詔、夏言、顧鼎臣、礼部尚書嚴嵩と）。十一月十六日太廟にて嚴嵩大給礼を代行。十二月二十七日立春、皇祖・列聖・獻皇帝廟に特享する礼を代行（捧主官は成国公朱希忠、衛鐸、鄒景和、李時・夏言、顧鼎臣、嚴嵩）。
嘉靖十七		正月十二日第七皇子誕生を祝賀して玉帶・馬匹を献上、銀幣を賜る。二月五日世宗より日頃の働きの褒賞として玉帶を賜る（大学士李時・夏言も）。四月二日王府の戸籍管理について王府に子女が生まれる毎に奏聞させて記録するのきと奏上し認可。四月六日人選について進士を偏重せず、華人監生でも賢明で才氣があり品行や政治実績の卓異なる者を登用して人材を激勵すべきと奏上。四月七日より世宗の天寿山駕御（扈從、十五日沙川行宮にて夏言のテントの厨より出火し李時・郭勛のテントも延焼、世宗から預かっていた奏本を焼失、四十五日都給事中朱隆禧より批判される（鎮守の復活を請うたり塩鉄稅を徴収して国用に充てるよう奏上した件について（嘉靖十五年参照）「百姓を害するよう」と批判。七月慈寧宮竣工。七月二十二日慈寧宮の竣工を以て銀五十兩などを賜り一子を錦衣衛に應ずることを許される（李時・夏言・太監高忠も）。十一月二十三日奉先殿等の施工で欠員中の督視を大学士顧鼎臣・工部尚書蔣珣・周叙に兼ねさせるよう願うも認められず。十二月四日太后蔣氏（世宗母）崩御。十一月六日世宗母蔣氏の陵墓を北京大峪山に建造する）が決定される。夏言と共に世宗の大孝を賞賛。十二月十二日世宗母蔣氏の陵墓建造の筆頭監督に任じられる（總督工程は夏言・顧鼎臣、提督領軍は兵部尚書張瓚、調督工程は蔣璠、以下略）。
嘉靖十七		二月三日辺境軍務について奏上（大寧都司（東北部に位置する衛）等の班軍を掌る指揮に署都指揮僉事の職を与えて軍務の円滑化を図る）→世宗従う。
嘉靖十七		正月二十七日園丘にて祈穀礼を代行。二月四日太社太稷の祀礼を代行。二月十三日春分、朝日壇にて大明を祀る。二月二十三日世宗の山陵駕御の前に景神殿に預告。三月二十九日立夏、太廟にて給享を、獻皇帝廟にて時享を代行。五月十二日方澤の大祀を前に祝牲を代行。十四日太祖に配神を請い、十七日方澤にて地の大祀礼を代行。七月三日立秋、太廟にて給祭を、獻皇帝廟にて時享を代行。七月二十一日額驤王（世宗第五子朱載堦）・威懷王（第六子朱載堦・薊哀王（第七子朱載堦）に追封・冊諡するを以て景神殿に告し、且つ正使を務める（副使は大学士李時・夏言、礼部尚書嚴嵩。八月九日帝社帝稷の祀礼を代行。八月二十日秋分、夕月壇にて夜明を祀る。太宗の廟号を成祖に改号。51）獻皇帝（世宗父）へ廟号書宗を追尊。九月五日太宗の廟号改号と獻皇帝の廟号追尊及び神主の改定が決定され、神主祭祀の代行を命じられる（捧主官は成国公朱希忠・英国公張溶・京山侯崔元、遂安伯陳鏞・宣城伯衛鐸、大学士李時・夏言、顧鼎臣。九月九日大享礼を前に世宗自ら南郊を祭告するに際し朱希忠らと北郊・宗廟・社稷を分祀。十月五日立冬、太廟にて時享を代行（捧主官は張溶、朱希忠、陳鏞、夏言、顧鼎臣、吏部尚書許讚、礼部尚書嚴嵩、兵部尚書張瓚、戸部尚書李廷相）。十月三十日高皇帝（朱元璋）・高皇后（馬皇后）の神位改定の儀

正月一日巡撫四川等処都察院右副御史広陽西野張翰「跋千金寶要後」、正月十五日上海陸深「重刊千金寶要方序」*49。この年三月の郭英太廟配享までに「國朝英烈記」或いは「英烈傳」を著したとされる*50。

嘉靖十八

正月元旦世宗より太后蔣氏を顕陵(湖北省鍾祥市純徳山)父献皇帝の陵墓に合葬する旨を伝旨するよう面諭される。
 *53 **正月十日奉先殿(皇帝の祖先を祀る竣工)**正月二十九日昨冬の皇天上帝への冊表祇薦での功勞を以て鄒国公に進む。正月三十日礼部尚書張璠が郭勛の位は既に定国公徐延徳の上であると奏し、首班官(朝儀班列の首位)となる。
 *54 **二月一日皇太子冊立(第二子朱載堉(母は王貴妃))**二月六日皇太子冊立を祝つて馬・幣・玉幣を献上し、白金絹織物を賜る。
 *55 **二月一日南巡(へ)**三月十三日南巡の扈從官として金蟒宝帶・銀麒麟刀等を賜る。五月十五日世宗より諭「蔣氏の靈駕を見送り船に乗せられるまで督視せよ」。五月十八日夏言と共に見送つて帰還、金幣・酒饌を賜る。七月十八日大工(奉先殿の施工か)について工部營繕郎中范欽・屯田司郎中俞咨伯を弾劾し罷免、停俸に追ひ込む。
 *56 **商人徐鐸から資材を値切つて買入れ施工を遅らせた罪。**八月二十五日管工の官吏が職務を怠りながら容易に昇進できている現状について批判し、科道官による検査・弾劾を請う。世宗従つ。
 *57 **八月皇穹宇*56起工(泰神殿を改建)**八月二十八日皇穹宇の施工について視察を命じられる(大學士夏言・顧鼎臣・兵部尚書張璠・錦衣衛都督同知陳寅、錦衣衛指揮使張錡・趙俊、礼部尚書嚴嵩と)。十二月三十日礼部尚書霍輅が夏言を批判(「南巡の際に収賄しなかつたのは文官では袁宗儒、武官では郭勛だけ」)↓世宗「霍輅は南巡に同行していなかつたのに何故知っているのか」と責める。

嘉靖十九

四月二十日辺境(政務)について五事を奏上。鎮守内臣の不動産つた田畑を辺將に分け与える等。*59。四月二十二日「武臣が文臣に虐げられている」と奏上*60。海州副総兵時陳を擁護↓都察院が時陳の不法行為を厳しく弾劾(殺戮・収賄・私米販売等の罪)。
 *61 **七月皇穹宇竣工**七月九日皇穹宇竣工の功勞を以て子姪一人を錦衣衛百戸に贈することを許される。七月二十四日世宗が両親祭祀のために仙銀の器を欲していた所道士款朝用(段朝用)の生成した器を進呈し禄米歳百石を賜る。八月十八日天災や辺境の政情不安、盜賊の頻出を受けて大臣らに自劾させるべきと奏上認められる。各大臣ら自幼と辞職の旨を上疏(刑部尚書周期雍は実際に致仕となり、他はほぼ留職となった)。九月十三日広西道試御史舒騰翼に批判される礼部尚書周事府事霍輅と共に夏言と競つて上疏し撻り合った無恥↓世宗は舒騰翼を降格させる。
 *62 **十二月沙河行宮城竣工**十二月十八日沙河行宮城竣工の功勞を以て銀五十兩等を

五月十三日秋期班軍で河南等處の兵の欠員が多かつたことについて、災害を理由に寛恕を求める。六月七日この頃官軍の多くが宮殿の施工に駆り出されて班軍に四万六千人の不足が生じたため、郭勛の提案により「包工」という傭兵を班軍に充てて月糧を支給した。た↓戸部尚書梁材が月糧支給を断固拒否したため梁材を弾劾↓世宗も梁材を「似忠実詐」として閑住を命じる。九月一日東西官庁・舊武營等に馬一万八千
 において顧鼎臣と共に題主*52を命じられる。十一月十三日園丘での大祀を前に分献し(朱希忠・夏言・顧鼎臣らと)、配帝を請う礼を代行。十一月十八日皇祖の神主への題主を前に配享を請う礼を代行。十二月十日太廟にて大給礼を代行(世宗が喪中のため)。十二月二十七日、太后蔣氏(世宗母)への冊諡を以て南郊に告す(北郊は張溶・太廟は朱希忠)。
 *63 **二月一日皇太子冊立**二月一日皇太子冊立を以て睿宗献皇帝・太社太稷に分告し、且つ正使を務め、翌二日世宗自ら太廟に告すに際して捧主官を務める。二月三日大學士夏言が慶雲(吉祥)を上疏して賀したことを受けて宗廟社稷に告す。二月十一日南巡を前に世宗自ら皇天上帝・太祖・睿宗を祀るに際し成祖廟に告す(大學士夏言・顧鼎臣、吏部尚書許讚・礼部尚書嚴嵩・兵部尚書張璠・戸部尚書李廷相・英國公張溶・威寧侯仇鸞もも告す)。四月二十四日南巡より帰還、世宗自ら皇天上帝・太祖・睿宗を祀るに際し列聖群廟に分告。四月二十八日世宗自ら長陵を視察し祭祀するに際し各陵を分祀。五月十一日慈孝献皇后(世宗母)の埋葬を前に世宗自ら太廟・睿宗廟に告すに際し列聖廟を分告。五月二十四日夏至の方澤の大祀を前に視牲を代行。二十七日夏至、分献(成国公朱希忠・遂安伯陳璉、夏言と)。六月十八日睿宗献皇帝(世宗父)忌辰、永孝殿にて祭祀を代行。六月二十日修身反省のため世宗自ら玄極宝殿にて祭告するに際し北郊を祀る。七月十四日立秋、宗廟の給享を代行。閏七月十三日*58皇子誕生を以て群廟に告す。八月五日帝社・帝稷の祀礼を代行。同日慈孝献皇后(世宗母)の祔享を太廟及び列聖群廟に告すよう命じられる(夏言と)。八月九日翌日の万寿聖節(世宗生辰)を前に奉先殿にて祭祀を代行。八月十一日「皇天玉冊」・「祖考寶冊」の作製と皇穹宇の起工を以て世宗自ら泰神殿にて皇天上帝に告すに際し司工の神を祀る。九月十七日立冬、太廟にて給享を代行。九月二十五日世宗第八子に命名するを以て列聖廟に告す(夏言と)。十一月十三日冬至、世宗自ら園丘にて天を大祀するに際し分献朱希忠・夏言・顧鼎臣と。十二月一日宗廟にて大給礼を代行。十二月十九日立春、太廟と特する礼を代行。
 正月三日宣宗章皇帝忌辰、祭祀に冊封。他四人する儀にて正使を務める。正月十九日啓蟄の祈穀礼を前に視牲を代行。二月五日朝日壇にて大明を祀る。二月六日帝社帝稷の祀礼を代行(陪拝は成国公朱希忠・英國公張溶・京山侯崔元、遂安伯陳璉・宣城伯衛鏞、大學士夏言・顧鼎臣・翟鑾、吏部尚書許讚・礼部尚書嚴嵩・兵部尚書張璠、都察院左都御史王廷相・戸部尚書梁材)。二月十九日歴代帝王の祀礼を代行。三月二十二日立夏、世宗自ら宗廟を給享するに際し捧主官を務める。五月七日方澤にて地の大祀礼を代行。六月二十五日立秋、宗廟の給享を代行(捧主官は朱希忠・張溶・崔元、衛鏞・陳璉*63・夏言・翟鑾)。七月二十五日九廟に仙器・款朝用が献じた仙銀の器むを用いて供物するよう命じられる朱希忠・崔元・夏言・翟鑾・嚴嵩と。七月九日太社太稷の祀礼を代行。九月六日玄極宝殿での上帝大享を前に睿宗献皇帝の配神を代行(捧主官は礼部尚書嚴嵩・礼部侍郎金寶仁)。

雍熙樂府 楚藩懿王朱顯隆
 より贈 正月之吉楚藩長
 春山人 雍熙樂府序」*64

賜る(太監高忠・大学士夏言・翟璽、礼部尚書嚴嵩らも)。

四百二十四を与えるよう請う。世宗従う。九月十二日山海関、居庸関の人員削減を請う。

彈劾①正月三十日戸科給事中朱憲章・山西道監察御史金燦より「陵工・世宗陵墓の施工かにあたる官軍の多くが役へ赴かず給料を得てゐる」とについて提督の大臣らに戒めるべき」と批判される。二人の奏上は虚偽中傷であると反論。世宗、郭勛らを厳しく咎めるも有恕、遂安伯陳鍾・都察院都御史王廷相と共に軍役を検問するよう命じる。郭勛のみ長らく勅を突き返して受領しなかつた。*65

彈劾②二月三日河道御史楊爵より「大愚大慳」、「政權を握つて好き勝手に振舞つてゐる」と弾劾される。同時に世宗の昏政も批判。世宗、楊爵に怒り獄落す。三月十四日公・侯・伯の襲爵について「父が死んで子息を願ひ出るのは不孝であり必ず先に殯葬するべき」と上疏(撫寧侯朱岳・南寧伯毛重器を名指で批判)。吏部尚書許讚、世宗とも従う。四月四日安南平乱に際する建議の功勞により銀幣を賜る(嚴嵩と)。四月五日太廟火災。*66

彈劾③四月六日巡視皇城科道官胡汝霖・蕭賢*67・李秉雲らより太廟火災の際に迅速に救助に赴かなかつたとして弾劾される(大学士翟璽・礼部尚書嚴嵩・京山侯崔元・工部尚書甘為林・刑部尚書錢如京・吏部侍郎張潮・戸部侍郎王立・都察院右副都御史胡守中らも)。世宗「黄昏時の予想外のできごと」として有恕、胡汝霖らの効奏は事実ではないとして鎮撫司に鞫問させる。郭勛、崔元・翟璽・嚴嵩らと共に上疏、当時内殿で折衝していたがすぐに駆けつけ神主を持ち出した。それから胡汝霖らが来た。世宗「ただ修省を促す」。四月十四日郭勛の奏上(嘉靖十九年四月に従ひ辺境の莊田が辺將の鎮守総兵官・副總兵官・遊擊官(分け与えられた)彈劾④四月十九日刑科給事中戚賢ら及び給事中劉大直・陳邦修・張彝年・王嘉元らより「凶惡凶暴」と弾劾される(兵部尚書張璠・礼部尚書嚴嵩と共に寵愛をかさにきて擅に陵工の督理に官軍を用いたり、賄賂を以て罪人を釈放したり、田園・貴顕の邸宅を入手したり、詐術を用いて都の水運・陸輸を手中に収めてゐる。*68)。

↓兵部が疏に添注「兵部尚書樊繼祖・戸部尚書李廷相・都察院右都御史王廷相・右副都御史胡守中・太常寺少卿李開先・翰林院侍読胡經・太僕寺少卿戴儒・国子監司業王同祖らも罷免すべき」。世宗は戚賢の疏を私欲私怨による妄言とみなし左遷。郭勛辭職を願ひ出る(中軍都督府掌府事五軍營提督東寧伯焦棟・宗人府掌府事京山侯崔元・錦衣衛掌衛事後軍都督府署都督僉事趙卿らと)。張璠・樊繼祖、王廷相・胡守中も致仕を請ひ、礼部尚書嚴嵩も上疏して弁明。世宗はただ修身を促す。五月三日太廟再建の声を上げる。五月十二日病氣療養していた所(世宗から見舞いを賜り(医者らの派遣、羊肉と酒)。一十九日宦官を遣わされ菓を賜る。*69)。

彈劾⑤六月・七月・*70六科給事中李鳳来より弾劾される(諸所に店房(宿屋)を開いて多くの無賴漢を匿つてゐる/地銭を取り立てたり擅に私税を課して男子や女子を低当にさせ、違反があれば官刑と称して捕らえて私牢に監禁してゐる)。また科道官からの「悪事を為し徒党を組んで国法を歪めてゐる」という弾劾(二月楊爵四月戚賢らの弾劾)に対し「臣姦何事、臣黨何人(私がどんな悪事を為したのか、私が誰と徒党を組んでいるのか)と疏弁したり、軍役の検問を命じた勅(正月參照)を長らく受領せず突き返して「何必更勞賜勅」どうして勅を勞する必要があるまいしょうか)と疏辯したりと不遜な言葉があつたため、七月世宗は「君主の意向を蔑ろにした」と郭勛に怒り、また郭勛と共に軍役を検問するよう命じた遂安伯陳鍾・都察院都御史王廷相が郭勛の勅受領拒否を奏上しなかつたことを責め、陳鍾の俸六ヶ月を奪ひ王廷相を罷免して民にする。*71。ついに

世宗が郭勛の刊刻したという「太和傳」に言及(上記)。

九月十日立冬、宗廟の飴享を代行。十一月十一日皇穹宇(への神位の安置について、郭勛が配位、嚴嵩が從位、礼部侍郎孫承恩・金寶仁らが奉安を命じられる。十一月十五日冬至、圜丘にて天の大祀礼を代行。十二月一日宗廟の大飴享を代行。十二月三十日立春、皇祖列聖廟に特享する礼を代行(捧主官は朱希忠・張溶・崔元・陳鍾・夏言・翟璽、許讚・嚴嵩)。正月元旦玄極寶殿にて拝天の礼を代行。二月一日啓蟄、玄極寶殿にて祈穀礼を代行。二月十一日駙馬都尉崔元が帝社帝稷の祭祀を代行するに際し陪祀(成国公朱希忠らと)。二月十五日朝日壇にて大明を祀る。二月二十二日歷代帝王の祀礼を代行。二月二十七日張氏を德妃に冊封するを以て内殿を祭告。四月三日立夏、宗廟の時享を代行(捧主官は朱希忠、英国公張溶・京山侯崔元・駙馬都尉鄭景和・大学士翟璽・吏部尚書許讚・礼部尚書嚴嵩・兵部尚書張璠)。四月十一日世宗自ら太社太稷を祭告するに際し群神を分告(定国公徐延德・張溶・崔元・翟璽、吏部尚書許讚・礼部尚書嚴嵩・兵部尚書張璠)。四月二十二日成祖(永樂帝)后の神主を南京から景神殿へ安置する前日の夜半に列聖に告す。七月六日立秋、景神殿にて列聖の時享を代行(捧主官は朱希忠・張溶・崔元・鄭景和、翟璽・嚴嵩・工部尚書甘為林、張璠)。八月五日太社太稷の祀礼を代行。八月六日朱希忠が帝社帝稷の祭祀を代行するに際し陪祀(張溶・崔元・陳鍾・鄭景和、翟璽・嚴嵩・張璠、甘為林、都察院都御史王廷相・礼部尚書兼翰林院學士溫仁和、吏部侍郎張潮・吏部左侍郎兼翰林院學士張邦奇・礼部侍郎孫承恩と)。八月九日万寿聖節、世宗生辰、景神殿を祭告する礼を代行。

世		嘉靖二十一年
<p>李鳳来の訴状について実情の捜査が命じられる。八月八日太后張氏(武宗母)崩御八月十九日? *72給事中張允賢が「命が下つて四十数日経つて都察院が捜査を進めない」と上言し、世宗も速やかな調査を促す。五城御史車邦祐が京城内の実情を報告。郭勛の店房が特に多く、英国公張溶・惠安伯張綱・皇親指揮錢惟垣・夏勲・款朝用(段朝用)も連座している。その仲間・親族である孫漢*73・孫准・李福・鄧欽らも錦衣衛に逮捕させるべき。世宗も郭勛の族叔郭憲(東廠衛理刑)は後軍都督府の監獄に無辜の者を監禁していること弾劾*74。郭勛が店房について上疏して弁明。店房は人に貸していただけで場所代はつておらず、管理は孫漢に任せていたため何も知らない。世宗は郭勛の疏弁を聞き入れる。</p> <p>彈劾⑦刑科給事中高時らが郭勛の悪事十数案を弾劾(不軌を謀った逆囚張延齡*75と交流があつてその荘田や家事を管理している、家人を采顔(東北部の国境周辺)に住まわせて塩や茶の商い・馬の交易を行っている等*76)↓世宗 錦衣衛に郭勛を逮捕させて鎮撫司に鞠問を命じる(但し大札の議での助力や「太和衛」刻書の功勞*77を以て刑具は免除するよう命じ)。</p> <p>彈劾⑧十三道御史董漢新らも郭勛の悪事を弾劾。鎮撫司が鞠問結果を奏上。法司が郭勛は死罪にあたるとの罪案を提出↓世宗、三法司・錦衣衛・科道官は言官の疏状と郭勛の自供をきちんと照合していないとして罪案を再審させる。</p> <p>彈劾⑨十三道御史周亮らが「鞠問官が取賄により鞠問を怠っている」として鎮撫司指揮孫綱・刑部尚書吳山・該司郎中錢得洪・本部主事馮煥・鎮撫司掌印指揮倪晏を弾劾*78、また郭勛の罪を強調(張延齡との交誼、太監蕭敬らの元田地を占領、先朝の勅牌を破壊、陵墓から土を採取して寮を開いた)。</p> <p>彈劾⑩給事中劉大直が郭勛の罪十二事を弾劾(将校に胥吏を用いた、武臣を籠に乗せた等*79)。世宗、「法司は事件の由来や罪状を明らかにしようとしておらず、錦衣衛は郭勛への刑具赦免の命に背いたと責める。法司が再び罪案を提出。郭勛の罪状は全て事実で死罪に当たる。世宗、郭勛の共犯者孫漢・孫准・孫聰・李福・陳祿・郭勛・郭守仁は辺境で從軍とし、郭勛についてはさらなる詳議を命じる。法司が再び審議して郭勛の罪案を提出。郭勛の罪は斬首にあたり、妻は功臣の家奴とし、財産を没収し、収賄した金銭を追徴し、爵・鉄券・誥命を奪ひ、占領した家屋や荘寺を持ち主に返させる。世宗、疏を中に留める。</p> <p>彈劾⑪十一月二十一日南京戸科給事中王燁が郭勛とその徒党張瓚・嚴嵩・胡守中を弾劾*80。</p> <p>六月二日世宗が礼部に手勅、郭勛の獄の裏には大学士夏言の謀りがあったとみなす*81。七月一日夏言に閑住を命じる(夏言は臣でありながら君を欺き、権力を用いてみだりに刑罰を施して利を食った。その罪は郭勛より重い)↓嚴嵩入閣。</p> <p>十月九日郭勛獄にて死す。十月十一日法司が重罪犯(郭勛か)の罪案を提出し裁決を請う。世宗が三法司と科道官の罪案提出の遅さを責め、大学士嚴嵩が鞠問の關係者を弾劾(刑部尚書吳山*82・侍郎葉相・屠儒は法を蔑ろにし、都察院右都御史毛伯温・左副都御史周煦・右僉都御史劉初・大理時卿・戴金・左少卿楊行中・寺丞董珊は事を長引かせ、刑科給事中劉三畏・劉養直・廖天明は迅速な鞠問を怠つた)↓世宗、各人を処罰(劉三畏らについては「郭勛を鞠問して彼は不軌を謀った」と称しながら、罪案にはそれを記載せず獄で死なせたと言及*83)、郭勛の罪案をもう一度三法司に審議させる。刑部左侍郎葉相ら審議は「郭勛は代々国恩を受けておきながら悪事を働きたが触れたが、病死したからには懲罰は十分に示された。原案では妻を奴婢とし財産を没収するとしていたが憐れんで寛恕すべきである。官錢の使い込みを返納させ、法外な値段での売買により得た物品・金を民に返させ、不正に入手した房屋・土地を持ち主に返させる件については原案通り行い、爵・鉄券・誥命を奪う。吏部・兵部に審議を命じる(ちなみに族叔郭憲は辺境にて充軍)。」↓十一月二十一日夜王寅の宮変(宮婢が世宗の弑逆を謀る)*84。十月二十三日世宗が聖旨を下し郭勛の罪案を告示する葉相らの提出した罪案に従う。</p>		

おわりに

本稿掲載の資料を基に、続稿では郭助に至るまでの郭氏一族と文学との関わりを詳しく論ずる。

〔付記〕郭氏と郭助の経歴は拙著『三國志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）序章「（三）武定侯郭助の経歴と刊行状況―修得子は郭助か―」でも触れた所であるが、一部訂正を要する箇所がある。拙著三三頁「〔図〕郭氏家系図（略）」中、郭銘・郭鏞を何氏の子とするが厳氏の子の誤りである。また郭良の武定侯襲爵の時期を「成化四年」とするが「弘治十五年」の誤りである。

（注）

【郭興注】年表は劉三吾撰【郭興神道碑】（『毓慶勲懿集』所収版）を基礎史料として作成した。

*1 『毓慶勲懿集』所収版【郭興神道碑】には生年月日の記載がある。

*2 【郭興神道碑】には歳次不載。『明實錄』では「太祖」卷一百一十二（洪武十二年（一三七九）春正月）丙寅の項に記載がある。

*3 『毓慶勲懿集』所収版【郭興神道碑】には没年月日の記載がある。

【郭英注】年表は楊榮撰【郭英神道碑】を基礎史料として作成した。

*1 生年は【郭英神道碑】記載の没年（永樂元年、一四〇三）と享年（六十九歳）から逆算した。

*2 朱元璋の側近として宿直したことは『明史』卷一百三十「列傳第十八、郭英」、「親信、令值宿帳中」（朱元璋は郭英を）側近として、帳中に宿直させた）に拠る。

*3 【郭英神道碑】には歳次不載。兄郭興の【郭興神道碑】に記載された事蹟・歳次と照合して時期を推定した。

*4 右に同じ。

*5 右に同じ。

*6 右に同じ。

*7 右に同じ。

*8 右に同じ。

*9 『明實錄』「太祖」卷六十九（洪武四年（一三七二）十一月）壬申の項に拠る。この件の詳細は『明實錄』と【郭英神道碑】の記述に齟齬がある。『明實錄』では朱元璋が郭英らに「朕命軍士往臨濠造宮殿。汝等又役之爲私室。豈保身與家之道哉」（朕は兵士を臨濠〔現鳳陽県臨淮鎮〕へやり宮殿を造営させた。そなたらは彼らを私邸にて従事させた。家と身を保つ道を行っていると云えようか）、「昔朕皇考嘗言、『凡人守分植財、如置田地、稼穡收穫、歲有常利、用之無窮。若悖理得財、如貪官汚吏獲利雖博、有喪身亡命之憂。』今汝俸祿有如田力、歲享其利、無有已時。比於貪饕所得、用之有盡、猶潢汙之水、朝盈而夕竭矣。汝等有勲於國、朕既酬以爵祿、能守而不失、則子孫永有所賴。汝其識之」（朕の皇考「父」がかつて言った、「人はみな本分を守って財を養い守るものである。もし田地を設ければ、農作物の收穫により年ごとに

常に利益があり、いつまでも続けることができる。もし道理にそむき財を得れば、貪官汚吏〔錢財を貪る官吏〕のように広く利を得ることができたとしても、身を滅ぼす恐れがある」と。今そなたらの俸禄は田地による利益に匹敵し、毎年その利益を享くことができ、やむことがない。収益を貪り求め使い込むようなことをすれば、いつかは終わりがあり、水たまりの水のように、朝には満ちていても夜には枯れて尽きてしまうものだ。そなたらは国事に勲功があり、朕は爵禄で以て酬いているのだから、〔それを〕守って失わなければ、子孫まで末永く頼る所となる。そなたらはこの事を知っておけ」と話して諭し、「英等頓首謝曰、『陛下訓飭臣等切至銘刻、不敢忘也』」（郭英らは頓首して詫びて申した、「陛下の教訓を私らは肝に銘じ、決して忘れませぬ」と反省したとある。一方、【郭英神道碑】には「時公卿多置田産、公獨不治。上問之、對曰、『臣一布衣、荷陛下寵靈、叨有封爵、子孫衣食餘饒、安敢增益俾生侈心。』上善之、嗟歎良久」（時に公家の多くが不動産として田地を設けていたが、郭英公だけは持っていないかった。お上がこれについて問うと、「郭英は」答えた、「私は平民でありながら、陛下の恩沢を蒙り、分不相応にも爵に封ぜられ、子孫には有り余るほどの衣食がございます。どうして利益を増やして奢侈の心を生ませることができましようか。お上はこれを称賛し、長らく感嘆した」とある（『毓慶勲懿集』所収版に依拠）。

*10 【郭英神道碑】は洪武十三年のこととするが、『明實錄』では「太祖」卷一百二十七（洪武十二年十一月）己亥の項に記載がある。

*11 【郭英神道碑】には歳次不載。『明實錄』「太祖」卷一百六十一（洪武十七年（一三八四）夏四月）壬午の項に記載がある。

*12 『明實錄』「太祖」卷一百八十四（洪武二十年（一三八七）八月）壬子の項に拠る。

*13 『明實錄』「太祖」卷二百一（洪武二十三年（一三九〇）夏四月）庚子の項に拠る。

*14 『明實錄』「太祖」卷二百一（洪武二十三年（一三九〇）夏四月）戊子の項に拠る。

*15 『明實錄』「太祖」卷二百七（洪武二十四年（一三九一）春正月）、「○戊申、勅潁國公傅友德佩征虜將軍印充總兵官、定遠侯王弼充左副將軍、武定侯郭英充右副將軍、於邵・徐・滕・兗・濟南・平山・德州・樂安及北平都司屬衛、遴選精銳軍士訓練、以備邊。」【郭英神道碑】「辛未（洪武二十四年）、以虜酋阿扎失里寇邊、命公討之、獲其人口、孳畜逐北、至鴉寒山而還」（『毓慶勲懿集』所収版に拠る／四庫全書本は「虜酋阿扎失里」を「北兵喇特納實理」とする）。

*16 『明實錄』「太祖」卷二百二十三（洪武二十五年（一三九二）十二月）乙丑の項に拠る。

*17 『明實錄』「太祖」卷二百三十五（洪武二十七年（一三九四）冬十月）己卯の項に拠る。

*18 『明實錄』「太祖」卷二百三十八（洪武二十八（一三九五）夏四月）辛未・甲申の項に拠る。

*19 『明實錄』「太祖」卷二百四十九（洪武三十年（一三九七）春正

月) 丙辰・乙丑の項に拠る。

- *20 北辺の胡虜掃伐、遼東都司・遼府護衛の件は『明實錄』「太祖」卷二百五十七(洪武三十一年(一三九八)夏四月)乙酉・戊午・乙亥の項に拠る。

- *21 『明實錄』「太宗」卷六(二年(一四〇〇)正月)四月丙申・癸丑・乙卯・己未・庚申の項に拠る。

- *22 郭英の享年について、『郭英神道碑』は「永樂元年癸未二月十七日卒于家、享年六十有九」とし(『毓慶勲懿集』所収版に拠る)、『明史』卷一百三十「列傳第十八、郭英」は「永樂元年卒、年六十七」とする。

- *23 追贈・追封の時期は『明實錄』「太宗」卷二十下(永樂元年五月)乙未の項に拠る。

【郭寧妃・魯荒王檀注】年表は『明史』卷一百十三「列傳第二、后妃一、太祖郭寧妃」・卷一百十六「列傳第四、諸王一、魯荒王檀」を基礎史料として作成した。

【郭鎮注】年表は方孝孺撰『郭鎮墓誌』を基礎史料として作成した。

- *1 郭鎮の生年は『郭鎮墓誌』記載の没年(建文元年、一三九九)と享年(二十八歳)から逆算した。

- *2 日付は『永嘉公主墓誌』に依拠。

【郭玪注】年表は『明實錄』を基礎史料として作成した。

- *1 【郭玪墓誌】に拠る。

- *2 郭玪の父郭銘の官職は【郭英神道碑】と【郭玪墓誌】に「遼府典寶」とある。従姉妹の一人が洪武二十七年(一三九四)に遼王植の妃となったことから遼王府に官を得たか。ちなみに郭銘が没した経緯については【郭銘夫人徐氏墓誌】に「歲壬午、追封武定侯效忠國事、歿於泗州、遺命夫人爲育諸孤」(壬午の年(建文四年、一四〇二)、追封武定侯(「郭銘」は国事に忠心を尽くし、泗州に没し、夫人に息子らをよく育てるようにと遺命した)とある。建文年間靖難の変(燕王(後の永樂帝)が建文帝に対して挙兵した)の際に事変に巻き込まれて命を落としたか。

- *3 郭玪の姉が仁宗(当時は皇太子)に配偶した時期は不明確であるが、長子滕王瞻埲を永樂七年(一四〇九)に生んでいることから、配偶の時期はそれ以前のことである(瞻埲の生年は『明實錄』「宣宗」卷五(洪熙元年閏七月)庚戌の項(瞻埲逝去)に享年十七歳とあることから逆算)。

- *4 【郭玪墓誌】に拠る。

- *5 【郭銘夫人徐氏墓誌】に拠る。

- *6 郭登撰・郭良補『郭氏家傳』(郭登注11参照)「尚寶司丞斌公傳」(郭武伝)に拠る。

- *7 郭貴妃が殉葬されたことは以下の明・沈德符撰『萬曆野獲編』(中華書局排印本(元明史料筆記叢刊)、一九五九年)補遺卷一「宮闈、仁廟殉葬諸妃」の記載に拠る。『會典』云、獻陵七妃、三葬金山、餘俱從葬。按仁宗上仙、宣宗諡皇庶母貴妃郭氏・淑妃王氏・

麗妃王氏・順妃譚氏・元妃黃氏五人、又益以先贈張氏順妃・李氏麗妃俱係潛邸、追共七人是矣。然前是登極所封貴妃郭氏・賢妃李氏・惠妃趙氏・淑妃王氏・昭容王氏、僅郭貴妃・王淑妃在所殉中、何也。況貴妃所出、有滕懷王・梁莊王・衛恭王三朱邸、在例不當殉。豈銜上恩、自裁以從天上耶。又上未崩前之兩月、曾封張氏爲敬妃、爲榮國忠顯王之孫、今太師英國公輔之女、冊文中贊美甚備、亦不從殉、蓋以乃祖父勳舊特恩也。…（後略）」（『明會典』に「仁宗獻陵には七人の妃が葬られている。三人の妃は金山に埋葬され、他はみな殉葬された」という。按ずるに、仁宗の上仙〔崩御〕後に宣宗が諡を贈った皇庶母〔父仁宗の側室〕貴妃郭氏淑妃王氏・麗妃王氏・順妃譚氏・元妃黃氏の五人に、先んじて亡くなり順妃に追封された張氏と麗妃に追封された李氏〔両者とも仁宗の即位前の妃〕を加えたのが、「殉葬された」七人である。しかしながら〔仁宗の〕即位にあたり冊封された貴妃郭氏・賢妃李氏・惠妃趙氏・淑妃王氏・昭容王氏のうち、郭貴妃・王淑妃だけが殉葬されたのは何故だったのか。まして郭貴妃には滕懷王・梁莊王・衛恭王という三王府の子があったのだから、通例では殉葬せざるべきところである。どうしてお上の寵愛を受けながら、自ら好んで死を選ぶなどということがあろうか。お上が崩御する二ヶ月前に敬妃に冊封された張氏〔栄国忠顯王の孫で今の太師英國公張輔の娘〕などは冊文で甚だしく賛美されており、殉葬されることがなかった。〔それは〕おそらく祖父が勲功のある旧臣であることからの特恩だったのだろう。…（後略）。

* 8 【郭玪墓誌】に拠る。

* 9 【郭英夫人嚴氏墓誌】に拠る。

* 10 【郭銘夫人徐氏墓誌】に拠る。

* 11 【郭玪墓誌】に依る。

* 12 永嘉公主が正統十二年郭玪の死後に武定侯の爵位を争った際には、英國公張輔らが郭玪の子郭聰に味方して「聰・玪皆前武定侯英曾孫、聰祖銘嫡次、玪祖振〔鎮〕庶長。聰於例當襲爵」（郭聰と郭玪はみな故武定侯郭英の曾孫ですが、郭聰の祖父郭銘は嫡次男で〔実際には郭銘の母嚴氏は妾であるから嫡子とはいえない〕、郭玪の父郭鎮は庶長子です。通例では郭聰が襲爵すべきです」と主張した。しかしお上は聞き入れず、郭聰を指揮僉事錦衣衛帶俸に任じるにとどめた（『明實錄』『英宗』卷一百六十一〔正統十二年十二月〕庚辰の項）。

【郭武・附弟郭理・永嘉公主（2）注 年表は郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「尚寶司丞斌公傳」（郭武伝）を基礎史料として作成した。

* 1 郭武の妹の生年は『毓慶勲懿集』卷四「詩」244～254郭登撰「孝節碑後」（郭登注14参照）に「先君子追封定襄伯府君（＝郭鉅）、不幸早世。卒之日、長兄武、五歳、姉三歳、仲兄理二歳、登始生三月」とあることから、郭武の生年（洪武三十一年〔一三九八〕の二年後、建文二年〔一四〇〇〕と推算した。

* 2 【郭理墓誌銘】は郭理の生年を「洪武辛巳」とするが、洪武年

間に辛巳の年は存在せず建文辛巳（三年、一四〇一）を指す。

- *3 郭鉦の生没年月日は『毓慶勲懿集』巻七「碑文」14B～20A 王直撰「郭氏孝節傳」（郭登注14参照）に「生於洪武己未（十二年、一三七九）十月七日、而以永樂癸未（元年、一四〇三）十二月初六日卒、年三十五」とある。ちなみに郭登は注1で引用した「孝節碑後」で郭鉦の死の際郭武は五歳だったとしているが、郭鉦が永樂元年に卒したならば洪武戊寅（三十一年、一三九八）に生まれた郭武は当時数え年で六歳、満年齢で五歳である。郭登は『郭氏家傳』尚寶司丞斌公傳では「公諱斌：（中略）：四歳居父喪」と述べている。

*4 【永嘉公主墓誌】に拠る。

*5 【永嘉公主墓誌】に拠る。

*6 【郭理墓誌】に拠る。

*7 【郭英夫人嚴氏墓誌】に拠る。

*8 『明實錄』「英宗」巻十五（正統元年（一四三六）三月）癸酉の項に拠る。

*9 【郭玟夫人高氏墓誌】に拠る。

*10 母高氏を宛平県玉河の傍に仮葬したことは『郭玟夫人高氏墓誌』に記載がある。

*11 郭理が郭登と共に北京で廬墓したことは郭登撰・郭良補「郭氏家傳」（郭登注11参照）「舍人理公傳」（郭理伝）に記載がある。「正統丙辰、太夫人卒。公哀號不食者數日。既葬、廬於墓下、與予同苦、哀至哭不輟聲。予以官守踰月先歸、公竟終喪然後返。蔬食水飲、形容毀瘁、至家大群吠之。兄武定侯玟爲之設食、親挾肉啖公、

嗚咽不能下咽」（正統元年（一四三六）、母高太夫人が卒した。郭理公は悲しみ泣き叫び、数日間ものを口に入れなかった。埋葬してから、廬墓して私と共に喪に服したが、悲しみのあまり慟哭し声がやむことはなかった。私は官職のため一月ほどして先に帰ったが、公は最後まで喪に服してから帰った。口にしていたのは野菜と水ばかりだったため、容貌は憔悴し、家に至ると犬の群れが彼に吠えかかった。従兄の武定侯郭玟が彼のために食事を用意し、自ら肉をつまんで郭理公に食べさせようとしたが、嗚咽して飲み込むことができなかった）。

*12 『明實錄』「英宗」巻一百六十一（正統十二年（一四四七）十二月）庚辰の項に拠る。

*13 【永嘉公主墓誌】に拠る。

【郭登注】 年表は『明實錄』を基礎史料として作成した。

*1 郭登の生年月は【郭登神道碑】に「生於洪武癸未十月」とある。洪武年間に癸未の年は存在せず永樂癸未（元年、一四〇三）を指す。生まれて三ヶ月後に父郭鉦が逝去したことは『毓慶勲懿集』巻四「詩」24A～25A 郭登撰「孝節碑後^{有序}」に記載がある（郭武・附弟郭理・永嘉公主〔2〕注1参照）。

*2 【郭登神道碑】「永樂甲辰仁廟登極、召公至京賜冠帶・襲衣・金帛、授勳衛」。『明史』巻一百七十三「列傳第六十一、郭登」には「洪熙時、授勳衛」とある。

*3 【郭登神道碑】に拠る。

*4 【郭玟夫人高夫人墓誌】に拠る。

*5 郭武・附弟郭理・永嘉公主（2）注10に同じ。

*6 郭登撰・郭良補『郭氏家傳』（郭登注11参照）「尚寶司丞斌公傳」（郭武伝）に拠る。

*7 郭登の雲南麓川遠征の時期について、『明史』卷一百七十三「列傳第六十一、郭登」には「正統中、從王驥征麓川有功」とあるのみだが、『郭登神道碑』には「正統」七年（一四四二）麓川用師、靖遠伯王驥復薦公。公慨然曰、「太夫人已即世、吾可出矣。」師至雲南、歲且盡期、以明年進兵」とあり、清・錢謙益撰『列朝詩集』（上海三聯書店（清順治九年毛氏汲古閣刻本重印影印本）、一九八九年）「郭定襄登」の小伝にも「正統七年（一四四二）從王驥征木麓川」とある。また雲南省建水県の指林寺に現存する郭登撰の碑「重修指林禪寺碑記」（錦衣衛勲衛鳳陽郭登撰文」と題署）には「正統癸亥（八年、一四四三）時、麓川餘燼未滅、今總督軍務兵部尚書靖遠伯王公奉命往平之。予等數人實備將佐以從公命」とある（個人ブログで碑影が紹介されている http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vduv.html / 二〇一六年九月三十日現在）。以上から郭登は正統七年（八年）にわたり雲南麓川に遠征していたことがわかる。

*8 郭登の雲南騰衝遠征の時期について、『明史』卷一百七十三「列傳第六十一、郭登」には「正統中…（中略）…又從沐斌征騰衝、遷署都指揮僉事」とあるのみだが、『郭登神道碑』には「正統」十年冬、復同黔國公沐斌參贊楊寧、領兵進駐騰衝。…（中略）…

十二年凱還、仍鎮宿衛」とある。但し清・錢謙益撰『列朝詩集』（注7参照）「郭定襄登」の小伝には「（正統）九年從沐斌征騰衝、功皆最」とある。

*9 注8に引用した『郭登神道碑』の記載参照。

*10 右都督に進んだ時期と経緯は、『郭登神道碑』に「正統十四年十一月、進右都督」とあり、『明史』卷一百七十三「列傳第六十一、郭登」に「正統十四年」十月、也先犯京師、登將率所部入援、先馳蠟書奏。奏至、敵已退。景帝優詔褒答、進右都督」（正統十四年）十月、也先が都に迫った際、郭登は配下の兵を率いて（京軍の）援護へ向かわんとし、まず蠟で包んだ奏上を送った。奏上が着いた頃には、敵はすでに退却していた。景帝（後の代宗景泰帝）は優詔を出して讃え、「郭登を」右都督に進めた」とある。

*11 郭登は先祖親類の伝記集『郭氏家傳』（郭氏族譜圖）を編纂した。『毓慶勲懿集』卷四「引」文1B～文3B郭登撰「郭氏族譜圖引」（内容から一族伝記集の序と推察される）の末尾に「景泰三年歲次壬申（一四五二）孟夏（四月）望日、征西前將軍節制大同等處諸軍事、奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、諸孫登謹書」とあることから、これを編纂時期と推定した。また『毓慶勲懿集』卷四「序」文3B～文7A王直撰「郭氏家譜序」（景泰三年壬申秋七月初吉）及び許彬撰「郭氏族譜後序」（景泰五年秋八月之望）の存在から、景泰五年（一四五四）に前後序が揃い、刊刻、或いは抄本として供覧したのではないかとみられる。郭登による刊本（或いは抄本）は現佚とみられるが、弘治十七年

(一五〇四)に一族の後裔郭良により増補されて再び刊刻された(或いは抄本として供覧された)らしく(郭良注11参照)、それが清・郭世勛編纂『臨淮郭氏族譜』(乾隆壬申〔十七年、一七五二〕に採録され、数度の続修を経た民国版『臨淮郭氏族譜』(全十二冊、三公堂藏版)に伝わる。筆者が把握している現存の『臨淮郭氏族譜』は個人所蔵物であり、所有者がインターネット上で一部の説明と書影を公開している(http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102v8ei.html〔「現存臨淮郭氏族譜的來源與評價」〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vver.html〔「臨淮郭氏宗譜記錄定襄伯郭登姐爲宣德皇帝的國嬪」〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vgom.html〔「始祖郭三公伝」〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vidt.html〔「一世祖郭聚伝」〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vidv.html〔「三世祖郭山甫伝」〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vidw.html〔郭長君伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102viy8.html〔郭興伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vi4m.html〔郭徳成伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vilc.html〔郭敬伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vilu.html〔郭武伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vilw.html〔郭理伝〕／http://blog.sina.com.cn/s/blog_b15d44a40102vixb.html〔郭良「郭氏家傳序」〕／全二〇一六年九月三十日現在)。本書の成書史は続稿むづらに詳しく論じる。

*12 『郭氏家傳』(『郭氏族譜圖』)の刊刻時期については注11参照。

*13 郭登が母と兄を北京から南京へ改葬した時期は景泰七年(一四五六)と景泰六年(一四五五)の二説がある(どちらも郭登自身による記述)。詳しくは注14に述べる。

*14 『毓慶勲懿集』巻七「碑文」14B～20A吏部尚書王直撰「郭氏孝節傳」は郭登の父郭鉦、母高氏の孝節の徳を讃える碑記である。末尾に「大明景泰七年歲次丙子(一四五六)二月吉日、奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、前征西前將軍節制大同等處諸軍事、孤哀子登立石」とあることから郭登が母を北京から南京へ改葬した際に建てた碑とみられる。また『毓慶勲懿集』巻四「詩」9B～24Aには当時郭登の元に寄せられた「孝節詩」と題する一連の詩が収められている。冒頭には都察院左僉都御史徐有貞による序が置かれ、「孝節、爲征西前將軍定襄伯郭公、賦以美厥考南山府君・妣高夫人之潛徳也」(「孝節」というのは、征西前將軍定襄伯郭公(＝郭登)のために、詩を賦してその故父南山府君(＝郭鉦)と故母高夫人の秘めやかなる美徳を讃えるのである)といひ、続いて大理寺卿薛瑄・太常寺卿許彬・左春坊大学士兼翰林侍讀彭時・南京国子祭酒呉節・翰林侍講学士兼左春坊左中允倪謙(從姉妹の配偶者、郭氏家譜参照)といった一流士大夫の詩が連なる。『毓慶勲懿集』巻四「詩」24A～25A郭登撰の後序「孝節碑後」(「奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯、前征西前將軍節制大同等處諸軍事、孤哀子登泣血謹書孝節碑後」^{有序})と題す／「景泰七年歲次丙子(一四五六)春二月吉日」と末記)には、正統丙辰(元

年、一四三六）に逝去して北京に仮葬した母を「今年春始克歸、

成した。

墓於先君之域。：（中略）：太師大冢宰泰和王公爲製『孝節傳』

*1 【郭嵩夫人孫氏墓誌】に拠る。

一通、一時諸名公鉅卿咸相與歌詩以美之」（今年「景泰七年、一四五六」の春に休暇を願って故郷「南京」へ帰った際に、祖先の城「南京聚宝山の墓」に埋葬した。：「中略」：太師大冢宰泰和の王公「王直」が「私の」ために「孝節傳」一章を作してくれ、今を時めく多くの名侯や鉅卿がみな一緒に歌詩を賦してこれを褒め称えてくれた」という旨が述べられている。

*2 【郭氏聯珠集】については『明史』卷九十九「志第七十五、藝文四」に「郭登『聯珠集』二十二卷。景泰初、登封定襄伯、有詩名。是集以其父珪（鉅の誤）、兄武之作與登詩合編」（郭登『聯珠集』二十二卷。景泰元年「一四五〇」に郭登は定襄伯に封ぜられたが、作詩の面でも名声を得ていた。この集はその父郭鉅、兄郭武の作品と郭登の詩を合わせて纂集したものである」という。編纂・刊行経緯については【郭嵩墓誌】に「嘗念尚寶公・忠武公所遺詩文甚富、因蒐輯成編爲『聯珠集』若干卷、壽梓以傳」（郭嵩は）かつて尚宝公「郭武」と忠武公「郭登」の遺した詩文がたいへん豊富であることを思い、「その詩を」蒐集、編纂して『聯珠集』数巻を成し、上梓して世に伝えた」とある（『毓慶勲懿集』所収版に拠る）。寧波の天一閣文物保管所に『郭氏聯珠集』二十二巻が現存し（筆者未見）、『中國古籍善本書目』『集部、總集類』一八四一頁（中華書店）によると「明郭登輯、明成化八年（一四七二）刻本」とあるという。成化八年の郭登の死を受けて子の郭嵩が一門の文才と孝の精神を喧伝して定襄伯の爵位継承を有利にしようという意図を以て刊刻したか（郭嵩は郭登の養子であり、嫡系にしか爵位の世襲を認めない明法の下では通常は爵位を継承できない立場にあった「郭參注4も参照されたい」）。ちなみに明・高儒撰『百川書志』卷十六「集、國朝」には「聯珠集」十巻。榮祿大夫定襄伯郭登元登述」と著録されており、前述の諸記録と

但し母を改葬した時期は郭登撰・郭良補『郭氏家傳』『尚寶司

丞斌公傳」（郭武伝）では「景泰乙亥、予得請太夫人及公之喪、

遷祔南京聚宝山祖塋之側」（景泰六年「一四五五」、私は太夫人「母」と郭武公の喪を願って許され、「二人を」南京聚宝山の祖先

の墓の側に改葬した」としており若干の齟齬がある。

*15 会昌伯孫繼宗は郭登の養子郭嵩の夫人孫氏の叔父であり、宣宗の皇后孫氏の兄でもある。

*16 『毓慶勲懿集』卷七「碑文」20A～24A 郭登撰「郭氏重脩先塋記」（大明天順元年「一四五七」）十月上潯、奉天翊衛宣力武臣特進榮祿大夫柱國定襄伯。諸孫登記并家額書丹」と末記）。

進榮祿大夫柱國定襄伯。諸孫登記并家額書丹」と末記）。

*17 『毓慶勲懿集』卷七「碑文」24B～32A 郭登撰「郭氏先塋碑」（大明天順五年歲次己丑「一四六九」冬十月上吉立」と末記）。

*18 【郭理墓誌】に拠る。

郭嵩・附夫人孫氏注 年表は倪謙撰【郭嵩墓誌】を基礎史料として作

は巻数に違いが見られる（『叢書集成續編』三（新文豊出版公司、一九九一年）所収の葉德輝觀古堂刊本に依拠）。

*3 【郭嵩夫人孫氏墓誌】に拠る。

郭参・附夫人李氏注 年表は馮允中撰【郭参夫人李氏墓誌】を基礎史料として作成した。

料として作成した。

*1 郭参の生没年は『明實錄』や【郭参夫人李氏墓誌】に記載が見当たらない。

*2 【郭参夫人李氏墓誌】に「郭嵩」子参俊秀且賢。以故太保公遂即許之。未幾其姑孫氏夫人病逝」（郭嵩の）子郭参は才知に優れ徳もあつた。故に太保公（豊城侯李勇）はすぐ「娘を」彼と婚約させた。ほどなくその姑の孫氏が病で逝去した」とあることから、郭嵩と李氏の婚約が母孫氏（成化十三年（一四七七）三月九日）の少し前であつたことがわかる。

*3 【郭参夫人李氏墓誌】に「参因父母早棄、襲錦衣衛指揮使、而獨立持家、不能南往以行親迎禮。太保公聞之、即遣淑人以歸」（郭参は早くに父母を亡くし、錦衣衛指揮使を世襲して（都で）獨立して生計を立てたため、南京へ赴くことができず、親族の者を遣つて妻を迎える礼を行った。太保公（李勇）はこれを聞くとすぐ娘を遣つて嫁入りさせた）とあることから、婚姻の時期は成化十四年父郭嵩の逝去以降と推定される。

*4 郭参は郭登の嫡孫ではなかつたため（父郭嵩は養子）定襄伯の世襲を許されなかつた。『明實錄』「孝宗」卷一百二十（弘治九年

（一四九六）十二月）丙戌の項に以下のようないきさつが記載されている。「故定襄伯郭嵩之子、指揮使参、奏請襲爵。吏部言、『参叔祖登、以功封伯。登卒無嗣、参父嵩以兄子承繼、得襲伯爵、乃一時特恩。今嵩已卒、参例難再襲。且諸司職掌公侯伯、並無弟姪承襲之文。而兵部見行事例、凡軍職絕嗣、其同宗之人果係原立功授職者、嫡派子孫、方許保送承襲。若係旁枝、不許。』（中略）：参蒙恩已世襲錦衣衛指揮使、豈可復違制妄求。』上曰、『既例不應襲、其已之。』（故人定襄伯郭嵩の子、指揮使郭参が奏上して襲爵を請うた。吏部が言うには、「郭参の祖父（郭武）の弟郭登は功を立てて伯に封ぜられた。郭登の死に際して跡継ぎがおらず、郭参の父郭嵩が兄の子でありながら養子となつて後を継ぎ伯爵を世襲するに至つたが、これはその時だけの特恩（皇帝から賜る特殊な恩典）であつた。いま郭嵩の死に際して、常例では郭参が再び襲爵することは難しい。かつ『諸司職掌』（朱元璋敕修の官職に関する大綱）の公侯伯の項には弟や姪が後を継いで襲爵するという文は無い。そして兵部の現行の事例では、凡そ軍職の跡継ぎが絶えた際には、その一族の人間がもし元々功を立てて職を授かつた者の嫡流の子孫に繋がっていれば、国が保証して世襲を推薦することが許される。傍系であれば許されない。』（中略）：郭参は恩恵を受けてすでに錦衣衛指揮使を世襲しているのに、どうしてまた制度に違反して妄りに求めるべきだろうか。」お上は言つた、「常例で襲爵が妥当でないとされるからにはこれを停止する。」）

*5 郭参の没年は不明であるが、【郭参夫人李氏墓誌】に郭参の死について言及が無いことから、李氏逝去（正徳二年（一五〇七）以降のこととみられる。

郭良注 年表は『明實録』を基礎史料として作成した。

*1 【郭良墓誌】に拠る。

*2 父郭昌の武定侯襲爵の経緯は『明實録』『英宗』卷三百一（天順三年夏四月）辛巳・卷三百三（天順三年五月）丁未の項に拠る。

*3 【郭昌墓誌】に拠る。

*4 『毓慶勲懿集』卷四「跋」文23B～文23B 李寅撰「跋郭氏家書」（成化十四年戊戌（一四七八）夏五月望日、雲間李寅跋」と末記）、文23B～文23B 顧本撰「跋郭氏家書」（成化十五年龍集己亥（一四七九）夏六月上浣、直文華殿承徳郎太常寺丞、東吳顧本題于金臺官舎」と末記）により、この頃郭良が『郭氏家書』なる書を周圀に供覧していたことがわかる。但し『郭氏家書』は郭良撰『郭氏家傳』と同一なのか、或いは郭助刊『毓慶勲懿集』の前身のようなものだったのか判然としない。

*5 『毓慶勲懿集』卷四「序」文10A～文11B 湯珍撰「贈郭母許夫人壽序」（成化二十二年歲次丙午（一四八六）正月既望、賜進士第承德郎吏部文選司主事、秀水湯珍宗儒序」と末記）に「成化丙午月正五日、先武定侯夫人、今錦衣指揮使郭君存忠母許氏、其初度之辰也、今年壽六十」とある。このとき王鏞・張泰・王純・王芹・胡晟・沈周が郭良に贈った「賀許太夫人壽」詩が『毓慶勲懿

集』卷四「詩」33A～33Aに収録されている。

*6 郭良が錦衣衛指揮僉事に復職を得た経緯について、『明實録』『孝宗』卷四十六（弘治三年（一四九〇）十二月）癸酉の項に母が貧しさから恩沢を乞うたためとある。

*7 郭良が錦衣衛の事を任されるに至った経緯について、『毓慶勲懿集』卷四「序」文12A～文14A 顧達撰「別郭存忠先生序」（弘治五年歲在壬子（一四九二）夏六月望後一日、賜進士出身奉直大夫兵部車駕司員外郎、山陽顧達序」と末記）に「弘治庚戌、當試武舉、先生致首選、今將就大試、又豈復有居先生之上者哉」（弘治庚戌（三年、一四九〇）、武舉に参加するにあたり先生は第一名に選ばれました。いま大試（武殿試のことか）に赴かんとされておりますが、どうして先生の上をいく者がありましようか）とあり、『明實録』『武宗』卷二十七（正徳二年（一五〇七）六月）戊子（郭良逝去の項）にも「其爲指揮、嘗當武舉、推理衛事」（彼は指揮の官にありながら、かつて武舉に登第し、推挙されて衛事にあたった）とあることから、弘治三年（一四九〇）に武舉に登第したことにより推挙されたことがわかる。この時の様子は【郭良墓誌】には以下のように陳述されている（『毓慶勲懿集』所収版に拠る）。「公之爲僉事也、嘗試武舉有名、然未甚顯。會錦衣闕員、兵部以公數人名上、孝宗御文華殿、親閱之、見公儀觀秀整、進對明暢、命莅衛事。每侍衛扈從、必目屬焉」（郭良公は僉事だった時、武舉に参加して名を馳せたが、著しく世に知られていたわけではなかった。錦衣衛に欠員があつて兵部が郭良公ら数名の

名を上疏したところ、孝宗が文華殿に御して自らこれを閲し、郭良公の威儀が麗しく整い、受け答えが明快で流暢であるのを見て、衛事を統べるよう命じた。侍衛し扈從する時はいつも必ず目配せをした。またその職務について、【郭良墓碑】には「嘗參預廷鞠、總都城溝涂事、兼督工修治、充殿試執事官」（朝廷での鞠間に参与し、都の水溝・道路の事務を統べて修繕工事の監督を兼ね、殿試で執事官を担った）とある。

*8 【郭良墓誌】に「出勘長沙衛獄」（長沙衛獄の調査へ行った）という事蹟が記載されている。その際に同行の一流士大夫らと交誼を結んだ様子が『毓慶勲懿集』巻四「詩」文重 34A～文 35B 陳瑤撰「舟中三友記」（「弘治丙辰（九年、一四九六）冬十二月望日、賜進士中順大夫大理寺右少卿前兵科都給事中、長洲陳瑤書」と末記）に陳述されている。また陳瑤・呉寛・屠勲・沈周・張習・王鏊・沈翼・江瀾・楊守趾・喬宇・陳金・盧亨が郭良に贈った「舟中三友詩」が『毓慶勲懿集』巻四「記」26礼 1A～26御 4A）に収録されている。続稿で論じる。

*9 『明實錄』「孝宗」巻一百九十三（弘治十五年（一五〇二）十一月）丙戌の項は「命武靖侯郭良効勇營坐營管操」とするが「武定侯」の誤りであろう。「効勇營」は成化二年（一四六六）十二月に復活した十二營の一つである。

*10 右軍都督府僉事としての職務について【郭良墓誌】には「領京營牧馬、勘薊州牧場地、捕北山賊屬若干人」（京營を領して辺境へ赴き、薊州〔天津の北、辺関の重鎮〕の牧地の実地調査を行い、

北山の賊とその眷属若干名を捕らえた）とある。

*11 郭良は郭登撰『郭氏家傳』（原名『郭氏族譜』か／郭登注11参照）に『續編』一卷（郭昌・郭璉・郭嵩・郭顯奇・郭昌夫人戈氏の伝）を増補し、末尾に宗族図を附したという。このことは郭良撰「郭氏家傳序」（「弘治甲子（十七年、一五〇四）秋七月朔旦、嗣元孫武定侯良、齋沐拜首謹序」と末記）に陳述されている（民国版『臨淮郭氏族譜』（三公堂藏版）所収／所有者によりインターネット上で書影が公開されている [http://blogsina.com.cn/s/blog-b15d44a10102vixb.html / 二〇一六年九月三十日現在]）。刊刻したか抄本で供覧したかは不明であるが、刊刻したのであれば、『毓慶勲懿集』巻四「序」文 15B～文重 15B 都穆撰「書郭氏家傳後」（「弘治十七年甲子季冬朔旦、工部主事、前進士、呉郡都穆書」と末記）の存在から、弘治十七年（一五〇四）十二月頃のことと推定される。

*12 『明實錄』には左参将を拝した詳しい経緯は記載されていないが、【郭良墓誌】には「敵寇大同、命充左参將、尋命簡京營兵、別部以俟。公易置旗鼓嚴爲肄練、勇氣増倍、後不果行」（敵が大同を侵略した際、左参将を拝し、ついで京營の兵の精鋭を選抜するよう命じられ、機動部隊として待機した。郭良公は旗や鼓を置き換えて（様々な陣形を）厳しく練兵し、士気を鼓舞したが、ついには用いられずに終わった）とある。

*13 注11参照。

*14 【郭良墓誌】に拠る。

【郭勛注】 年表は『明實錄』を基礎史料として作成した。

*1 郭勛の生年月日は史料に記載が無いが、死期は『明實錄』「世宗」

卷二百六十七（嘉靖二十一年（一五四二）十月）乙酉（九日）の

項に「郭勛死于獄」とあり、享年は明・沈德符撰『萬曆野獲編』（中

華書局排印本（元明史料筆記叢刊）、一九五九年）卷五「勳戚、

咸寧侯」に「郭勛死獄中、年六十八」とある。さらに『毓慶勲懿

集』卷四「文、序」文17B～文18B徐志文撰「賀太保武定侯郭

公華誕序」（郭勛の生辰を祝う内容）の末尾に署された日付が「正

德十年歲次乙亥（一五一五）冬十月六日」であることから、生年

月日は成化十一年（一四七五）十月六日と推算される。

*2 郭房の生年月日は【郭房墓誌】に「生弘治戊午（十一年、一四

九八）九月十七日」とある。郭房は生後十ヶ月後に母姚氏を亡く

してから祖母の元で育てられ、十九歳の時（正徳十一年か）魏国

公の孫娘徐氏を娶り、正徳丙子（十一年、一五一六）六月二十八

日卒したという。

*3 姚氏の生没年月日は【郭勛繼室陳氏墓誌】に拠る。

*4 陳氏の没年月日は【郭勛繼室陳氏墓誌】に拠る。郭良の没年月

日等は【郭良墓碑】に拠る。

*5 郭勛は武定侯を襲爵する直前の二月、沈文華をはじめとする士

大夫から祝いの詩を贈られた。『毓慶勲懿集』卷四「序」文重

15B～文17Bに沈文華による詩序「贈武定侯郭公旋京序」、『毓

慶勲懿集』卷四「詩」35A～40Aに許元奎・張翰・孫錦・祝富・

吳璫・喬縉・畢孝・李教・畢宗厚・祝嘉慶・江海・王昌らによる

詩「贈武定侯郭公世臣奉使旋京詩」が収められている。とりわけ

張翰は後々まで郭勛との繋がりが見出されるため（注17及び年譜

嘉靖十六年「文学・刻書」欄参照）年表に名を特記した（続稿で

詳しく述べる）。

*6 母栢氏の没年月日は【郭良夫人栢氏墓誌銘】に拠る。

*7 『三家世典』（注13参照）「正徳七年、廣西梧州府北流、岑容等

縣獐賊李通寶等…（中略）…攻刼城庫、殺虜軍民、肆行稔惡。勛

會議鎮巡、分布文武副參方面等官、窮追極搗抵、其巢穴、生擒斬

首一千餘名、俘捉三千有餘、及撫散安插三千九百餘衆、捷奏赴京」。

*8 『郭氏文獻集』は筆者未見。現佚かと思われるが、大儒湛若水

による序文「郭氏文獻集序」（正徳七年（一五二二））が『甘泉先

生文集外編』第二卷に収められて伝わる（嘉靖十五年間人詮刻本

／『儒藏』精華編）二五三冊集部（北京大学出版社、二〇〇九年）。

郭鎮・郭珎・郭良の詩を合わせて編纂した書らしい（続稿で詳し

く述べる）。ちなみに『毓慶勲懿集』卷四「詩」50AB／57B謝

承拳「讀文獻集一首」と李孔修「讀文獻集」は『郭氏文獻集』を

閲読した感想を賦した詩である。

*9 『毓慶勲懿集』卷四「文、跋」文25A～文26B「跋總府題名」記後

「大明正徳八年歲在癸酉（一五一三）六月二十五日、賜進士出身

翰林院編修國史經筵官、増城湛若水拜書」と末記、「府題名、肇

于今總督竹田林公舜舉・總鎮潘公世貞・總兵郭公世臣贊成之」。

*10 姚氏・陳氏に続く繼室が趙氏であることは【郭守乾墓誌銘】及

び『明實錄』『世宗』卷四十九（嘉靖四年（一五二五）三月）壬戌の記載「○賜太子太保武定侯郭勛三代並再繼妻趙氏誥命」からわかる。趙氏を娶った時期は『毓慶勲懿集』巻一冒頭の湛若水撰「毓慶勲懿集序」に「若昔太保爰命兩廣、將繼婚、有栢夫人之喪、不合爰、而行三年乃聚」（以前太保「郭勛」が両広に命を受け、繼室を娶ろうとしていたところ、栢夫人「郭勛の母」が逝去したため、婚礼を行うべきではないとして、三年を経てようやく結婚した）とあることから、正徳九年（一五一四）と推算される。

*11 この頃に張詡から贈られたとみられる詩が『毓慶勲懿集』巻四「詩」45B～48Aに二十首収録されている。続稿に論じる。

*12 『明史』巻一百八十七「列傳第七十五、陳金」、「陳金、正徳」十年再起、督兩廣軍務。府江賊王公珣等爲亂、金集諸道兵、偕總兵官郭勛等、分六路討之、斬公珣、大有所俘獲、加少保太子太保。『三家世典』（注13参照）、「正徳十二年、廣西府江南岸接連平樂・陽朔・修仁・荔浦・富賀・懷集・求安・五屯等處猪獠猖獗、奏、蒙勅諭、調集湖廣・兩廣漢達官軍土兵、分布副總兵參將、都布接三司等官分爲七哨、尅期抵集」。

*13 『三家世典』は明の建国の勲臣、中山王魏国公徐達・黔国公沐英・武定侯郭英についての履歴・勲功・出世の本末である。明鈔本國朝典故本が陝西省圖書館に蔵される（『四庫全書存目叢書』史部第九十一冊にも所収）。書誌情報に拙著『三國志演義成立史の研究』（汲古書院、二〇一六年）三六・三七頁参照（六六～七〇頁に楊一清・周南・陳金・吳廷挙序跋）。加えてその編纂を預かったの

は徐志文なる人物のようである（『毓慶勲懿集』巻四「序」文17B～文18B徐志文撰「賀太保武定侯郭公華誕序」、「余」正徳甲戌南回、明年承公命至于蒼梧幕府、修其家傳」（私は正徳九年南へ帰り、翌年公の命に従い蒼梧の幕府へ赴き、その家伝を編纂した）。続稿で詳しく述べる。

*14 『將鑑博議』は兵書。郭勛刻本は現佚とみられる。『四庫全書總目』巻一百「兵家類存目」の「將鑑論斷」十卷、兩淮鹽政採進本の項に郭勛刻本への言及があり、「前有正徳十年達賓序、題曰『將鑑博議』』という。詳しくは拙著『三國志演義成立史の研究』一〇頁も参照されたい。

*15 注2参照。

*16 『毓慶勲懿集』八巻は武定侯郭氏に関わる歴世の文章・碑文・詩編等を収める書。台湾国立故宮博物院蔵（統一編號・平圖005888/005891／管見は東京東洋文庫蔵の景照本（請求番号：H10D-47）。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』三四・三五頁参照（六三～六六頁に費宏・王瓚・湛若水序）。

*17 『千金寶要』は医典。清末・楊守敬が日本の小島尚質（宝素）の下で目睹した『千金寶要』明刊本に正徳十一年（一五一六）郭勛序が付されていたという（楊守敬『日本訪書志』巻九『千金寶要』八卷明刊本）／詳しくは拙著『三國志演義成立史の研究』一一〇・一一一頁参照）。この年に郭勛が『千金寶要』を刊刻したか（但し刊行主体が別である可能性も否定できない）。ちなみに小島尚質が所蔵していた版本には嘉靖十六年（一五三七）陸深

序と同年張翰跋も付されていたというから、正徳十一年刻本の覆刻、或いは翻刻か。楊守敬が小島尚質所蔵本を影鈔した鈔本が台湾の国立故宮博物院に現蔵されており、国立故宮博物院ホームページ「善本古籍資料庫」に掲載される書誌情報によると確かに郭勛序・陸深序・張翰跋を有すようである（統一編号…故観001298-001299）。

*18 注13参照。

*19 『三家世典』（注13参照）に附された序跋はいずれも正徳十年・十一年のものであるが、正文の末尾に正徳十二年までの郭勛の両広での業績が記されていることから（現存本である国朝典故本）、郭勛が自身の履歴を増補して帰京後に刊刻したのではないかと思われる。

*20 『白樂天詩集』四十巻は唐・白居易の詩集。東京都立中央図書館特別文庫室蔵（請求番号…特806）。序文によれば陳金が両広で入手したものを郭勛が譲り受けて刊刻に至ったとのことである。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』三七・三八頁参照（七〇頁に陳金序）。続稿で刊行経緯について論ずる。

*21 『唐元次山文集』十巻『拾遺』一巻は唐・元結の詩集。中国国家図書館蔵（索書号：02543他三種）、台北国家図書館蔵（索書号：40242 09603）。『四部叢刊』（商務印書館）に影印がある。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』三九・四〇頁参照（七一頁に湛若水序）。

*22 『白樂天文集』三十六巻は唐・白居易の文集。日本宮城県図書

館蔵（請求番号：養賢堂文庫40026）、中国国家図書館蔵（索書号：11495）がある。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』四〇・四一頁参照（七一・七二頁に王瓚序）。

*23 『詩韻釋義』不分巻は字を韻ごとに分類し、各字に釈義を付した字書。中国国家図書館蔵（索書号：02507）。題署に「江東雪厓老人集・關西脩髯子釋義」とある。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』四一・四二頁参照（七二・七三頁に楊一漢序）。

*24 この時の経筵官には弘治十八年の進士の名が連なっている（顧鼎臣・董玘・翟鑾・嚴嵩）。郭勛はこの頃から彼らと徒党を組んでいたのではないかと思われる。

*25 『三國志演義』の所謂嘉靖壬午序本（上海図書館等蔵）冒頭に置かれる「關中修髯子」による「三國志通俗演義引」（嘉靖壬午「元年、一五二二」孟夏「四月」吉望「十五日」）關中修髯子書于居易草亭」と末記）は、郭勛が『三國志演義』を刊刻した際に著したものとみられる（主要な根拠は郭勛の家刻本『詩韻釋義』（注23参照）の題署に「關西脩髯子釋義」とあること）。詳しくは拙著『三國志演義成立史の研究』序章「諸版本の体裁から見た刊行経緯と受容のあり方」を参照されたい。

*26 軍務に関する七事の奏上には、太僕寺が馬の耳を割いて目印とするのを禁止すること（京営の馬と混じってしまったため）、馬の健康のため糟粕（酒の絞り滓）を飼料としてやるのを禁ずるといった細やかな決まりや、舎人の十五歳以上の者に新たに指揮以下の武官を世襲させ、選抜して京営の武学で学ばせて将才を養い、

成績の良い者の歳貢を一部免除して鼓舞することといった条があり、軍政に精通していた様子がうかがわれる（『明實錄』「世宗」卷四十五〔嘉靖三年十一月〕丙戌）（○提督團營武定侯郭勛條上七事」の項参照）。

- *27 「大札の議」は、正徳十六年（一五二二）に武宗が世嗣の無いまま崩御したため、その母太后張氏が大学士楊廷和と商議して外藩（安陸〔現湖北省鐘祥市〕）から武宗の従弟にあたる朱厚燧（世宗嘉靖帝）を招き入れ、皇室の嫡流を守るために世宗の生父朱祐杭と生母蔣氏に「伯父」・「伯母」と尊号させ、武宗の父孝宗弘治帝に「皇考」（皇帝の父）、太后張氏に「聖母」（皇帝の母）と尊号させようとしたことに端を発する。世宗は自身の生父母に「皇考」・「聖母」と尊号、孝宗と太后張氏に「伯父」・「伯母」と尊号するよう主張し、嘉靖三年（一五二四）に決議を下し、楊廷和ら多くの朝臣を罷免した。世宗の父朱祐杭と世宗が「正統な帝位継承者」となれば、孝宗・武宗は暗に「不当な帝位継承者」ということになり、孝宗の皇后であり武宗の母である太后張氏の宮中での立場も不利になったものとみられる。世宗からすれば傍系でありながら朝廷における実権を手中に収め、張氏らを牽制することに成功したといえる。郭勛とその徒党（張璉・桂萼・嚴嵩・霍輅等）はみな大札の議で世宗の主張を支持し、その後寵愛を得ることとなった。

*28 注31参照。

*29 注31参照。

- *30 「班軍」とは明代の軍事制度で、各衛の軍が順番に京営へ赴いて操練を行うこと。

- *31 「李福達の獄」とは、郭勛の家に出入りしていた張寅という者が謀反を謀った首領李福達と同一人物であるとして郭勛が逆賊を匿った罪により弾劾されるも、機に乗じて敵対する朝臣らを排斥しようとした兵部左侍郎張璉・吏部左侍郎桂萼らの援けを得て不問となった事件である。都察院左都御史聶賢じょうけんらの奏上によると、山西太原府崞県人の李福達なる者は初め王良・李鉞と反乱を謀ったことにより山丹衛に送られたが、逃げ帰って李五と名を変えた。また捕らえられて山海衛へ送られたが逃げ帰り、陝西洛川県に身を寄せて弥勒仏教を謳って衆を惑わし一財を築いた。のち手下の邵進禄にその地を任せて家族とともに故郷山西へ帰ったが、邵進禄は一揆等の不法行為により官兵に捕らえられるとその首謀者が李五であると供述した。李五はそれを聞いて五台県へ逃亡し、名を張寅と変え、山西徐溝県同戈鎮の辺りを行き来していた。のち財をたよりに都へやって来て密かに匠籍（工匠の戸籍）を買い、賄賂を用いて山西太原衛指揮使の官を得、子の大仁・大義・大札も官府・宦官の下で工匠となった。練炭術や薬の調合を心得ていると詐って武定侯郭勛の家へ出入りし懇意にしていたが、踪跡が露わになったため同戈鎮に帰ったところ、仇敵の薛良に見つかり、彼を恐れてまた都へ亡命した。時にその子大義・大札は官司に捕らえられて処罰されていた。張寅は進退窮まって郭勛に賄賂を送り、巡按御史馬録への便宜をはかろう頼んだ。郭勛は馬録に書

を送ったが、馬録は従わず、「逆賊李福達は妻子まで連座させるべきである」という罪案を提出し、「世々の勲戚でありながら逆賊と通じた」として郭勛を罰しようとした。世宗は李福達親子については死刑と財産没収を命じ、郭勛については罪を自省したことを鑑みて宥恕した。これに対し給事中程輅・劉琦・王科らが郭勛の処罰は不十分であるとして異議を唱えた（以上『明實錄』『世宗』卷六十六〔嘉靖五年七月〕乙酉参照）。

さらに嘉靖五年十二月、山西巡撫都御史江潮・巡按御史馬録・兵科給事中鄭自璧らと給事中秦祐・常泰・試御史邵しょうひん幽らが各自上疏して、郭勛は逆賊李福達と交誼を結び国法を蔑ろにしたと糾弾した。疏が関係する諸司に下されると給事中張達も郭勛の逆罪を許すべきではないと弾劾した。ここに至り世宗も本腰を入れた調査を命じる（以上『明實錄』『世宗』卷七十一〔嘉靖五年十二月〕甲戌参照）。

この獄に決着がついたのは嘉靖六年（一五二七）九月である。李五の仇敵、薛良ら三十人がみな張寅の顔を指さして逆賊李福達と同一人物であると答えたため、張寅は李福達であると認められ、それと通じた郭勛の罪も問われることとなった。そこで刑部尚書顔頤がんいしゅ寿らが江潮・馬録の主張の通りに罪案を決定したが、世宗は審議が不十分であるとして顔頤寿らを責めた。大学士楊一清の諫言を受けて廷臣に再議させたところ、顔頤寿らは罪案を改め、張寅のみを斬首として子の大義らは連座させぬこととした。罪案が覆ったことに世宗は不満を示し、さらに廷鞫を行わせたところ、

そもそも薛良は私怨から張寅が謀反の首領李福達と同一人物であると妄りに訴えたのであり、張寅に罪は無いという罪案となった。世宗は捜査の不備と罪案が次々覆ることに怒り、張璫・桂萼・方獻夫に三法司を委ねて審議を行わせた。桂萼が馬録宅を捜査し、篋中より大学士賈詠・御史張英・都御史張仲賢・大理寺丞汪淵・工部侍郎閔びん楷の密書を発見すると、世宗は賈詠らの密書について追究した。次に桂萼は徒党を組んで張寅一族を陥れ滅ぼさんとしたとして給事中常泰・劉琦、員外郎劉仕、左使馬録、給事中王科・鄭一鵬・秦祐・沈漢・程輅、評事杜鸞、南道御史姚鳴鳳・潘莊・戚雄らを弾劾、李福達の件にかこつけて郭勛を逆賊と称し陥れようとしたとして給事中張達・御史高世魁・郎中司馬相を弾劾した。桂萼はさらに、逆賊李福達の戸籍簿上の年齢と張寅の年齢が一致しないことから両者は別人物であると主張し、馬録らが妄りに郭勛を弾劾したことの罪を追究した。ついに世宗は薛良らを死罪、原問官李璋らを辺境へ流刑、郭勛を弾劾した者達を罷免したり閑住を命じ、馬録については張寅と郭勛を陥れようとした首謀者として本人及び子まで死罪にしようとしたが、大学士楊一清の諫言によりとどまり、辺境への流刑とした（以上『明實錄』『世宗』卷八十〔嘉靖六年九月〕壬午の項に拠る）。

*32 嘉靖七年、郭勛は太監張永・兵部尚書李承勛と陰悪になった。張永は字德延、号守庵、保定新城（現河北省高碑店市）の人、成化十一年（一四七五）に宦官となり成化・弘治・正徳・嘉靖四朝に仕えた人物である（楊一清撰『大明故司礼監太監張公墓誌銘』（張

永嘉誌銘」に拠る〔胡丹輯考『明代宦官史料長編』一四八九―九二頁、鳳凰出版社、二〇一四年〕。李承勛は字立卿、湖江嘉魚（現湖北省咸寧市嘉魚県）の人、弘治六年（一四九三）の進士で、嘉靖六年からは兵部尚書を掌った（『明史』卷一百九十九「列傳八十七、李承勛」等に拠る）。正徳十六年の世宗即位直後から団營（京軍）の提督総兵官（長官）にあたっていた郭勛と、嘉靖六年に団營提督（監察官）に任じられた張永・李承勛との間に軋轢が生じたのである。年譜中に記載する把総湯清の処遇を巡る争いもその一端であろう。

ちなみにこの対立の中で郭勛を支持した霍輶は、字渭先、号兀崖^が、南海県石頭郷（現広東省仏山市石湾区）の人、正徳九年（一五一四）の会試の第一名で、大札の議の際に張璉・桂萼・郭勛と共に世宗の主張を支持し、礼部侍郎へと破格の昇進を遂げた人物である（『明史』卷一百九十七「列傳第八十五、霍輶」。嘉靖七年に郭勛と李承勛が朝廷で論争した際、彼が郭勛に加勢した様子が『明實錄』『世宗』卷九十七「嘉靖八年正月」戊寅の項に語られている。「上曰」方去年勛與張永争辯時、輶遂責李承勛曰、『汝却不與郭勛同扶持、反與張永同邪、謂何。』問於萼。而萼知其嫉承勛、面與之曰、『張永能體勅諭、修舉戎務、故李承勛與之同。郭勛深忌永、每事自專、故李承勛不爲之同。』輶意猶未解、復曰、『郭勛雖不才、然昔日助我輩議禮焉。可不爲之相持哉。』萼曰、『以此看來李承勛專爲我輩、於朝廷之計、全不以副、可乎。』輶遂無言答」（世宗は言った、「昨年〔嘉靖七年〕郭勛と張永が論争した

際、霍輶は李承勛を責めて言った、『おまえは郭勛と助け合わず、張永と共に邪を行っている、どうしてだ。』私は（その意図を）桂萼に尋ねた。桂萼は霍輶が李承勛を妬んでいることを知っており、霍輶に向かって言った、『張永は勅諭をよく実行し、兵務にもよく当たっているため、李承勛は彼に与しているのだ。郭勛は張永を深く嫌っており、何をするにつけ自分勝手であるため、李承勛は彼に与しないのだ』と。霍輶はまだ納得せず、さらに言った、『郭勛は不才であるとはいえ、昔我らの大札の議〔での主張〕を助けてくれたではないか。彼のために手助けするべきではないか』と。桂萼は言った、『この点から言えば李承勛は完全に我々の仲間だ（李承勛も大札の議で世宗の主張を支持したか）。朝廷の政務において彼を全く助けられないものか』と。かくて霍輶は答える言葉無くした。霍輶はこの後も郭勛に阿附を続ける（注35・注37・注57参照）。

また郭勛は張永と確執を生じたことにより、張永と懇意にしていた大学士楊一清との間にも軋轢を生じた（注34参照）。そもそも楊一清はこの頃張璉・桂萼と対立していたため、その徒党である郭勛とも対立したのは自然なことかもしれない。嘉靖七年頃の朝廷内は、楊一清・張永・李承勛と、張璉・桂萼・郭勛・霍輶が対立する図式ができていたといえる。

*33 『明實錄』『世宗』卷九十八（嘉靖八年二月）戊寅の項記載の世宗の言葉に「又朕記憶去歲言官嘗謂姻連戚里、指其與陳萬言爲親也」（朕が記憶するところでは、言官〔諫官〕が去年〔嘉靖七年、

一五二八）外戚の婚姻関係の事に言及したことがあるが、郭勛と陳万言が縁組みをしたという内容であった）とある。しかしこの他に郭勛と陳万言の姻戚関係を示す記録は見つからず、詳細は不明である。

*34 世宗が前月（嘉靖七年十二月）に逝去した太監張永（団營提督）に替わる代務者を大学士楊一清に推挙させたところ、楊一清は太監黃錦・王竑^{おうちやう}を推挙し、且つ「近頃武定侯郭勛のために營の政が妨害されています、贈賄を戒めるようお願いします」と請うた（『明實錄』「世宗」卷九十七「嘉靖八年正月」丁未）。昨年から続く派閥の紛擾（注32参照）はこの後も続き、翌月には郭勛・張璫・桂萼・霍輅らに及ぶ大獄が起りかねないところであった（注35参照）。

*35 嘉靖八年二月十二日、世宗は巡按御史趙鏜の奏上により郭勛が錦衣衛の罪人金輅から賄賂を受け取って彼を助けた事件を知り、朝命を蔑ろにしたとして詰問した。郭勛が強弁したため、世宗が怒り法司に罪案を審議させるよう伝旨を命じたところ、大学士楊一清が閣臣に郭勛の徒党がいるため審議が行えないとして世宗に直接の裁決を請うた（楊一清はこれまでの確執（注32、注34参照）から暗に張璫・桂萼を譏ったのではないかと思われる）。これに対し世宗は「そなたも郭勛の行いが道理に反していると言っていないではないか（注34参照）。郭勛の過ちはこれだけではない。みなに暴かせて郭勛の心を服従させねばならない。張璫・桂萼・霍輅らは大札の議の件で郭勛と投合したために、このこと（＝郭勛

の暴挙）に目が効かなくなっているのだ」と言い、罰を郭勛一人にとどめて郭勛と関わりのある者達を保護するようにと張璫に勅諭し、大獄を避けた。

*36 給事中趙廷端は翌嘉靖九年（一五三〇）四月に楊一清が張永から収賄した罪を問われながら宥恕された際にもその処遇に不満を申し立て、楊一清を罷免・閑住に追い込んでいる（『明實錄』「世宗」卷一百十二「嘉靖九年四月」丙寅）。郭勛・張璫・桂萼らの徒党に与してたのではないかと思われる。

*37 楊一清が郭勛の徒党と対立していたことは注32・注34・注35で述べた所であるが、嘉靖八年八月二十三日には霍輅より「若楊一清之姦賊罪狀、則難以盡言、如納張永之饋而爲之引薦、受蕭敬之饋而爲其家人求校尉、此猶可言」（楊一清の収賄の罪状はというと、言い尽くすのが難しいほどです。張永からの賄賂を納めて彼を引き立てたこと、何度も太監蕭敬からの賄賂を受け取りその家族に校尉の官を与えるよう求めたことなどはまだいい方です）と弾劾された（『明實錄』「世宗」卷一百四「嘉靖八年八月」丙戌）。さらにこの頃、張永の使用人であった朱繼宗がその遺産を横領していることを張永の兄張富より非難されたために、「張永は朱宸濠の乱平定のために江西へ赴いた際（正徳十四年、一五一九）朱宸濠の金庫から金二千両を盗み、その半分を楊一清に贈賄し弟の張容と兄の張富に官職を与えるよう求めた」と奏上し、却って張富らを弾劾した（『明實錄』「世宗」卷一百十二「嘉靖九年四月」丙寅）。この件について『明實錄』「世宗」卷一百六十九「嘉靖十三

年十一月」辛巳の項には、実は郭勛が楊一清を陥れる機会を狙っており、霍輜による弾劾に乗じて朱繼宗に流言を流させたのだというが、真偽のほどは不明であり、郭勛の暗躍について信憑性に足る記録が残っているとはいえない。かくて嘉靖九年（一五三〇）四月七日、楊一清は「往在陝西與鎮守太監張永同事相善。永之廢而復用也、一清有力馬。及永歿、復爲作誌、而永弟容乞恩、得陞錦衣衛指揮僉事、兄富爲副千戶。：（中略）：詔下法司推鞫、廉得永存日、餽一清生日賀禮金百兩、及容求文折儀銀二百兩」として収賄の罪により罷免・閑住を命じられた（『明實錄』「世宗」卷一百十二〔嘉靖九年四月〕丙寅）。

*38 「字敬」は張璉が世宗より賜って改名した名。

*39 太常寺卿彭澤は郭勛と懇意の人物であった。明・王世貞撰『弇州史料後集』卷三十六「縉紳轟飲」には彭澤が郭勛の邸を訪れて酒を飲み交わした様子が以下のように陳述されている。「刑部有張照磨者、：（中略）：乏糧、晨貸於團營師武定侯郭勛。方就坐、而報大司馬彭公澤來訪。侯出迎之、張避所。彭公忽謂侯、『今年釀若何、小勝於舊』。已而起曰、『幸尚早、能小嘗否』。曰、『佳』。延之別室」（明万曆四十二年刻本／『四庫禁燬書叢刊』史部五十冊一八頁下～一九頁上〔北京出版社、一九九七年〕）。彭澤が少詹事夏言・給事中孫応奎を陥れようとしたというこの事件で郭勛は調査官に任じられており、彭澤は山西行都司で充軍の命を下されたのであるが、この三ヶ月後に孫応奎が郭勛を「奸悪」と弾劾していることを鑑みると、郭勛も彭澤に与して孫応奎らを貶めよう

としたのではないかと思われる。

*40 無逸殿は、夏言が世宗に親蚕礼（皇后が妃嬪を率いて蚕神繅祖を祀り、蚕を養い、国民が紡績に勤めるよう鼓舞する儀礼）を行うよう上疏したことを受けて、西苑に造営された先蚕壇、及び土谷壇（帝社稷壇）一帯の称である。

*41 泰神殿は皇天上帝と皇帝の祖宗の神主（牌）を安置する場所。嘉靖十七年には「皇穹宇」と改名される。

*42 『雍熙樂府』は曲選。郭勛による初刻本（所謂嘉靖辛卯刻本）は台北国家図書館蔵（索書号：407.212 15012）、台湾国立故宫博物院蔵（統一編号：平圖 019797-019836〔目録は嘉靖丙寅年刊本と誤る〕）、北京大学図書館蔵（索書号：807）、日本大阪府立中之島図書館蔵（請求番号：甲漢80）。書誌情報は拙著『三國志演義成立史の研究』五六・五七頁（七三・七四頁に王言序）を参照されたい。

*43 欽安殿には道教の北方神玄天上帝が祀られる。世宗は道教を厚く信仰しておりその重修を行った。

*44 世宗は嘉靖十三年（一五三四）、累朝及び恭睿獻皇帝（生父朱祐杭）の「宝訓」及び「実録」の重書に着手し、嘉靖十五年に成る。この事業の総監督は郭勛であった。

*45 世宗はその治世の前半、大規模な礼制改革を行った。太廟の改建もその一つである。北京の太廟は永樂十八年（一四二〇）成祖により創建され、弘治四年（一四九二）孝宗が寢殿の後ろに祫廟（皇帝の遠い祖先を祀る）を建造し、嘉靖十四年～十五年（一五

三五（三六）世宗により独立する九廟に改築された。しかし嘉靖二十年（一五四一）九廟は世宗父睿宗の祀廟を残して全焼した。世宗は嘉靖二十二年（一五四三）から翌年にかけて太廟を原型通り一廟に再建した。

*46 張瓚は後々まで郭勛と徒党を組んだ人物である。字は廷猷、直隸滄州の人、戸籍は府軍左衛の官籍（『明清進士題名碑錄索引』（上海古籍出版社、一九八〇年）に依拠）。嘉靖十四年（一五三五）正月に兵部左侍郎兼都察院左僉都御史、総督両広軍務兼理巡撫を拝し、同年三月に兵部尚書に昇進した（『明實錄』『世宗』卷一百七十一（嘉靖十四年正月）丙寅／「世宗」卷一百七十三（嘉靖十四年三月）甲申）。両広の軍務繋がりで郭勛と関係があったか。嘉靖二十年（一五四一）郭勛の獄の際には「兵部尚書張瓚阿附郭勛。自纍世通家」（兵部尚書張瓚は郭勛に与している。（彼らは）代々交誼の深い家門だ）などと弾劾された（『明實錄』『世宗』卷二百五十四（嘉靖二十年十月）己未）。

*47 武学の改建・改制に際して礼部・工部が提出した議案の要旨を以下にまとめる。（一）殿堂を建てる。（二）各府から掌印僉書の侯伯、各營から將官二、三十名を選出し、毎月三・十三・二十三日に堂で兵書等を講義させ、八・十八・二十八日に武藝を演習させる。仲冬（十一月）にはお上に講武殿へ駕御していただき大閱礼（閱兵式）を行い、將帥を試験し賞罰を与える。（三）古今の軍事家の廟を崇め祀る（唐制（唐肅宗の代）に倣い武成王廟を建て、太公呂望を宗とし、漢唐以降の名將である孫武・呉起・司馬

穰苴・尉繚子・黄石公・張良・韓信・李広・趙充国・諸葛亮・鄧禹・馮異・関羽・張飛・李靖・李勣・郭子儀・曹彬・韓世忠・岳飛、本朝の徐達・常遇春・張玉・湯和を共に祀り、毎年春と秋に祭礼を行う。（四）十一月の大閱礼の他、二月・五月・八月の望日（十五日）に弓馬・兵略を関係部署が厳格に校閲して成績を記録し、成績優秀者のみ推挙して官に充てる。以上『明實錄』『世宗』卷一百八十六（嘉靖十五年四月）甲午の項に拠る。

*48 郭勛が奏上した三事は以下の通り。「一…清漕卒許載貨物、以通下情。一…請餘鹽盡輸塞下、以實邊儲。一…請復設礦課、以助工費」（一…漕卒（穀物などを運ぶ士兵）が貨物・宝物を運搬している実情を調査・監視し、下々の状況に通曉すべきです。一…余っている塩を北辺に運び、辺境防備の兵糧・物資の備蓄を充実させて下さい。一…礦課（塩税・鉄税）を再び設置し、工費（この時行われていた太廟改建や世宗陵墓造営及び七陵修工の費用）を補助して下さい）。以上『明實錄』『世宗』卷一百八十九（嘉靖十五年七月）庚申の項に拠る。

*49 清・楊守敬が日本の小島尚質（宝素）のもとで影鈔した鈔本が台湾国立故宮博物院に蔵されている（注17参照）。

*50 明・鄭曉撰『今言』卷一「九十二」に「嘉靖十六年、郭勛欲進祀其立功之祖武定侯英於太廟、乃倣『三國志俗說』及『水滸傳』爲『國朝英烈記』（嘉靖十六年、郭勛はその功を立てた祖先である武定侯郭英を太廟に移して祀らんと欲した。そこで『三國志俗說』や『水滸傳』を模倣して『國朝英烈記』を成した）／明・沈

徳符撰『萬曆野獲編』卷五「動戚、郭勛冒功」に「今俗説『英烈傳』一書、皆勛所自造」（いま俗に謂う『英烈傳』なる書は、みな郭勛が自分で創ったものである）／明・陳建輯、明・沈国元訂『皇明從信錄』卷三十「丁酉、嘉靖十六年、正月癸卯」の「○進武定侯郭英配享太廟」の條に「至是武定侯郭勛、欲進其立功之祖英於太廟、乃倣三國志俗説及『水滸傳』、爲『國朝英烈記』（訳は『今言』とほぼ同じ）とある。前後の文は拙著『三國志演義成立史の研究』五九〇―六一頁、一〇八―一〇九頁に引用したので参照されたい。

*51

永樂帝の諡号改變について、郭勛にまつわる以下のような話がある。長陵（永樂帝とその皇后徐氏の合葬墓、北京市昌平区天寿山に位置）を謁陵した世宗は、新たな諡号を木に彫って碑の上に加えるよう命じた。これについて郭勛は「以爲宜盡礪舊字更書之、可以垂永久」（元の字を磨き削って書き直せばよろしかろうと存じます、そうすれば永久に残すことができます）と上疏した。世宗は「元來の号を削り傷つけるなどということは朕には忍びなくてできぬ」と機嫌を損ね、礼部と翰林院に會議させた。礼部も「郭勛は的外れな事を言つて、自分が礼を失っていることに気づいていない」と覆言し、世宗の原案通り行われることとなった。以上『明實錄』「世宗」卷二百十七（嘉靖十七年十月）乙巳の項に拠る。

*52 「題主」とは神主（木製の位牌）を作製する際まず表面に「□□之神王」と書いておき、続いて名望のある者が「王」の字の上

に朱筆で点を加え「主」とする儀式。「点主」とも称す。

*53

世宗は前年（嘉靖十七年（一五三八））十二月に逝去した母蔣氏の埋葬について、北京天寿山の長陵（永樂帝陵墓）の西南、大峪山に新陵を建造し、父睿宗の梓宮を安陸（現湖北省鍾祥市）純徳山の顯陵から運ばせて合葬すると決め、郭勛と大学士夏言・顧鼎臣の三人に陵墓造営の総督を命じたが、顯陵に母を合葬すべきではないかと迷いを生じ、錦衣衛指揮趙俊に顯陵を視察して来るよう命じた。そしてその帰りも待たず、嘉靖十八年（一五三九）元旦の夜、顯陵への合葬を郭勛に面諭して礼部へ伝旨させた。二月からは自ら顯陵を視察するため南巡を決行し、顯陵への合葬を策定した。

*54

世宗は母蔣氏の埋葬地問題から顯陵視察のための南巡を決行した（注53参照）。郭勛もこの南巡に扈從し様々な恩沢を受けた。その様子は『明實錄』「世宗」卷二百二十二（嘉靖十八年（一五三九）三月）庚午の項に「以諸王所獻馬匹・金幣、頒賜扈從大臣翊國公郭勛・駙馬都尉崔元・大學士夏言・禮部尚書嚴嵩」（諸王が献上した馬や金・幣を、扈從の大臣翊國公郭勛・駙馬都尉崔元・大学士夏言・礼部尚書嚴嵩に分け与えた）、同書「世宗」卷二百二十三（嘉靖十八年四月）庚戌の項に「都護副將軍朱希忠、以扈從時曾荷特旨得肩輿以行、因援大將軍郭勛例、請以爲常。上許之、不爲例」（都護副將軍朱希忠が、「臣下が」扈從する時にはかつては特別な詔令を賜り、御駕の輿と並んで進むことを許されたことや、大將軍郭勛の例を引用し、これを常例とするよう請うた。お上はこれ（＝並んで進むこと）を許したが、常例とはしなかった）

とあることからもうかがわれる。

- *55 郭勛が范欽らを弾劾して罷免・停俸に追い込んだ件について、『明實錄』〔世宗〕卷二百二十六〔嘉靖十八年七月〕癸未には「大工を遅延させた」と記されるだけで「大工」が何の施工を指すのか不明確であるが、この年正月〔世宗〕卷二百二十〔己卯〕の項に「奉先殿成、陞賞効勞諸臣。武定侯郭勛……〔中略〕……賞銀八十兩・綵款五表裏。……〔中略〕……郎中范欽等、詰勅房辦事」とあることから、奉先殿の施工で両者に接点があったことがうかがわれる。ちなみに范欽は以後も郭勛に関心を持っていたらしく、後に郭勛の獄に関わる奏文を採録した『奏進郭勛案狀』（原名『武定侯郭勛招供』）を著している（范欽の蔵書楼であった寧波の天一閣文物保管所現蔵。刑科都給事中高時の奏文二篇・江西道監察御史童漢の奏文一篇・刑部等の奏文三篇・世宗の聖旨数篇を収録。筆者は実物未見）。また、天一閣には郭勛・郭武・郭登の詩集『郭氏聯珠集』も保存されている（郭嵩・附夫人孫氏注2参照）。
- *56 嘉靖九年に「泰神殿」として建造された圓丘（天壇）の正殿は、嘉靖十四年に改建されて「皇穹宇」と改名された。
- *57 霍輅が郭勛と徒党を組んでいたことは注32・注34・注35・注37に述べた所である。この時にも郭勛と結託して夏言を攻撃した。翌嘉靖十九年十月に霍輅は卒するが、郭勛と夏言は変わらず憎み合ったという（『明史』卷一百九十六「列傳第八十四、夏言」、「而霍輅入掌詹事府、數修怨、以郭勛與言有隙、結令助已。三人日相搆。既而輅死、言・助交惡自若」）。

*58 『明實錄』本文は「戊寅」の日とするが「戊申」の誤であろう（『世宗』卷二百二十七〔嘉靖十八年閏七月〕戊寅）。

- *59 郭勛が奏上した辺境政務についての五事の要旨を以下にまとめる。（一）かつて鎮守の内臣の不動産であった辺境の田畑を總兵官・副參・遊擊官等に分け与え、人を集めて小作させ、略奪や占拠の無いよう撫按官に監視させてください（ちなみにこの条については翌嘉靖二十年の四月に実施される）。（二）糧食運搬の士卒に特産品四十石を共載させて道中の資とすることを慣例として許していますが、近頃これを襲撃する者が増えておりますのでこの慣例を禁じてください。（三）大同・宣府・遼東の各巡撫官に山東・河南等處の滯納税を督促させてください。（四）近頃長江の南北に設置された價運主事五人を川沿いに配備して窃盜を監視させ、もし窃盜があれば京通二倉（京城・通州〔北京市東南部、京杭大運河の北端〕に設置された二つの糧倉の総称）に護送させるようにしてください。（五）行巡撫御史に運司を厳しく監視させ、余塩を私販せず官塩を増やすよう努めさせてください。
- *60 郭勛は以下のように上言して文臣を批判している。「將臣雖以善戰爲勇、亦以相機爲智。而文臣不諳軍旅、但驅之使戰、或待以苛禮、或繩以文法、至於誣死」（將臣〔武臣〕は戦いにたけることを勇（「いさましき」とみなし、臨機応変であることを智（「賢さ」とみなす。しかし文臣は戦の事に熟達しておらず、ただ人〔武臣〕を遠くへ馳せさせ戦わせるだけである。或いはこまごまとした礼式で以て〔武臣に〕対したり、或いは厳しい法律で以

て〔武臣の〕誤りを咎めたりして、果ては誣告によって死に追いやることまである。以上『明實錄』『世宗』卷二百三十六〔嘉靖十九年四月〕癸未の項に拠る。

*61 『明實錄』は「款朝用」とするが『明史』は「段朝用」とする。

*62 沙河行宮城は現北京市昌平区沙河鎮に位置し、皇帝や皇后、嬪妃が謁陵・巡狩する際の駐屯地である。成祖永樂帝による始建で、正統年間に水害のため損壊し、世宗が嘉靖十七年から十九年にかけて再建した。

*63 『明實錄』は「平江伯陳鏊」とするが「遂安伯陳鏊」の誤りであろう〔『世宗』卷二百三十八〔嘉靖十九年六月〕乙酉〕。平江伯は陳圭で、この頃儀礼に関わっていたという記載は無い。

*64 『雍熙樂府』については注42参照。楚王朱顯熔による覆刻本については拙著『三國志演義成立史の研究』一二一・一二二頁注46〔②嘉靖庚子（十九年、一五四〇）序を持つ所謂『嘉靖庚子年楚藩刻本』〕にも述べている。

*65 戸科給事中朱憲章・山西道監察御史金燦が陵工の施工にあたる官員の不正を訴えた件は『明實錄』『世宗』卷二百四十四（嘉靖二十年〔一五四一〕正月）丁巳の項に記載がある。軍役の検問を命じる勅を郭勛が長らく受け取らなかった件は『明實錄』『世宗』卷二百五十三（嘉靖二十年〔一五四一〕九月）乙未「○翊國公郭勛有罪下詔獄」の項に記載がある。

*66 嘉靖二十年（一五四一）四月五日の夕べ、太廟に火災が発生し、九廟は睿宗廟（世宗父の祀廟）を残してみな焼け落ち、成廟・仁

廟の神主を焼失するという事態に至った。世宗はこれを上天の降した戒めとみなし、大臣らも次々と辞職を請うて自効した。

*67 聶賢は嘉靖五年七月の李福達の事案でも郭勛を弾劾しており（注31参照）、郭勛と交誼があったという張延齡が嘉靖十二年（一五三三）十月に収監された際、「不軌の罪」を強調したのも彼であった（注75参照）。常に郭勛と対立する立場にあったものともえる。

*68 戚賢による弾劾の内容は『明實錄』『世宗』卷二百五十三（嘉靖二十年〔一五四一〕九月）乙未「○翊國公郭勛有罪下詔獄」の記載に拠る。

*69 郭勛はこの頃病を理由に出仕していなかった。同時期、郭勛と確執のあった大学士夏言も病と称して休暇をとっていた（二人の確執については注57参照）。二人の病に疑念を抱いた世宗に対し、郭勛を嫌っていた駙馬都尉京山侯崔元が「郭勛は今なら夏言に讒言される恐れがないと安心して休暇を取っているだけです。夏言が出仕し始めれば郭勛もすぐに出仕するでしょう」と讒言し、世宗もこれに領いたことから、言官（諫官）らは世宗が夏言を氣にかけ郭勛に不満を抱いていると知り、続々と郭勛を弾劾し始めたという（『明史』卷一百九十六「列傳第八十四、夏言」、「九廟災、言方以疾在告、乞罷、不允。：〔中略〕：〔帝〕俾還私第治疾、俟後命。會郭勛以言官重劾、亦引疾在告。京山侯崔元新有寵、直内苑、忌勛。帝從容問元、『言・勛皆朕股肱、相妒何也。』元不對。帝問言歸何時、曰、『侯聖誕後、始敢請。』又問勛何疾、曰、『勛

無疾、言歸即出耳。』帝領之。言官知帝眷言惡助、因共劾助」。

- *70 時期不明確。郭助の獄にまつわる事項は『明實錄』「世宗」卷二百五十三（嘉靖二十年（一五四一）九月）乙未「○翊國公郭助有罪下詔獄」の項にまとめて記載されており、正確な時期や前後関係が見出し難い。また郭助の疏弁や罪状の詳細な調査結果などは記載されていない。郭助の罪状については注55で言及した范欽撰『奏進郭助案狀』（原名『武定侯郭助招供』）と併せて考証する必要がある。

- *71 郭助の上疏に「何必更勞賜勅」等の不遜な言葉があったというが、『明實錄』の記載ではその時期や詳細が不明瞭である。後に世宗がこれらを夏言の謀略とみなして罰していることから（嘉靖二十一年六月のこと、注81参照）、信憑性に疑問がある。

- *72 注70に同じ。

- *73 孫漣は嚴嵩の邸宅の代管（家を管理する、或いは宿屋として利用するの意か）を行っていたという（『明史』卷二百十「列傳九十八、謝瑜（王曄・伊敏生・童漢臣等）」、「嘉靖二十年十一月南京吏科給事中王曄劾」嵩所居第宅、則助私人代營之。踰月、御史伊敏生・鄭芸・陳策亦云、嵩居宅乃助私人孫漣所居。漣籍沒、嵩第應在籍中」。

- *74 都察院副都御史胡守中は郭助と懇意だったようである（注80参照）。保身を図って郭助の族人郭憲を訴えたか。

- *75 郭助に対する弾劾と罪状は多数あるが、世宗に大獄の詔を決心させた一番の引き金は給事中高時が指摘した郭助と張延齡（「不

軌」（謀反）の罪で刑部の獄に拘留中）との交流であった（高時

による弾劾の要略は注76参照）。孝宗の皇后張氏（武宗母）の弟である昌国公張鶴齡・建昌侯張延齡は、正徳期から恩寵をたよりに高慢専横な振る舞い甚だしく、嘉靖に入ってから卒去した太監らの莊田や邸宅を安価に購入し（本来は官に没産されるべき）豪奢な庭園を造るなど数々の不法行為を行い、世宗の頭を悩ませていた。そもそも外藩の出自でありながら帝位を継いだ世宗にとって、太后張氏とその一族はただでさえ好ましい存在ではなかったと思われる（注27「大礼の議」参照）、郭助も大礼の議の際には世宗側に加勢して張氏と対立したわけであるが、密かに交誼を持っていたということである（太后張氏の死が嘉靖二十年（一五四一）八月八日、高時が郭助と張延齡の交流を弾劾したのが八月（九月、続いて郭助と張延齡の交流を弾劾する疏が噴出していることから、太后張氏の死と郭助の大獄にも繋がりがあつたのではないかと疑われる）。そのうえ張鶴齡・張延齡兄弟はこの時すでに不軌の罪を問われた重罪人であつたから（但し罪の真偽は以下に述べるように必ずしも確かではない）、それと通じていたとなれば失脚するには十分すぎる要因であつた。

張鶴齡・張延齡兄弟が「不軌」の烙印を押されるに至つた発端は、『明實錄』「世宗」卷一百五十五（嘉靖十二年（一五三三）十月）丙子の項の記載に拠ると、正徳中、張延齡の邸に身を寄せていた天文占卜者の曹祖なる者が、同邸で使用人として働いていた子の曹鼎とその同輩馬景と不和となつて邸を追ひ出されたために

怨みを抱き、「延齡與子鼎及景等陰謀不軌」（張延齡は「私の」子曹鼎、馬景らと共に不軌を陰謀している）と奏上した事件である（但し明・沈德符撰『萬曆野獲編』卷五「勳戚、曹祖」の記載に拠れば、曹祖はもとは太監劉瑾の邸に身を寄せていたが怒りを買って追い出され、子の曹鼎を頼って張鶴齡のもとに身を寄せるも、またもや追い出されたために「訴鶴齡兄弟陰圖不軌」（鶴齡兄弟が不軌を陰謀していると訴え）、張鶴齡兄弟は朝參を禁じられたという）。嘉靖十二年（一五三三）に至り、指揮司聡なる者が張延齡に借りた金の返済に窮したことから張延齡を陥れようと謀り、かつて曹祖が訴えた不軌の罪を引いて疏を為した。この疏が世宗の耳に入り、張延齡には死刑の裁決が下され、張鶴齡は爵を奪われ南京錦衣衛指揮同知帶俸に降格のうえ閑住を命じられた（ちなみに刑部尚書聶賢らが不軌の罪を強調して大臣らに及ぶ大獄を請うたがそれは避けられた）。

弟張延齡は刑部の獄に投獄された後、『明實錄』『世宗』卷一百九十二（嘉靖十五年（一五三六）十月）戊戌の項の記載に拠ると、姉太后張氏が存命中だったこともあってか死刑に処されることなく留め置かれ、堤牟主事の計らいにより手枷足枷が外され使用人の出入りも許され、時には獄中で酒宴を設けたりもしていたという。しかし嘉靖十五年（一五三六）、堤牟主事羅虞臣に怨みを持つていた囚人劉東山なる者が「張延齡」逆悪陰謀、賄結邊官、爲外援」（張延齡は）謀反を陰謀しており、賄賂を用いて辺境官と交誼を結び外部からの援助にしようとしている（等と奏上し、

羅虞臣をその徒党として訴えた。また張延齡が獄中で書した「聖學心法」一幅に「君道不明、賞罰六事於其端」（君主の道に昏し、端緒ばかり見て軍事大臣に賞罰を下している）と題したことが世宗の怒りを買ひ、「訕上爲逆」（君主を譏り反逆を謀っている）として再び死刑が裁決された（その後もやはり刑部の獄中に留め置かれる）。

兄張鶴齡の方は南京錦衣衛指揮同知帶俸に降格されたのち、『明實錄』『世宗』卷二百八（嘉靖十七年正月）丙申の項の記載に拠ると、嘉靖十六年（一五三七）冬に班明・于雲鶴なる者が外戚と宦官の変事を誣告した際（詳細不明）、逮捕されて詔獄の内に瘕死したという（『明實錄』『世宗』卷二百六（嘉靖十六年十一月）癸卯の項に記載される「先是順天府生員陳琨男・陳大紳・刑部見監犯人劉東山、各奏張鶴齡等奸惡諸事、詞連致仕大學士張孚敬。至是鎮撫司上請應否行提。詔、『以延齡等事與孚敬無預、勿問』」という件と関係があるか）。

但し、嘉靖十二（十六）年の経緯について、明・沈德符撰『萬曆野獲編』（中華書局排印本（元明史料筆記叢刊）、一九五九年）卷十八「刑部、劉東山」は「實錄中、載劉東山始末甚誤」（『明實錄』に記載される劉東山に関する一部始終は甚だ誤っている）といい、以下のような経緯を陳述している。「（京師人劉東山）初以射父論死得出。素爲昌國公張鶴齡・建昌侯張延齡門客、託以心腹。…（中略）：世宗入繼、張氏失勢、東山屢挾之、得賂不貲。最後挾奪延齡愛妾不得、卽上變告二張反狀。上震怒、議族張氏、賴永嘉爲首

揆、與方南海力抗之、得小挺。錦衣帥王佐者、素知東山奸宄、力爲辨析、且發其生平諸罪狀甚悉。上始悟。東山坐論如法、枷示而死。鶴齡奪爵貶南京、尋又逮至、瘐死詔獄。延齡論斬、長繫獄中」(都の人劉東山は初め父を射殺した罪で死罪とされるも釈放を得た。昔から昌国公張鶴齡・建昌侯張延齡の食客で、腹心の手下として信任を得ていた。…〔中略〕…世宗が即位してから張氏の權勢が衰えると、劉東山は度々張鶴齡兄弟を脅迫し、得た宝物は計り知れず、ついには張延齡の寵愛する妾を脅し奪おうとしたが得られなかったため、張鶴齡兄弟が謀反を企んでいると上訴した。お上は大いに怒り、張氏一族を皆殺しにしようとしたが、首輔張璁が方献夫と共に力強くこれに反対したおかげで、寛大な処遇を得た。錦衣帥王佐は普段から劉東山の奸詐不法を知っており、〔張氏のために〕力強く弁明し、その平生の諸々の罪状を甚だ審らかに暴いた。お上はようやく「眞実を」悟った。劉東山は法に照らして有罪とされ、首枷をしてさらし者にされて死んだ。張鶴齡は爵を奪われ南京へ遷り、ついでまた逮捕されて都へ護送され、詔獄の内に瘐死した。張延齡は斬刑に処すと裁決されたが、長らく獄中に留置された)。また明・王世貞『弇州史料前集』卷十七「錦衣志」の記載も『萬曆野獲編』に近く、劉東山が「張鶴齡兄弟は魔術を用いて皇帝を呪詛している」と誣告したこと、王佐がそれに抗弁したことを陳述している(「昭聖皇太后弟昌国公鶴齡・建昌侯延齡、貴盛久、驕恣無狀、吏不能長持明法警之。上以春朝慈慶不爲禮銜、鶴齡等未發、而建昌侯坐故殺、爲御史論抵罪、繫待

決。市人劉東山者、素陰毒利、口逆上意、與其儕僞爲疏草、恫喝鶴齡、得且萬金矣。鶴齡不勝賂拒之、乃誣鶴齡兄弟毒魔呪詛上、盜內藏金寶、通慈慶侍人、至相與爲巫蠱。以急變聞、上大怒、下鶴齡等詔獄置對。東山等因得以株引素所不快人、定國・京山諸公俱坐累、繫三法司。大臣色奪、不敢訊。〔王〕佐謬爲厚東山者、次第探得其情、論誣妄法反坐。報、可。佐以三木囊東山等闕門外昂之、不及旬悉死。是舉也、中外以佐仁慈慶曲成。上孝稱社稷臣云。而〔王〕佐竟以憂思過度、得疾死」〔明萬曆四十二年刻本／『四庫禁燬書叢刊』史部第四十八冊、七〇〇頁下／七〇一頁上、北京出版社、一九九七年〕。

かくて嘉靖二十年(一五四二)には姉太后張氏が逝去し、嘉靖二十五年(一五四六)に張延齡も西市にて斬首に処された。

*76

刑科都給事中高時は郭勛と確執のあった大学士夏言と親交の厚い者であった(『明史』卷一百九十六「列傳第八十四、夏言」)、「給事中高時者、言所厚也、盡發助貪縱不法十數事」。以下に高時による弾劾内容を略述する。①南京・淮安・揚州・臨清(山東)・徐州・德州などに私店(私営の酒店か)を置いたり、車船に「羽国公」と記した金牌を懸け関所を騷擾したりと、民の利を害している。②太監蕭敬・魏彬・韋霖・甯瑾・溫璽の莊田と邸宅を占領している。③御製の位牌(官署や学校、寺廟に備え付けられた物)や御製の庵寺を破壊した。④運糧の士卒から銀で船を買取り、解体して分売した。⑤毎年の班軍(各衛の軍が京宮へ赴き操練を行う制度)で礼品を要求したり、兵士に支給される糧食を天引き

したりして、そのために半分ほどの兵士が軍を離れた。⑥官軍を擅に使役させ、月銭を上納しなければ休暇や帰郷を許さず、営務を妨害した。⑦逆賊張延齡と交流があり、彼の荘店や家事の管理をしている。⑧都の旧令では糧食を貯蓄してはならないが、邸に大量に貯蓄している。⑨漕運参将李節に円炉・方炉各百面を鑄造させ、方士款朝用（段朝用）に金銀を作らせた。⑩都察院巡閱御史を罷免させるよう建議した。⑪家人を朶顔邊郡（だがんへんぐん、東北部の国境付近）に住ませ、塩・茶を商いし、馬を交易している。以上、『明實錄』「世宗」卷二百五十三（嘉靖二十年九月）乙未に依拠。

- *77 郭勛が刻書したという『太和傳』については、『明實錄』郭勛の獄の項（「世宗」卷二百五十三（嘉靖二十年九月）乙未）に「尋有旨諭衛、同念助曾贊大禮、并刻『太和傳』等勞、令釋刑具、即問奏處分」（ついで詔があり、錦衣衛に指示することには、郭勛がかつて大札の議で（「世宗に」）賛同したこと、『太和傳』を刻したこと等の功勞を鑑みて刑具は赦免し、すぐに尋問してその処分を奏上せよ）という記載があるが、詳細は不明である。『太和傳』に言及するその他文献については拙著『三國志演義成立史の研究』一二二頁に述べた。

- *78 孫綱・錢得洪・馮煥は法司・鎮撫司にて鞫問、呉山・倪文は三ヶ月停俸とされた。

- *79 給事中劉大直は四月にも威賢らと共に郭勛を弾劾し、世宗の不興を買って半年の俸禄停止となっている。九月に再び郭勛の罪十二条を弾劾したわけであるが、その大半は私怨による言い掛かり

のようにも思われる。以下に要略記載。①鎮守太監の制度の復活を請うた。②勲臣と徒党を組んで首領となった。③「折俸」（外国からの貢物を給料の一部として官吏に支給する制度）を採用したが失敗した。④将官にみな胥吏を用いた。⑤外衛のために軍糧を求める上疏をした。⑥ひそかに侍衛の將軍に妻を娶らせた。⑦漕運の士卒に物品を掠め取らせた。⑧辺境軍の椿朋銀（軍馬を購入するために官軍に募金を強制する制度）を免除するよう請うた。⑨擅に軍政の官員を替えさせた。⑩辺境の監督官を罷免するよう建議した。⑪先祖を妄りに配享させた。⑫武臣を駕籠かこに乗せた。また大勢の官軍を死に追いやった。以上、『明實錄』「世宗」卷二百五十三（嘉靖二十年九月）乙未に依拠。

- *80 南京戸科給事中王曄は二度にわたり劾奏を上表した。第一の疏では「瓚則互分賄賂、共冠軍資、相蒙以私大蠹兵政。嵩則以助之私人代營第宅、致騰論列。守中則日造助第、從妻赴飲」（張瓚は（郭助と）賄賂を分け合い、共に軍資を掌握し、互いに守り合って兵政を食い荒らしました。嚴嵩は郭助の縁故者に邸宅を代営させていたことで糾弾されております。胡守中は日ごと妻を從えて郭助の邸へ酒を呑みに赴いておりました）、第二の疏では「助以掩罪賣直」（郭助はわざとらしく公正忠直の体を顯示して名声を獲得しておりました）と非難した（『明實錄』「世宗」卷二百五十五（嘉靖二十年十一月）癸卯の項に拠る）。

- *81 世宗が郭勛を投獄した後になって言官（諫官）による郭勛の弾劾は実は夏言の指示だったのではないかと疑念を抱いたことは、

『明史』卷一百九十六「列傳第八十四、夏言」に「慈慶・慈寧兩宮寡駕、勛嘗請改其一居太子。言不可、合帝意。至是帝猝問太子當何居、言忘前語、念興作費煩、對加勛指。帝不悅。又疑言官劾勛出言意」(かつて慈慶宮・慈寧宮に住む皇貴妃が亡くなった時、郭勛がその一つの住まいを太子の住居に改めるよう請うたが、夏言が反対し、帝の意見と一致した。この頃〔郭勛の投獄後〕帝がふと「太子はどこに住むべきか」と尋ねたところ、夏言は以前の言葉を忘れており、新たに起工する費用の節約を考慮して、答えた内容は郭勛の案と同様であった。帝は機嫌をそこね、また言官が郭勛を弾劾したのは夏言の指示ではないかと疑った)とある。

さらに嚴嵩が「夏言に虐げられている」と涙を流して訴えたことを受けて、世宗はいよいよ夏言の罪を問い、「郭勛を陥れたのは夏言の謀りである」と責めた(『明史』卷一百九十六「列傳第八十四、夏言」)。「嘉靖二十一年」六月、嵩燕見、頓首雨泣、懇言見凌狀。帝使悉陳言罪、嵩因振暴其短。帝大怒、手敕禮部、歷數言罪、且曰、「郭勛已下獄、猶千羅百織。言官爲朝廷耳目、專聽言主使。：〔後略〕」(嘉靖二十一年六月、嚴嵩は帝に召されて謁見すると、頓首して雨の如く涙を流し、夏言に虐げられている状況を訴えた。帝は夏言の罪を悉く述べさせ、嚴嵩は夏言のあらを暴露した。帝は大いに怒り、礼部に手敕を出し、夏言の数々の罪を並べ立てて言った、「郭勛が獄に落とされた件についてはやはり様々な謀りがあった。言官は朝廷の耳目でありながら専ら夏言の指示に聞き従った。：」)。『明實錄』では「世宗」卷二百六

十三(嘉靖二十一年(一五四二)六月)辛巳に記載がある。

*82 刑部尚書呉山は嘉靖二十年、十三道御史周亮らより郭勛の獄に關する職務を怠っているとして弾劾された人物である。

*83 『明實錄』「世宗」卷二百六十七(嘉靖二十一年(一五四二)十月)丁亥、「且郭勛既問、謂略其不軌之謀。不軌罪名、古今無可略之理。既曰不軌、却又擬案不合、令死于獄中、是何律法。」文意がとりにくい、世宗は劉三畏らが郭勛の罪案に不軌の罪を記載しなかったのはそれが捏造であったためとみなしたようである。

*84 「壬寅宮變」とは嘉靖壬寅(二十一年、一五四二)十月丁酉(二十一日)の夜、世宗が寵妃曹端妃の部屋で熟睡していたところを、宮婢楊金英らが絞殺しようとして失敗し、首謀者とされる王寧嬪、計画に与していたとされる曹端妃、連座した宮女達が市曹で磔の刑となった事件である(『明實錄』「世宗」卷二百六十七〔嘉靖二十一年十月〕丁酉)。事件の真相は明らかにになっておらず、『明史』卷一百十四「列傳第二、后妃二、世宗孝烈方皇后」には「然妃實不知也。久之帝始知其冤」(しかし「曹端」妃は実は知らなかった)のである。久しいのち帝はそれが冤罪であったことを知った)とあり、明・沈德符撰『萬曆野獲編』(中華書局排印本〔元明史料筆記叢刊〕、一九五九年)卷十八「刑部、宮婢肆逆」には「故老相傳、曹妃爲上所嬖、孝烈妒而竄入之、實不與逆謀。然而宮禁事秘、莫能明也」(長老が伝えるところでは、曹妃がお上に寵愛されていたため、孝烈皇后方氏が妬んで密かに宮女らを引導した

のであり、「曹妃は」実は弑逆の謀りに加わっていなかったのだという。しかし宮中の禁令で事実は隠されており、明らかにすることはできない」とある。ちなみにこの時捜査・鞫問を行ったのは太監張佐と高忠である。

郭守乾注 年表は『明實錄』を基礎史料として作成した。

*1 【郭守乾墓誌】に拠る。

*2 郭守乾が譚氏を娶った時期は【郭守乾夫人譚氏墓誌】に「爲擇對、得今武定侯郭君守乾、閭閻相敵、乃受六禮之聘歸焉。初入門、君尚居勳衛、未承爵。盖自乃翁蒼崑公謝世、業漸中微」（譚氏の父母は娘の）ために配偶者を選ぶにあたり、今の武定侯郭守乾の君を得た。勳戚の一門である点でふさわしく、六礼の聘（妻を娶る作法）を受けて嫁がせた。郭氏に嫁した時には、郭守乾の君はまだ勳衛の官にあり、「武定侯を」襲爵していなかった。舅の蒼崑公（蒼崑は郭助の号）が逝去してから家運は道半ばにして衰えた」とあることから、郭助の投獄以前のことかと推定される。譚氏が長男郭大誠と長女を出産したことは【郭守乾墓誌】に記載がある（時期は不明）。

*3 郭守乾は武定侯襲爵を願い出たとき錦衣衛親軍指揮使であった（『明實錄』「世宗」卷三百五十八〔嘉靖二十九年三月〕壬辰、「錦衣衛親軍指揮使郭守乾…〔中略〕…以祖功陳乞襲爵」）。

*4 譚氏の没年月日は【郭守乾夫人譚氏墓誌】に拠る。継室黃氏、側室とその子らについては【郭守乾墓誌】に拠る。

*5 【郭守乾墓誌】に拠る。

*6 【郭守乾墓誌】に拠る。

*7 郭守乾の長子郭大誠が武定侯を襲爵した時期は『明實錄』「世宗」卷五百四十四（嘉靖四十四年〔一五六五〕三月）に「○庚戌、命故武定侯郭守乾子大誠襲祖爵」とある。郭大誠の妻が宣城伯衛守正の娘であることは【郭守乾墓誌】に拠る。郭大誠の事蹟は『明實錄』に他八十五件見られるが、文学との関わりが見られないため本年譜では割愛する。ちなみにその息子の郭応麒は万曆四十五年（一六一七）二月に武定侯を襲爵する（『明實錄』「神宗」卷五百五十四〔万曆四十五年二月〕壬子、「准武定侯郭應麒襲祖爵」）。

*8 『明史』卷一百五「表第六、功臣世表一、武定侯」に拠る。

本論文は平成二十八年科学費助成事業・特別研究員奨励費・課題番号二六・一九八四「明代白話小説『三国志演義』成立過程と変容、及びその社会背景に関わる考察」の成果の一部である。

（二〇一六年十月三日受理）

（いのくち ちゆき 日本学術振興会特別研究員・本学非常勤講師）